不許転載

ひきこもり　Hikikomori

―民主主義ニッポンの子どもたち―

ひきこもり　Hikikomori　－民主主義ニッポンの子どもたち－

目　次

はじめに　　溶けたアイスクリーム　　5

Ⅰ　ひきこもりとは何か　　7

「精神病ではない」／病気とひきこもり／神経症、人格障害／社会的ひきこもり

ひきこもり者の数／ひきこもり者の割合／思春期内閉症／自我防衛／Hikikomori

「ひきこもりは突然、陥る」／

Ⅱ　ひきこもりの「ひらきなおり」　　17

ひきこもって何が悪い？／ひきこもりとインターネット／「ネットで稼ごう」

ひきこもりの応援団、カウンセラー／ひきこもりと「ゴーマニズム」

「カウンセリングでは治らない」／「稼げ、ひきこもり」／民主主義が生んだひきこもり

Ⅲ　ニッポンの教育　　25

教育改革／日本人はトップランナーになれるか／危うしニッポンの未来

総合的な学習の時間／先生は教えない／子どもたちよ、サバイバルせよ

自分を誉めたい／おもしろさ第一／学力低下／学級崩壊／授業内容の削減

学校週五日制

Ⅳ　ニッポンの子育て　　35

新たな忙しさ／親の二重拘束／ユメもチボーもない／こんな子いらない

愛情不足／いきなり型犯罪／自己愛／閉そく感の大安売り／もっといやしを！

ジコチューと「エゴロジー」

Ⅴ　ニッポンのエゴイズム（エゴロジー）　45

他人は手段／マス・エゴロジー／エゴロジーの洗礼／エゴロジーとひきこもり

エゴロジーと選択／進む選択社会／ついに登場「選択縁」／選択縁という幻想

選択と危機の同時進行／ひきこもりというタガ／タガは規則、規範

火の車ニッポンよどこへ行く

Ⅵ　ニッポンの民主主義　61

民主主義とは／権力／権力者もキレる／ナタデココと戦争の話

善悪を好き嫌いで決める／自由／人の義／平等／エリートを養成せよ

機会の平等／つりあいをとる／民主主義はつりあいを無視する／闘う人生

二極化現象の可能性／ひきこもり者も勝ちを目指す／答えは出ていないのか

Ⅶ　ニッポンの「甘え」　77

甘えとは／許されてきた「甘え」／欧米は理性の社会／甘えは非理性的

「甘え」と「神」／戦時体制と甘え／「ぎすぎす」と「ホドホド」

甘えが通用しない世界／甘えがやけくそに／もう甘えません

人に甘えずにいられない／甘えるんじゃない！／甘えは悪くない

Ⅷ　ニッポンの「和」と「権威」　91

聖徳太子の「和の精神」／「和」とは何か／三人寄れば文殊の知恵

民主主義には「こころ」不在／傲慢でなければ生き残れない／和と仏教

権威／権威と自由／なだいなだ氏の考え／権威なき調和／コギト　エルゴ　スム

人間が人間として育つとは／愛情と信頼／五分五分の関係

何がそれを許しているのか／権威は無意識に宿る／権威の否定と不安

ひきこもりの不安／権威にアンビヴァレントな日本人／権威によるコントロール

問答無用／信じ合うことで得られる安心

Ⅸ　ニッポンのコミュニケーション　　116

コミュニケーション花盛り／コミュニケーションに求められるもの

進化するコミュニケーション形態／コミュニケーションとは何か

コミュニケーションを求める人々／コミュニケーションによるコントロール

マニュアル・インフラ・戦略／自由選択という前提／自由な対話

コミュニケーションの進化と貧困／人間にとってのコミュニケーション

人間だけが持つこころ／人間の人間たるゆえん／民主主義とコミュニケーション

ひきこもりとコミュニケーション

Ⅹ　どうなるひきこもり　　132

ひきこもりが増える要素／不登校／蓄積適応社会／権威などない、という権威

時代の変化に対応する／どうやって生きていくのか

おわりに　　生ける日本人論　　138

参考・引用図書および文献　　139

序　溶けたアイスクリーム

「ひきこもり」は、現代日本が抱える大問題である。

バブル崩壊後の「失われた 10 年」を経て新世紀に入った今日であるが、この「10 年」がいまだ終わっていないことは誰しも認めるところである。そして、ひょっとしたらこの現状はこれから先も何年と続くのではないか、そんな暗い雰囲気が、われわれの行く手に立ちこめている。景気の低迷、デフレの加速、外国資本流入と産業空洞化、危うい外交、少子・高齢化問題、環境問題、医療ミス等々・・・。終戦以来、最大・最悪の危機に直面していると言っても過言ではない。

もちろん、頼みは将来を背負って立つべき若い世代である。しかし、決定的に困るのは、その彼らが危機を前に奮起せず、立ち上がらず、それどころかまるで日なたのアイスクリームか三日前の刺身のごとき、ぐずぐずベッタリとした醜態をさらしていることである。ちょっとことばが過ぎたかも知れないが、これが本当ではないだろうか。

そして、そんな彼らの中に「ひきこもり」が蔓延しつつある。何度もモノにたとえたら失礼だが、古くなってしまったアイスクリームや刺身がそのまま冷蔵庫に逆戻りして、金輪際出てこなくなったかのようである。また言い過ぎた。ひきこもっている本人たちや、その家族の方にしてみれば、さぞ傷つくことばだと思う。でも、これもまた本当のことではないだろうか。何も引きこもりの人たちが憎くて悪口を言っているのではない。事実と考えられることを書いているのである。「断じてそんなことはない！」という力強い反論が聞こえてきたら、かえってありがたい。

ここでひとこと断っておきたいが、われわれは、若い人々の多く、その中でもここで話題にするひきこもりの人たちが「世の中の役に立ちそうもない」から「駄目」と言うのではない。役に立つかどうかだけで人を判断すると、それは結局人間を「モノ」「道具」「手段」せいぜいよくて「人材」としか見なさないことになる。もちろん、他者や社会の役に立つというのは非常に大切なことで、多くの人はそうなれることを目指すべきである。しかし、では反対に、役に立たない人間は存在の意味や価値がないのかというと、決してそんなことはない。具体的なことはこれから述べていくが、役に立つかどうかだけが人間のすべてなのではない。人間の人間たるゆえんは他にある。われわれが若い人々の多くに対してもつ考えは、彼らが役割以前に、人間の人間たるゆえんを失いつつあるのではないか、失うというのが言い過ぎなら、ずいぶんと希薄になっているのではないかという危惧であ

る。もちろんこれは若者だけに見られることではなく、多くの現代人に当てはまることである。先に挙げた今日的な社会問題は、どれもが「人間性喪失の危機」という共通の根から枝分かれしたものである。

さて、話を戻して、ひきこもりに関わり、活動したり意見を述べたりする人の大部分は、ひきこもりは「甘え」や「怠け」ではないと言う。そういう「偏見」がある限り、ひきこもりはなくならないし、本人たちや家族は決して救われないと言う。このような考え方にも、多少は当たっている点があるだろう。しかし、一説には百万人を超えているというひきこもりの中には、甘え、怠けている人も相当数いるのではないだろうか。もしこの予想が当たっているとすれば、そのことを正確に認識しないと、それこそいつまでたってもひきこもりはなくならないし、家族の苦悩も続くことになろう。

彼らには甘えや怠けがあるだろうし、社会や他人への不信感、場合によっては恨みや復讐心もあるだろう。恐怖心も考えられる。また、ほとんど何も考えず、感じてもいない場合があるかも知れない。人間の心に起こった何かが、ひきこもりという行動として表れているのだから、ひきこもりの原因は人の心の数だけあるとも言える。となると、人の心とは何で、どういう仕組みになっているのか、これがわからなければ、ひきこもりの原因は決してわからないことになる。原因がわからなければ、対策も立ちようがない。これはまさしくひきこもりをめぐる現状に当てはまる。

人の心とは何か、それはどのような仕組みになっていて、どのように働くのか、それを解き明かす学問は心理学である。われわれは、ひきこもりを心理学的に解釈し、そこから有効な手立てを導き出すことが可能だと考えている。しかし、出し惜しみをするわけではないのだが、その点はこの本であまり詳しく述べず、別の機会に譲ろうと思う。かなり専門的な領域に踏み込む必要があるし、そうなると読者の対象も限られてしまうからである。ひきこもりはいまや社会現象、社会問題となっており、できる限り多くの人と問題を共有できることが望ましいと思う。したがって、ここでは、ひきこもりがなぜ生まれてきたのかという社会的な背景を、一般的な面から広く考察していきたい。そしてもしこの本が幸いにも多くの人の目にふれるようになったら、その状況を踏まえ、あらためて心理学的なことを中心に取り上げていきたいと考えている。

Ⅰ　ひきこもりとは何か

「精神病ではない」

まず、いま問題になっていて、ここでこれから取り上げていく「ひきこもり」とは、どのような状態を指すのか。2001 年５月の各新聞で、厚生労働省と国立精神・神経センター精神保健研究所が、ひきこもりに関する初の全国調査を行ったと報じられた。その際、調査対象になったのは次のような状態に当てはまる人だとされる。

「精神病以外で、６ヶ月以上家族以外の人と交流しない中学生以上の人」

最初に「精神病以外で」と断ってあるのは、精神病（特に昔から二大精神病と言われているのは精神分裂病と躁うつ病）や神経症（ノイローゼと言った方が通りが良いかも知れない）、あるいは人格障害などよって、家や部屋に引きこもってしまう症状がよく現れるためで、そういう特定の原因が見当たらないのに引きこもりの状態を呈してしまう人々が調査対象になったわけである。いま書いたように、これから先は、現在社会的な問題となっており、この本のテーマとして取り上げる状態像をすべてひらがなの「ひきこもり」、精神医学や心理学で考えられる症状などについては「引きこもり」と漢字一字を使って書き分けることにする。

病気とひきこもり

精神医学的な説明をもう少し続けると、いまからかなり前、具体的には百年ほど前から、引きこもりは精神や神経を患った人にとてもよく見られる症状として記録されてきた。先に挙げたように、重要な精神病として精神分裂病があり、この病名を初めて正式に用いたのはスイスの精神医学者ブロイラーである。1911 年のことであった。ブロイラーは、精神分裂病の重要な特徴をいくつかにわたって整理したが、その中に「自閉」を定めた。現在、精神の病気や障害が診断される際によく用いられるのは、アメリカ精神医学会が定めた『精神障害の診断・統計マニュアル』第４版（Daignostic and Statistical Manual of mental disorders 4th edition. 略して DSM-Ⅳと呼ばれる）であり、その精神分裂病の診断基準には、五つの「特徴的症状」の中に「陰性症状、すなわち感情の平板化、思考の貧困、または意欲の欠如」があげられている。ブロイラーが言った「自閉」はだいたいこれに相当すると考えら

れるが、両者を見比べてみるとわかるように、この場合、家や部屋に閉じこもりっぱなしで外に出てこないという行動上のあらわれが一番大事なわけではない。それ以上に、患者が自分だけの空想や妄想の世界の中だけに生きているという、内面の問題が重要である。DSM-Ⅳと並んで有名な診断基準である WHO（世界保健機関）作成『精神および行動の障害の分類』第 10 版（The ICD-10 : International Classification of mental and behavioural Disorders 10th edition）には、共通した部分の記述として、次のようなところがある。

「著しい無気力、会話の貧困、および情動的反応の鈍麻あるいは不適切さのような、ふつうには社会的ひきこもりや社会能力の低下をもたらす」

「関心喪失、目的欠如、無為、自分のことだけに没頭した態度、および社会的ひきこもり」（傍点筆者）

この「社会的ひきこもり」というのは、斎藤環氏の著作のタイトル（『社会的ひきこもり　―終わらない思春期』）にもなっていて、英語の social withdrawal を日本語に直訳したものである。

二大精神病のもうひとつ、躁うつ病のうつ状態の時に、引きこもりの症状が出やすいことは、誰にもイメージしやすいと思う。近ごろうつ病に関してはずいぶんといろいろなことが言われるようになり、「心の風邪」という一種の別名も、だいぶ定着した感がある。医学的なことを厳密に言えば、うつ病は「気分障害」という大きなまとまりと、その細かな分類によって表されている。DSM-Ⅳの診断基準を見ると、朝から晩まで泣いていたり悲しんでいたりすることが毎日続くとか、喜びや楽しみの様子がまったく見られないとか、不眠やその反対の寝過ぎとか、過剰な罪悪感にさいなまれるとかいったことが挙げられている。「何にもする気が起こらない」と言って一日中布団から出てこなかったり、まったく食事をしなかったり逆に食べ過ぎたりして、明らかに引きこもりがちな面が観察される。

神経症、人格障害

神経症はどうであろうか。神経症はけっこう広い概念で、分類もかなり細かくなっているが、引きこもりとの関係が強いと言われるものを挙げてみると、対人恐怖、社会恐怖、広場恐怖などの「恐怖症神経症」がある。患者は、これら恐怖を感じる対象について「そんなもの、本当はちっとも怖くなんかない」と思うこともできるのだが、いざその場面に

直面したり、あるいはそのことを想像しただけでも気持ちや体のコントロールがきかなくなってしまう。恐怖症の人は、自分が恐怖を感じるものを何とか避けて生活を送るか、どうしてもやむを得ずそれに直面してしまう場合、とてつもない不安と苦痛を抱えながら歯を食いしばって耐えている。しかし、生活上避けることが難しかったり（社会恐怖の人が会議での発表を命じられるなど）、我慢に限界が来たりした場合、残された手段は家に閉じこもるくらいしかなくなってしまう。

また、他にもよく知られているものとして強迫神経症がある。電車のつり革やドアノブをさわった後、手がものすごく汚れてしまった気がして、何回でも、何時間でも洗い続けなければ気がすまない、外出した後、ガスの元栓は閉めたか、玄関の鍵はどうだったかと気になって仕方なく、何回でも確認しなければならないなどがよくあることで、これも恐怖症と同じく、本人は「こんなバカバカしいこと、本当はしなくてもいいのに」と思うことができる。しかし、そうは思えても、どうしてもやめられないのである。それが高じてくると、その行為が日常生活に支障をきたす、つまり必要なほかのことができなくなったり、家族を巻き添えにしたりして、患者はやはり家にこもりきりになってしまうことがある。

あと、近年非常に注目されているものに、人格障害がある。DSM-Ⅳにおいて人格障害はABC 三つの群に分けられており、それぞれは A 群［妄想性人格障害・分裂病質人格障害・分裂病型人格障害］、B 群［反社会性人格障害・境界性人格障害・演技性人格障害・自己愛性人格障害］、C 群［回避性人格障害・依存性人格障害・強迫性人格障害］の、合計１０類型が考えられている。これこそ、詳しい説明をし出したらきりがない。きわめて大切な問題を含んでいるのだが、またの機会にすることにして、引きこもりとの強い関係が言われているものには分裂病質、分裂病型、境界性、自己愛性、回避性、強迫性などの人格障害があることを紹介するにとどめておこうと思う。

家や部屋に引きこもりがちになるという行動上のあらわれを精神障害の観点から見ると、大まかに言っただけでも以上のようなものが考えられる。それらの中には、家族や周囲の人から原因や病名の「アタリ」をつけられそうなものがあるし、反対に何が何だかさっぱりわからないというものもあろう。いずれにせよ、本人が苦悩し、周囲の人々も途方に暮れるようなことがあったら、早めに専門医の診察を受けることが必要だと思われる。

社会的ひきこもり

このような原因や病気が考えられず、診断でも異常がない、あるいは仮に精神障害があっても、それが主たる原因とは考えられないのに、他人や友だちはおろか家族との交流も絶ち、みずからを社会から隔離しようとする「ひきこもり」の人々が増えてきているわけである。専門的な見地からは、先ほども紹介した「社会的ひきこもり」と言われたり、あるいは「非精神病性ひきこもり」、また、精神障害などによって「二次的に引き起こされた」ものでは「ない」という意味から、「一次的ひきこもり」と呼ばれたりもする。

こうした人々が注目されるようになったのは、だいたい 1990 年頃からであるという。ところで、このひきこもりのように、以前は見られなかった新しい問題が表面化してきた場合、その事態を的確に表現できる定義が必要になる。ひきこもりも、さまざまな定義の試みを受け、次第に共通の概念ができあがりつつあるようである。

厚生労働省の考え方は先に述べたとおりで、他の定義も若干紹介すると、次のようなものがある。

斎藤環氏は、自身の定義に、「基礎疾患がないこと」「６ヶ月以上社会参加していないこと」を含めている。斎藤氏の言う「社会参加」とは、必ずしも就労や就学のみを指すのではなく、「家族以外の親密な人間関係を持つこと」を指しているとされる。

川谷大治氏の定義は、以下のようである。

「対人関係と家庭外の社会生活（各種の学校、会社、サークルなど）の両方を避けて、家にひきこもって誰とも接触をもとうとしないこと」

せっかくの機会なので、ひきこもりについて研究している人々の考えを、少々長くなるが、他にもいくつか紹介する。

「長期間（通常半年から１年以上）にわたり、通勤や通学、あるいは友人とのつきあいなど社会生活を送れず、大部分を家庭内で過ごしている状態」（塩路理恵子，久保田幹子，中谷敬の各氏）

「今日的な意味において、ひきこもりは何らかの心理、社会的脈絡で、人間関係の不信やコミュニケーション不全に陥っている状態である」（武藤清栄氏）

「子どもが学校に行かずに、友だちや先生など、人との関わりを避けて家族の者とし

か関わらない。あるいは自分の部屋にこもって、親やきょうだいとも距離をとり、一緒に食事をしなくなったり、居間にも出てこない、トイレに行くのにさえ誰とも会わないようにする」（田中千穂子氏）

「1) 『ひきこもり』の空間的程度は、分裂病性ひきこもりのようにすべての対人関係からのひきこもりではなく、限定的である。社会活動には関与しないが家庭内では家族との交流を保っているようないわば家庭内ひきこもりの程度から、家族との交流を避けて自室で一日中すごしながらも、自分の必要に応じて最低限の交流はするような自室内ひきこもりまである。

2) 時間的にみると、年余にわたる非常に長期間のひきこもりを示す。したがって、ひきこもりの開始が十代であっても症例化するのは二十代に入ってからであることが少なくない。また、三十代のひきこもりも珍しくなくなってきている。

3) 治療や援助をもとめる動機づけの程度は低い。ひきこもり初期に、医療機関や相談機関を受診することはあってもごく短期間に終わっており、それ以上の受診の機会を失ったまま、家庭の中でひきこもり生活に安住している。

4) したがって、多くの場合、本人が自発的に受診することは少なく、家族の誰かが、受診の引き金をひくことが多い。

5) ひきこもり群は単一の精神障害ではなく、多様な精神障害から構成されている。

6) そうではあるが、長期のひきこもりという共通の現象を呈している。

7) この現象は、近年の社会・文化・家族の構造的変化と密接に関連しているようにみえる」（狩野力八郎・近藤直司氏ら）

ひきこもり者の数

このような形でとらえられるひきこもりの人たちは、どのくらいいるのであろうか。斎藤環氏は「中央公論」誌上（「ひきこもり」の比較文化論　－日本における「甘え」の両義性．2001 年２月号）で、「日本の『ひきこもり』人口は推定で五十万人から百万人程度というあたりで一応の合意を得ている」と述べている。少ない方の五十万という数字の根拠については、

「『ひきこもり』は不登校と関連性が高く、ほぼ九割に不登校経験があることが知ら

れている。それゆえ不登校人口の動向を知ることで、『ひきこもり』人口の動向を推定することができるのだ」

として、中学生の不登校人口、および中学、高校、大学を中退・卒業したのちに進学、就職をしなかった子どもの数を割り出し、それらの総数を五十四万二千人と計算している。

また、教育評論家の尾木直樹氏が所長を務める民間の臨床教育研究所「虹」が、全国 19 道府県でひきこもりに関する市民意識調査を実施し、その結果から試算して「全国で約八十一万六千人の引きこもりの人がいると推定できる」と発表されている（2001 年４月 23 日、毎日新聞）。

このように、ある程度信頼のおけるデータをもとにしても、その数え方によって数十万単位で差が生じるのが現状である。もっとも、正確な数がわかったら何かがどうにかなるのかと言えば、別にそんなことはない。ただ事実が知られるだけである。ここで、少々乱暴ではあるが、ひきこもり人口をきりのよい百万人と仮定してみる。ひきこもりはどういうわけか男性に多く（解釈はいろいろとされている）だいたい男性が７割から８割を占めると言われる。少ない方をとって考えてみれば、男性七十万人、女性三十万人となる。

ひきこもり者の割合

あらゆる年齢層の人がひきこもりになってしまうわけではない。厚生労働省は「中学生以上の人」を考えている。また、初老期以降の人がひきこもりに当たることも考えにくい。斎藤氏が直接診ているひきこもりの最高齢者は四十代後半とのことである（週刊文春 2001 年３月 29 日号、「日本を滅ぼすひきこもり問題」）。したがって 10 代から 40 代の人を対象に考えればよいことになる。ただし、40 代は比較的少ないと考える方が自然であろう。

2001 年１月１日時点の日本人の人口を見てみると、次のようになっている。

表１　10 歳代～40 歳代の日本人人口（2001 年 1 月 1 日現在，総務省）

(単位：万人　単位未満が四捨五入してあるため、合計と内訳の計に不一致が生じている)

年齢	男性	女性	合計
10～14	330	314	644
15～19	380	361	741
20～24	430	408	838
25～29	498	476	974
30～34	437	425	862
35～39	405	396	801
40～44	385	380	765
45～49	436	435	872
合計	3,301	3,195	6,496

10 代～40 代人口の合計に対するひきこもり推定人口の比率は、約 1.5%である。これを男女別に分けて考えると、男性は 3,301 万人に対して 70 万人で約 2%、女性は 3195 万人に対して 30 万人で約 0.93%となる。ごく大まかに言って、青年～壮年期の男性は 50 人に一人、女性は 100 人に一人がひきこもりに当たることになる。先ほど述べたように、年代によって比率は異なり、特に青少年期の男性ではもっと上昇するはずである。20～30 人に一人の割合ということも考えられ、もしそうであればかなりの高率と言ってよいだろう。

思春期内閉症

すでに精神障害との関係で少々説明したように、引きこもりという症状そのものは、いままでにも国内外で長く研究対象にされてきた。培風館の『心理臨床大辞典』で「引きこもり」を引いてみると、三項目の説明を得ることができる。

一つめは、山中康裕氏が 1978 年に提唱した、「思春期内閉症候群」という概念に関するものである。これは不登校（以前は「学校恐怖症」と呼ばれていた）の状態をより厳密に捉えようとするもので、六つの特性が挙げられており、その中に引きこもりが含まれている。参考までにその六つを紹介する。

①登校強迫

②引きこもり

③性同一性拡散

④先取り思考

⑤高い自尊心

⑥興味限局

少々なじみのない専門用語が含まれているが、おおよそのイメージはつかんでいただけることと思う。これらはあくまでも「思春期」内閉症の症状や問題であるから、思春期を乗り越える過程で克服されたり、もしそれがうまくいかなくても、続く青年期で社会参加や新しい対人関係に直面する中で、なにがしかの望ましい解決が期待されていたであろう。いまのようにひきこもりが三十代、四十代にまで長期化し、深刻な問題になることは、当然のことながらこの概念には含まれていなかった。

自我防衛

二つめは、「精神分析学」の創始者として有名なフロイトの「自我防衛」の考え方に関するものである。フロイトの自我防衛とはだいたい次のようなものである。人間は、不快感や羞恥心、罪悪感、不安などの激しい心の揺れ動きを意識することで引き起こされる心理的な苦痛に対し、それを無意識の世界に押し込めることで心の安定を得ようとする、と言われる。この、自我を守ろうとする保護的な働きが自我防衛である。

いろいろな防衛の方法は「防衛機制（ディフェンス・メカニズム）」と呼ばれ、「投影」「同一化」「昇華」などは中学校や高校の保健体育の教科書にも取り上げられてわりに有名である。

フロイト以降、精神分析学派は世界中で絶大な力をもち、現代も精神科の治療はほとんどすべてと言っていいくらいこの考え方を基礎にしている。その中の一人であるビブリングは、防衛機制を 24 の「基本的（一次的）防衛機制」と、15 の「複合的（二次的）防衛機制」に分類し直した。前者の中に「引きこもり（withdrawal）」がある。

以上の考え方では、人（患者）が、心のメカニズムを働かせて自分を守らなければいけないような心理的抑圧や苦痛が取り除かれれば、自然と防衛機制も消滅することになる。原因が見当たらないのに何年もひきこもりが続く状態は、この考えでは理解できないことになってしまう。

三つめの説明も、フロイトの防衛機制のひとつ、否認に関係するものである。

要するに、いままでの精神医学や心理学では、ひきこもりを解釈することができない。現在日本で主流の精神医学や心理学は、もちろん欧米で生まれ育ったものである。大きく言えば、従来の欧米の常識が、現代の日本に通用しなくなった、ということである。
実際、欧米人にとっては、日本のひきこもり現象はまったく理解が不可能である。もっとも、日本人自身にもわかっておらず、多くの人が途方に暮れているわけであるが、少なくとも日本人は多くのひきこもる人たち（大半は若者）を実際目の前にしている。欧米人にとっては、見たことも聞いたこともない人々であり、現象なのである。われわれ以上に「未知との遭遇」であろう。

Hikikomori

したがって、欧米人は、ひきこもりを Hikikomori として考える。いままで使ってきた withdrawal では、この事態を的確に言い表せないのである。相撲が sumo、寿司やすき焼きが sushi、sukiyaki と呼ばれるのと同じであり、ひとつの日本文化として考えられている。

アメリカの誇る世界的な雑誌「TIME」は、2000 年 8 月 28 日号に Hikikomori の記事を載せた。タイトルは「Natural-Born Killers?」、直訳すれば「生まれついての殺人者？」というわけで、ひきこもりに関わる人にしてみればムッとくるような過激なものである。書き出しに取り上げられているのは、大分の 15 歳少年による一家六人殺傷事件、岡山の 17 歳少年が起こした金属バットによる友人殴打・母親殺害事件、そしてゴールデンウィークでにぎわう日本を一瞬のうちに凍りつかせた、やはり 17 歳少年によるバスジャック事件等、2000 年に続発した一連の青少年凶悪犯罪である。犯人の少年たちに共通してひきこもり（あるいはその傾向）が見られたことは日本のマスコミも大々的に取り上げ、国内でもひきこもりに対する認知度は飛躍的に上昇したし、ひきこもりは何をしでかすかわからないという風潮もかなり広まったであろう。直接的で露骨な発言はさすがにニュースで聞かなかったが、反対に「ひきこもりを犯罪の温床とするのは間違いだ」という識者のコメントがしょっちゅう報道されたから（それはいまでも続いている）、「やはりひきこもりは世間から色眼鏡で見られている」ことがかえって明らかにされたとも言える。

しかし、英語圏の読者はよりストレートな表現を好むかも知れない。TIME 誌としても少々過激なタイトルで読者を引きつける必要があるだろう。そもそも Hikikomori など見たことも聞いたこともないのだから、凶悪事件の犯人に Hikikomori という共通点があったと

なれば、記者も「ほお！ナルホド」となって、その思いが見出しや内容に反映するのは自然の成り行きなのかもしれない。日本のマスコミが、この TIME の扱いにほとんど反応しなかったのは少々不思議でもある。

また、2000 年 12 月５日付のイギリス紙「Independent」も、「This man won't leave his room. And he's not alone（この男性は部屋から離れない、そして彼は孤独ではないのだ） Japan's missing million（日本の失われた百万人）」という見出しで Hikikomori を扱っている。TIME に比べればかなりおとなしいものである。ちなみにこの「Independent」というのは「独立した、自治の」を意味する社名だから、名は体を表すごとく、独立自治をモットーとする新聞社が、家庭から独立できないひきこもりを取材するというのは一種つじつまがあっていると思う。

Independent 紙は、斎藤環氏らにインタビューし、子どもが成人してもなかなか家庭から独立しなかったり、一歩外へ出ると常に他人との比較にさらされたりするといった日本独特の風潮を紹介して、それらと絡めて Hikikomori を紹介している。もちろん、このようないわゆる「日本人らしさ」は、いままでにそれこそいやと言うほど他ならぬ日本人自身によってかえりみられてきたことであり、自虐的と言われるほど反省してみても、なおひきこもりが理解できないし、克服する有効な手だても見つからない。したがって、海外のメディアに映してみても、やはりひきこもりは正体不明のままである。おそらく欧米人の大半も「へえ、（やっぱり）日本人って変わってるなあ！」と、あらためて思い直すくらいが関の山ではないだろうか。

この他にも、インターネットで検索したところ、「wdog.com」というサイトに「Hikikomori : Homicidal Teens of Japan」という記載が見つかった。「ひきこもり：日本の殺人者的十代」である。例の TIME の記事を検討したり、Oniki Yuji という、名前からすると日本人と思われる人が、日本漫画などの専門雑誌「Pulp」に寄せたコラムを紹介し、Hikikomori は日本の教育システムに原因があるのではないかとする Oniki 氏の意見に賛同したりして、比較的まじめに問題化しているようだが、それにしてもやはりこのタイトルである。Hikikomori に対する外国人の見方は、ずいぶんと固定化してきているようである。

「ひきこもりは突然、陥る」

外国人がひきこもりをどう見ようと、何を発言しようとかまわないと言えばかまわない。しかし、それを置いておくにしても、われわれ自身がいったいこの現象をどう理解し、ど

う対応していったらよいのか、ほとんど五里霧中であることもまた事実だ。犯罪の芽を彼らのうちに見出すのが正当なのか、「そんなことはない」と言う精神科医やカウンセラーの意見を信じるべきなのか。後者のように思いたくても、実際前者のような事実が頻発しているではないか。

メディアに答えを求めたくても、これがまたよくわからない。たとえば 2001 年５月 21 日付読売新聞には「ひきこもり体験　詩集に」という記事が載り、この詩集そのものはけっこうとしても、それに対する読売のコメントは、あまりにも頼りないと言うか、かえって世の親の不安を煽るようなことすら書いてある。たとえば次のような部分である。

「ひきこもりは突然、陥る。・・・ひきこもりは、大人へと成長する過程、つまり社会へ出ようとする時に、それができずに内へとこもってしまう状態だ。子どもにとって社会と同じ意味を持つ父親とのかかわりは、解決の一つのポイントとされる。・・・特効薬はないという。しかし、・・・必ず解決方法が見つかるはずだ」

重箱の隅をつつくような抜き出し方だとは言える。しかし、これらを読んで安心感をもてる親は、ほとんどいないだろうと思う。反対に不安が増幅され、悪ければ疑心暗鬼に陥ってしまうのではないだろうか。「大丈夫、解決策は必ずあるから」と安易に請け負われても、「ホント？　じゃあ教えて」と頼んだら「いや、そりゃまあどっかにあるっていうハナシで、私がそれを知っているわけじゃあないんですよ。それは自分でさがすもんでしょう」などとかわされてしまいそうである（べつだん記事にケチを付けたいのではない）。

とにかく、ひきこもりを考えることが、日本社会、日本文化を考えることにほかならないのは確かであり、これはすでに他の人も述べていることである。海外もそういう目で Hikikomori を見ている。ものは考えようで、ひきこもりに文化的な面から取り組むことで、日本社会と日本人は、あらたに一皮むけるチャンスを得られるのかも知れない。もちろん、それをチャンスとしてものにできるかどうかは、他ならぬ日本人自身にかかっている。

Ⅱ　ひきこもりの「ひらきなおり」

ひきこもって何が悪い？

冒頭に、ひきこもりは日本の大問題であると述べた。ではなぜ問題なのか。馬鹿馬鹿しい、そんなこと言うまでもないわい、と感じる人も多いであろう。その気持ちもわかる。しかし、こんな問いを設定しなければならないような雰囲気が、いまの日本にはある。

これは、例の「なぜ人を殺してはいけないのか？」という問いに、一脈通じていると言える。このことばも一時はたいへんにはやり、月刊総合雑誌が特集を組むほどであった。いまでもなお散発的に繰り返されており、当然誰からも、どこからも重みのある答えは出されていないのだが、この問いはもはや新鮮さを失い、賞味期限が切れてしまったようである。つまりほとんどの人がひと舐めしただけで、味わい、咀嚼し、消化して排泄（は余計か）する前に、飽きてしまった。「どうして学校へ行かなくちゃいけないの？」「どうして援助交際しちゃいけないの？」　いいじゃん別に、誰にも迷惑かけてるわけじゃあるまいし、これが決め台詞である。これが出てしまうと、もうそこから先に進めなくなってしまうことが多い。そうか、そう言われりゃそうだよなと納得する人もいるだろう。こういう人は案外多いのではないか。数年前、詳細は忘れてしまったが、ある高校の先生がソープランドへ行ったところ、そこで自分の学校の生徒が働いていた。その先生は「こんなことをしていてはいかん」と説得するつもりでその子を指名、最初は本当にお説教していたのだろうが、次第にその子の常連客になってしまい、何度か通っているうちに発覚して条例違反で捕まった、こんな事件があった。どことなく哀れを催す話で、苦笑いが出てくるが、援助交際などでもよくある話かも知れない。

そこまで巻き込まれないにしても、誰にも迷惑かけてないと開き直られると、とたんに話す気が失せてしまう人もいるだろう。駄目だこりゃ、こんな宇宙人に何を言っても時間の無駄、という感じである。「もうオマエとは口をきかん！」と、即座に怒り出す人もいると思う。

ひきこもりとインターネット

ひきこもりにも、「いいじゃん、ほっといてよ」「べつに迷惑かけてないでしょ？」というところが、多分にある。もちろん、百万人以上いるのかも知れないのだから、言い分はそれこそ百万人百万様であろう。「いい歳して甘えるな！」「若い者が何をぐうたら怠

けているんだ！」「お前のはぜいたく病だ！」等の厳しい叱責に対して心底傷つき、立ち上がれないほどの思いを味わう人も多いと思う。「そうだ、ボクは本当にダメな奴だ、この世の寄生虫なんだ」と、罪悪感にさいなまれる場合もあるだろう。

しかし、あらゆるひきこもり者に等しく開き直りを保障するシステムが整備されつつあるのだ。ひとつはパソコンとインターネットの普及、もうひとつは心理カウンセラーの存在である。

インターネットは、ひきこもる人が、ひきこもったまま社会とつながる手段となった。『ひきこもりカレンダー』の勝山実氏は言う。

「学校に行かなくたって、友達はできる。
しかも、学校なんかじゃ出会えないような魅力的な仲間ができる。
これがネットの魅力」

「・・・パソコンにお金を注ぎ込みましょう。ひきこもりながら世間に入っていける魔法のマシン、パソコン。パソコンを与えるとひきこもりが悪化すると思って与えない親もいるようですが、逆です。パソコンがないとひきこもりは悪化します。パソコンはひきこもりを確実に治します。治らなくても、人間らしくなってきますよ。

まず、自分のためのパソコンを手に入れましょう。自分のためです。親子の交流のためではありません。間違えないように。親が使い方を聞いてきても、全部無視しましょう。親に買わせて、自分で使う。パソコンで見えない相手とコミュニケーション。気楽で楽しいひきこもりライフ」

さらに「『ひきこもりカレンダー』出版裏話」として、次のように述べる。

「まず言いたいのはひきこもった状態のまま本は出せます。打ち合わせとかそんなのないです。原稿はメールで送り、書くネタがなくなるとメールで編集者がこんなネタはどうですかとヒントをくれます。嫌な人間関係もなく、ひきこもりを満喫しながら本は作れるんですよね。・・・

なぜ書き終えた後も働かないかっていうとそれはねぇ、印税生活に味を占めてしまったからです。だって今まで一万円しかなかった銀行口座に何十万という金がポンと入ったらこれが正しい生き方なんだなと思います、誰でも。・・・文章書くって遊びじゃない

ですか、遊んでお金がもらえるって言う、こういうことがあるってことを学校で教えないと。しかも努力とか忍耐なんてないですからね。遊んでというか好きなことでお金を稼ぐのがふつうで常識の世の中になるようボクは祈ります。・・・

で、本発売直後の反応なのですが、友達とかの反応は『いいなあ』ですね。お前なんにもしてないのに、登校拒否が増えたお陰で印税かよーというのが周りの反応です。類は友を呼ぶというのかボクの周りでは楽な仕事でたくさんのお金を得ることが素晴らしいことだという考えが定着しているので、その辺は世間の人とは違うかもしれないけど。ボクの友達もかなり楽して稼いでいます。人間は成功するように出来ている。楽して稼ぐ道を求めれば楽して稼げる場にたどり着けるそんな気がしてきた」

（「総員『自宅待機』せよ！」　中央公論 2001 年６月号）

「ネットで稼ごう」

社会とつながるだけでなく、ネットを使えば収入も得られる。ひきこもり者の多くは「寄生虫」「タダ飯喰らい」「ゴクツブシ」等々の非難を浴びせられていると想像できる。その非難が当たらなくなるのだ。また、勝山氏が責められる際の決まり文句に「税金払え」というのがあったそうである。勝山氏は、消費税を払っているからいい、と書いているが、何の何の、印税が入り原稿料が入り、イベントやテレビ・ラジオ出演のギャラも入ってくるから、定職に就いている人よりずっと高額の税金を払うようになる可能性は高い。経済的理由をもって非難されるいわれはなくなるのである（もちろんごく一部の人に限られるだろうが）。

「オヤジとオフクロさぁ、オレがひきこもっているお陰であんたら養ってやれるかもしれないんだぜエ、粗末にしたら罰が当たるよホントに。オレだって親孝行してやりたいしよォ」と凄まれて返すことばもない、こういうことが現実になりそうである。

インターネットを利用していれば、ひきこもり関係のサイトを見たことがある人は多いであろう。百花繚乱はオーバーとしても、相当なにぎわいを見せていることはまちがいない。凝ったページ、豊かな色調やイラスト、そこで語られていることばの明るさは「これがひきこもりのページ？」と驚かせるに十分である。勝山氏が彼らに与えたインパクトの大きさは想像するに難くないし、第二、第三の勝山を目指している人も多いのではないか。つい、「これだけやる気があるんなら、少しは外に出てみたら？」などと「不用意」に言ってしまいそうである。もちろん、そんなことをしたら、たくみな弁舌が発達したひきこ

もり者にフフンと冷笑され、次いでギャフンとやりこめられてしまうのがオチだろう。

ともかく、ひきこもり者にとってパソコンが「魔法のマシン」であるのは、誇張でも何でもないと思われる。

ひきこもりの応援団、カウンセラー

さて、パソコンは機械だが、カウンセラーは人間である。この人々がまた、ひきこもり者の開き直りを強力にバックアップしているのだ。こう書くと、単なる難癖、イチャモン、誹謗中傷のように聞こえ、そう非難されたら少しは譲ってもよいが、まったくの間違いでもないと考えている。

たとえば、田中千穂子氏の『ひきこもりの家族関係』という本がある。その帯に、赤い字で躍っているのは「『ひきこもる』ことは、そんなに悪いことなのか!?」という一文である。さらに本文には次のような部分がある。

「人は、『ひとりの世界』のなかで自己と対話し、内なる関係性の世界を育んでいきます。私はひきこもることによって、『ひとりの世界』を求めようとする子どもたちに、ある種、自然で健康な『いのち』の回復力を感じるのです」

この論法で行くと、ひきこもりを経験しないまま大人になり、社会に出ていった人は不自然で不健康である、ということになる。田中氏は「いや、そういうことを言いたいのではない」と反論かも知れないが、結局はそういうことである。

また、次のようにもある。

「どれくらいのひきこもりの時間がその個人にとって必要か、ということは一概には言えません。極論すれば必要な十年間、という場合だってあるだろうと私は思っています。私は人がひきこもるということ、それ自体を悪いことである、とは捉えておらず、意味ある行為と考えているからです。しかし、そのためにはひきこもっている間を『意味ある時間』にする必要があります」

ひきこもりと「ゴーマニズム」

一年も二年も、家はおろか部屋からさえ出てこない、このままでは我が家はどうなって

しまうのか、というせっぱ詰まった思いをもって、家族はカウンセラーのもとを訪れる。ひきこもり者が直接カウンセリングを受けることは少ないと言われるが、訪問カウンセリングという方法もあるし、意を決して自分から出かける人もいる。その際、ひきこもっている本人にしても、「このままでは自分がダメになってしまう」とか「これでは生きている意味がない、生まれてきた甲斐がない」などと思い詰めているのであろう。

そういう人々に対して、多くのカウンセラーの言うことは、「いいんです、ひきこもっていても。それがあなたの生き方なんです。自信をもってひきこもりなさい。どうせひきこもるんなら、楽しく生き生きとひきこもったらどうですか」、いくらなんでもこの通りに言うカウンセラーはいないと思うが、要約すればこういうことである。

これはいったい何なのか。麻薬か麻酔である。ことばのクスリで苦痛を緩和しているうちに、本人や家族がみずから成長し、変容していくということなのだろう。それはつまり開き直りが身に付き、ツラの皮が厚くなって、小林よしのり氏言うところのゴーマニストになったということではないのか。もしそうであれば、それは治ったのではない。さらに悪化して、それがきわめて進行した結果、人間性が裏返ったのである。ひきこもりとゴーマニズムは、同じコインの裏表である。

「カウンセリングでは治らない」

あんまり書くとカウンセリングの悪口を書くのが目的と誤解されるので、ここで止めておく。ただ、ここで勝山実氏のカウンセリング評を引用すると、次のようである。

「個人的に言わせてもらえば、カウンセリングは受ければ受けるほどひきこもりが悪化します。何故ならカウンセリングは商売だから。簡単に治してしまったら商売にならないので、なるべく長引かせます。ボクは十八万円取られました」

そして先ほどの、「カウンセリングにお金を注ぎ込む代わりにパソコンにお金を注ぎ込みましょう」につながるわけである。ひきこもりに関するいろいろな本や論文があるが、勝山氏と田中氏のものを並べて読んで、底なしの虚しさを覚える人は多いであろう。

「稼げ、ひきこもり」

結局、この章の最初の問題、「ひきこもりは何故問題なのか、いや、そもそもこれが問

題なのか？」という問いに、答えが出ないのである。「いいじゃん、別に」と、これで終わってしまうのである。何しろ、ひきこもりに直接関わり、とにかく「治療」することが仕事であるカウンセラーに「そんなに悪いことなのか!?」と大見得を切られてしまっては、「へへーっ、お見それいたしやした。ちっとも悪うはございません」と平伏するか、「それを言っちゃあおしまいヨ」と言って去っていくしかない。いやはやまた悪口と思われるが、あくまでも実際書いてあることをもとにしているのである。

つまり、いまの世の中は早い話が「何でもあり」になっている。ひきこもりは相当重度の問題なのだが、その問題を成立せしめている、この「何でもあり」、別の言い方をすれば「やったもん勝ち」「言ったもん勝ち」の世の中が、そもそも根本の問題なのである。

斎藤環氏は、先に引用した「週刊文春」の記事のなかで、九十歳の親がひきこもった六十歳の子どもの面倒を年金で養うという異様な未来像が想定できるとし、高齢化社会と並行してひきこもり社会が到来すると言う。つまりひきこもりがこれ以上蔓延すると経済的に問題だから、何とかこれを阻止しなければならないというのが主旨である。この論理で「ひきこもりは何故悪いのか」という問いに答えようとすれば、「経済的に問題だから」という答えになる。

したがって、経済危機をクリアできるのであれば、ひきこもりは何ら問題ではなくなる。斎藤氏は次のように提案する。

「一つの方向としては SOHO のように、在宅勤務が可能な雇用を増やしていくこと。また、若干給料は安めでも、多少の遅刻や欠勤を大目に見るようなゆるやかな形での雇用は考えられないか。あるいは、ひきこもりの人をプールしておいて、そのとき働ける人を随時派遣するような派遣会社はできないだろうか」（週刊文春）

「『ひきこもり』の解決に関連して興味深いのは、インターネットの利用にかかわる部分だ。この本に登場する若者たちの多くがインターネットを利用していることは、僕にとっても心強い事実だった。今のところ賛否両論あるようだが、僕は『ひきこもり』の相談を受けたときは必ずインターネットを勧めている。・・・メディアはそれ自体は善でも悪でもない。これは当たり前のことだ。インターネットの存在は、ひきこもりがちな生活をしながらも、他人と濃密な関わりを可能にする点で、今後いっそう重要なものとなるだろう」（『私がひきこもった理由』解説）

このあたりで、勝山氏らインターネットを必要とするひきこもり者たちと、ネット事業で彼らに経済活動をさせようと考える人々との「利害が一致」してくる。これはもはやひきこもりの解決でも何でもない。立ってる者は親でも使え、もらえる物は何でももらえという発想である。毒を喰らわば皿までとも言える。経済エゴイズムの極致である。ひきこもりがどうのこうの、青少年の健全な成長が云々という話は、最初からとんでいる。ショートして吹き飛んでいるのだ。ショートさせている張本人たちが気付いていない（ように見える）のだから困ったものである。本当に真剣な悩みを抱えている人々、その親や周囲の人たちがとばっちりを食っている。このままの事態が続けば、多くの人が「バカらしい、もうやーめた」「それ！バスに乗り遅れるな」となってしまう恐れもある。そうなったら取り返しがつかないだろう。

民主主義が生んだひきこもり

話は進むが、やはり一向に「ひきこもりが何故問題なのか」に対する答えが出てきていない。おそらくきりがないので、ここで一度、一足飛びにわれわれなりの結論を提示しておこう。すでに最初のころにも一度ふれてあるのだが、ひきこもりは、人間性、人間の人間たるゆえんにまったく反した姿だから問題なのである。どうしてそう言えるのか、ということを続いて説明し出すと、先に結論を提示した意味がなくなり、今後の論理展開が滅茶苦茶になる。乱暴かも知れないが、とにかくそういう結論だけ述べておいて、その理由付けは、この後の部分でじっくりと、おいおい組み立てていきたい。

いよいよ、先述したような、ひきこもりを成立せしめている現代の「何でもあり」の世の中について考えていきたい。それはつまり、本書のタイトルにもなっている現代民主主義社会そのものをまな板に載せることである。

Ⅲ　ニッポンの教育

教育改革

ひきこもりは、主に思春期～青年期の問題が中心である。そして、彼らに関する問題は教育問題と重なる部分が大きい。だから、最初は教育を切り口にするのが一番まっとうであろう。そもそも、戦後民主主義と学校教育は切っても切れない双子の兄弟のようなものである。ひきこもり者の九割が不登校経験者というデータはすでに紹介済みで、そうなるとひきこもり問題はとりも直さず教育問題そのものである。教育は民主主義そのものであり、これで論理の輪ができあがった。三段論法をあまりに強調するとまゆつばと思われるが、ひきこもり問題はすなわち民主主義の問題にほかならない。

今日、日本の教育はどのような状態にあるか。前世紀の最終、「教育改革」は社会のキーワードで、このことばが新聞に載らない日は一日としてなかった。小渕内閣当時、首相の私的諮問機関である「教育改革国民会議」が発足した。ノーベル賞受賞者であり、日本が世界に誇る知性、江崎玲於奈氏が座長となり、学界、財界、文化人らの錚々たるメンバーが一同に会した。ベストセラー『学校崩壊』を世に出した河上亮一氏がいれば、作家・曾野綾子氏もいたし、オリンピック柔道の金メダリスト、山下康裕氏もいた。教育に関する会議なのに、教育学を専門とする研究者が極端に少なかったようにも見える。

しかし、とにかく「国民会議」は日本中の期待を受けて、華々しく活動した。議事の進行具合は逐一報道され、インターネットでも公開された。とくに奉仕活動の義務化と、教育基本法改正問題に関しては、国民も巻き込んで凄まじいまでの盛り上がりを見せた。いまとなっては、嵐の「後」の静けさという感がなきにしもあらずである。

日本人はトップランナーになれるか

会議の座長・江崎氏が将来に向けての教育ビジョンとして掲げたことばを覚えておいでだろうか。それは、「日本人を世界のトップランナーに」というものであった。日本人を世界で一番にする、それはより具体的に、というか露骨に言えば、「アメリカに勝とう！」というスローガンである。

政治、経済、産業、軍事、教育、とにかくありとあらゆる分野において世界の頂点に立っているのがアメリカであることは子どもでも知っている。2001 年４月の新聞報道は、そのことを数字で駄目押しして見せてくれた。それは、スイス・ローザンヌに本部のあるビ

ジネススクール、国際経営開発研究所（IMD）が発表した、2001 年の主要国経済の国際競争力ランキングである。アメリカは総合で１位、下位分類の項目でもとにかくほとんどが１位であり、取りつくしまがない。

表２　2001 年国際競争力ランキング（2001.4.26.読売新聞をもとに作成）

順位	国　　名	2000年順位
1	アメリカ	1
2	シンガポール	2
3	フィンランド	4
4	ルクセンブルク	6
5	オランダ	3
6	香港	12
7	アイルランド	5
8	スウェーデン	14
9	カナダ	8
10	スイス	7
18	台湾	
26	日本	24

さて、我が日本はと見ると、何と何と、ずっと下って 26 位である。アメリカから見てはるかに眼下雲の下、ほとんど霞んでいるのではないか。トップランナーどころか、ついこの間中国から返還されゴタゴタ続きで経済が逼塞、やっと落ち着いたばかりの香港にすら惨敗、お隣である台湾にも差をつけられている始末である。さらによく見れば前年に比べて順位を落としているではないか。景気の悪さが影響していることは容易に想像できるが、それにしてもいよいよもって不景気な話である。

悪い話題を提供するデータはまだまだある。「管理職の起業精神」や「開業度」は驚く

なかれ調査対象国中最下位の 49 位。「ビジネスの効率性」は 30 位。「政府の効率性」は 29 位。政治に関しては小泉内閣の発足で国民的な期待が高まっているが、果たして望み通りにいくであろうか。アメリカを抜いて世界のトップランナーになど、「ソレ、ジョークデスカ？」と外国人に確認されそうである。「いえ、本気です」と答えたら「ワハハッ、アナタホントニジョークウマイネ」と誉められてしまうだろう。せめてアジアのトップランナーにと考えたいところであるが、アジア経済の牽引車はいまやシンガポールで、世界第二位につけているのだから、この差は絶望的と言える。

とにかく、教育によってこの劣勢を挽回しようというのが日本の悲願である。しかし、ここでわれわれは最後のとどめを刺されてしまう。国際競争力の観点から見た大学教育の充実度は、これまたなんと最低の 49 位というのだ。ほとんど不戦敗に近い。

危うしニッポンの未来

少しは高順位がないのかと思って記事を読むと、「経常黒字」や「外貨準備高」は世界のトップだと書いてある。これはつまり、いままで貯めてきたものはそれなりにたくさん持っているけれども、将来性はきわめて低いということだろう。現段階で考えるに、ジリ貧がほぼ必須ということである。「ニーッポンの未来は WowWowWowWow　セーカイがうらやむ YeahYeahYeahYeah」と歌っていられるのはカラオケの時だけで、現実はまったく正反対である。いまどき日本をうらやんでくれる外国人が多いとは思えない。もっとも、現実離れした歌だからこそ売れるのである。「あしーたがある」のヤケクソ気味な繰り返しも、多くの人が抱いている明日への不安の裏返しであろう。

日本はいまや次第に世界から置いてきぼりを食いつつある。2001 年 3 月 29 日付の日本経済新聞はフランスの経営大学院 INSEAD のアジア進出について報じている。開校候補地として当初は東京を含む 11 都市が挙げられ、有力地として絞り込まれたのはシンガポール・香港・クアラルンプール、結局選ばれたのはシンガポールで、同校は 2000 年１月に開校した。アルヌード・メイエール学長は「日本進出は眼中になかった」と語ったそうである。またシンガポールは世界の一流大学 10 校を誘致する計画を推進中で、すでに INSEAD、米マサチューセッツ工科大学、シカゴ大学など６校の誘致を実現しているそうである。大学教育の充実度 49 位の日本とは月とスッポンである。

総合的な学習の時間

以上は国際比較の話であって、国内はどうなっているのであろうか。日本の学校教育に、文部科学省が示す「学習指導要領」というものがあって、それにそった教育が行われているのはよく知られている。指導要領は終戦後の 1947 年から登場しており、何度かの改訂を経てきている。いまもちょうど節目の時期になっており、2002 年度から新しい指導要領になるのも周知のことである。

今回の指導要領改訂の目玉は、完全週五日制（週休二日制）の導入、授業内容の三割削減、「総合的な学習の時間」の導入、といったところである。「総合学習」はすでに前倒しで授業が始まっており、小中学生の子どもがいる人は、子どもたちがどんなことを学校でしているか聞いたこともあろう。

「総合」のメインは体験学習である。席に着き、教科書・ノート・鉛筆で勉強するものではない。そもそも教室にいては総合学習にならない。畑に出かけ、田んぼに出かけ、海に出かけ、山に出かけ、老人ホームに出かけ、商店街に出かけて、とにかく体を動かしてくるのだ。担任の先生は総合学習であまり出番がない。近所の大人、お百姓さん、漁師さん、老人、外国人、パソコンのインストラクター、ラーメン屋の旦那、レストランのシェフ、肉屋のおじちゃん、八百屋のおばちゃん、福祉施設の職員等々が先生である。担任の先生は、そういう人々に頼んで学習の場をコーディネートするのがおもな役目になる。

先生は教えない

先生はあまり、というかほとんど教えることがない。それはそのはずで、本職のそば打ち職人に教わってそばを打つ体験をするというのが授業だとしたら、先生も子どもと一緒に並んですわり、職人さんの話を聞く以外にない。したり顔で余計なことを言ったら、たいていの人は二度と来てくれないだろう。

総合学習では、「先生が教えない」ということがひとつの決定的なポイントなのだ。何を勉強するか、ということからして、先生が子どもに指示をしてはいけない。「いけない」というのは言いすぎかも知れないが、やっぱり結果的にはいけないのである。子どもが「やりたい」ということを自由に選ばせ、自由にやらせることが必要と考えられている。「これをやりなさい」「こういうふうにしなさい」「あと何分で終わらせなさい」などという指導はほとんど御法度である。そんなことをしたら、先生の指示がなければ決められず、動けもしないマニュアル人間、指示待ち人間ができあがってしまうと恐れられているから

である。

人生は自己判断・自己責任である。人に決めてもらい、人の言うとおりにして、そのあげく失敗したとして、「だってあの人がこれをやれって言ったんだもん」「こうしろって言われたんだもん」と他人のせいにしても後の祭りである。あらゆることを自分で選び、自分で計画して、自分で実行してきたのであれば、もし失敗しても文句を持って行く場がない。すべて自分一人で引き受けなければならない。そのかわりうまく成功すれば、その果実は全部自分のものである。「あの人のお陰」なんて感謝する必要はない。だから分け前を請求されるいわれもない。損得はすべて自分の内にある、これが現代社会適応型サバイバルの大原則である。

子どもたちよ、サバイバルせよ

教育のキーワード、「生きる力」とはこういうことである。成功も失敗も、すべて自分のお陰、または自分のせいであるとして、他人には関わらずにいられる力である。生きるとはつまるところ生存競争、サバイバルである。うまくやる人が生き残り、トロい奴は淘汰される。トロいのは本人のせいなんだから仕方がない。そのトロさを責任転嫁して人の足を引っ張ったり、逆恨みしたりするのはもってのほかである。こういうことを子どものうちからたたき込むのが「生きる力」をつける教育である。

それゆえ総合学習では、「成功する」「うまくいく」「上手にできる」ことはあまり歓迎されない。言うなれば人生の縮小版を総合学習で学ばせるのが目的なのだから、いつでもうまくいくなんていう誤った、甘えた考えを子どもがもったら困るのだ。サボれば失敗するのは当たり前、一生懸命がんばっても必ず大丈夫とは限らないという「人生のきびしさ」を身につけることが要求される。一度や二度の失敗ではくじけず、むしろそれを糧にして、雑草のようにたくましく、しぶとく、ねばり強くやり遂げられたら最高である。そして、ついに最後の最後までうまくいかなくても、「その子なりにがんばれた」ら OK なのである。

自分を誉めたい

自己判断・自己責任とは、成功・失敗の判断基準も自己の内にあるということである。自分が満足できたかどうか、それが最終の決定基準になる。たとえ銅メダルでも「自分で自分を誉めたい」と最後に言えた有森選手には、みんなが感動してヤンヤの喝采を送った

のである。もちろん銅を取るのも楽ではないと思うが、金メダルに届かなくても選手自身がその結果に満足したかどうかを、国民は鵜の目鷹の目で監視する。銀や銅だったとき、選手が爽やかな笑顔で「精一杯やりました、悔いはありません。満足です」と言えば、「ウンウン、そうだよねえ。要は全力を尽くしたかどうかなんだよ」と自分も安心できる。「金がいいですう」という選手がいたら、「やっぱりスポーツ選手はハングリーだなあ」と感心しておしまいである。

おもしろさ第一

しかし、うまくいくかどうかもわからないのに、とにかく一生懸命やれとだけ期待するのには無理がある。そうでなくても近ごろの子どもは「どうせボクなんてがんばったってダメだから」「えー、いいよワタシはソコソコで。ふつうがいいんだ」等々、冷めていること甚だしい。何をやるか、どうやるか、いつまでに終わらせるかなどは自分で決めていいが、ぐうたらは困るのである。

日本人がみんなぐうたらになったら GDP が下がって生活水準が低下する。ぜいたくができなくなる。それは教育によって防がなければならない。そこで大切になってくるのが、教育における「おもしろさ」の追求である。無理やり教え込むのはいけなくても、おもしろければ子どもが勝手に勉強するはずである。

総合学習でも、おもしろいかどうかは教材を選ぶ際に重要なポイントになる。教育的な価値が軽視されているわけではないにしても、非常に重視されているのは「おもしろいか」「子どもが楽しめるか」という点である。別の言い方をすれば、教育的に価値があってもつまらなかったら取り上げられない。ただでさえつまらないものは嫌いなのだから、それがやらされずにすむとなったら、いやなことでも我慢してがんばる子どもはほとんどいなくなるのが当然の成り行きである。

学力低下

近ごろ子どもたちの学力低下について議論が盛んである。計算や書き取りなどで、昔の子どもならできていたことができなくなっているというのは、いろいろなデータから明らかである。

教育に関心が高い人は、「学校の役目は読み書き算盤を叩き込むことだ。それを復活せよ」と述べている。しかし、文部科学省や学校現場の反応はきわめて鈍い。理由を考えて

みるに、ひとつにはそんなつまらないことを子どもに強制してもしたがわないだろうし、無理をすれば今以上にいじめや不登校、学級崩壊が増えて収拾がつかなくなるという危惧があるだろう。

そしてもうひとつ、もし読み書き算盤の徹底が学校にうまく定着したとしたら、それは結局戦前型教育の復活に過ぎないのではないかという恐れがあるように思える。担任教師が次々と問題を繰り出し、子どもはそれを受け取って黙々と消化するだけ、それはもはや学校ではなく、教育ですらなく、教育工場で知的ロボットを生産するのと同じである、明治・大正・昭和の初めと、それを延々と続けた上、生活態度や思想内容は教育勅語と皇国史観でがんじがらめに縛り上げ、幼い頃から神話で洗脳し、一切の自主判断、自主決定の機会を奪ってお国のために喜んで死ねる天皇の赤子に育て上げる、読み書き算盤はつまりそういうところにつながっているのだ、そんな地獄の再来、冗談じゃないという恐怖心がおそらくある。

学級崩壊

いやなことを無理やりさせるなんて教育じゃない、楽しくなければ教育じゃない、学ぶっておもしろいことなんだよという一種強迫めいた観念がいまの日本には徹底している。子どもが勉強をいやがり、ツマラナイと投げ出したら、それは子どものせいではない、教材が悪く、教え方が悪いのだということになる。小学生も高学年になってくれば、だんだんそういう風潮に気付いてくるだろうし、中学生ともなればもう決定的である。

最近は一時期ほど「学級崩壊」が騒がれなくなったが、別にそれはこの現象がなくなったらからではない。当たり前すぎてニュースにならなくなったのだ。学級崩壊がこれほどまでに蔓延した理由はもちろんひとつではないだろう。ただ、重要なものとして、いま述べたような「勉強がつまらないのは教科のせい、教材のせい、教える教師のせい」ということがほぼ常識になっていることがあるだろう。「ちゃんと聞け！」と怒鳴っても「おもしれえ話なら聞いてやらあ」と返されてしまう。そういう中学生が成長して二十歳になると成人式で暴れ回る。主催者側が怒っても、蛙のツラにしょんべんである。

子どもが生意気にそう言うだけでなく、いまでは社会全体がそのように考えている。しばらく前に学級崩壊の全国調査がなされた際、「七割は教師の指導力不足が原因」と報告されたのはそのあらわれである。「昔ながらの指導法に固執」「威圧感で子どもを押さえつけるだけ」「熱意が空回りして、子どもに届いていない」等々、コメントも散々であっ

た。結局、教師は子どもがやる気になるようにおもしろい授業をせよ、つまらないことを繰り返しているから学級崩壊などというていたらくなのだと言われるわけである。

それに対して「何を寝とぼけたことを。刻苦勉励してこその学びである。蛍の光窓の雪、仰げば尊し我が師の恩ということを知らんのかこのたわけ者」と怒鳴りつけられれば先生の精神衛生も少しはよくなるだろう。しかし、そんなことを言おうものならどこへ訴えられるかわかったものではない。子ども、親、マスコミ、そればかりか上司、同僚、教育委員会、文部科学省にいたるまで、教師は完全に包囲されて孤立無援、うつ病をはじめとする精神疾患が激増しているのもやむを得ないことである。

授業内容の削減

新指導要領で、授業内容を三割削減するということには、世論も猛烈に反対した。露骨な言い方をすれば「冗談じゃない。子どもが馬鹿になる」ということである。親によっては「ウチの子どもは家で一切勉強しないんだから、せめて学校でぎっちりしぼってくれなきゃ困る」と言う人もいよう。これも考えようだが、小学生といえば家に帰ったら上がりもせずに玄関からランドセルを放り込み、近くの遊び場へ一目散というのが自然とも言えるから、「勉強は学校でしてくりゃいいんだ」という言い分にもうなずける点がある。

しかし、文部科学省が方針を撤回する気配はない。「三割減らして、残った分を 100%身につければいいんです。いままで落ちこぼれだ落ちこぼしだと騒いできたのは、結局内容が多すぎてやりきれなかったということなんだから、これからは少ない分を完璧にこなせば問題ないでしょう？」というのがその説明である。

なるほど、理屈は通っているように聞こえる。しかし、そんなにうまくいくものだろうか。正直なところ無理に決まっていると思うし、お役人の方も「できっこないよそんなこと」というのが本音なのではないか。多いからサボる、少なければ一生懸命やるなど、機械じゃあるまいし、そんな単純な理屈が人間に通用するとは考えられない。人間には（動物にもだが）「慣れ」というものがあるのだ。最初は「へえーっ、少なくなったなあ」と思えても、そんな感覚はあっという間に薄れてしまう。これは少ないんだから全部やらなきゃ駄目などと言われても、そうはいかない。加えていまの教育はおもしろさを追求するから、減らされた中味のさらにおもしろい内容だけが好まれ、勉強することがもっと減ることだってないとは言えない。

しかし、文部科学省としても「大丈夫」の繰り返しだけでは効果がないと承知していて、

その考えを多少は表明する面もあった。先ほど総合学習は体験学習を中心にしていると述べたが、たとえば総合学習の時間を使って計算や漢字のドリルをするなどしてもいい、と方針を変えたのである。最初の頃は、総合学習で「お勉強」は駄目という雰囲気だったのだが、子どもの実態に応じて、いわゆる基礎基本を充実させるための時間としてあてることもあっていいとされるようになった。しかしいずれにしても姑息な手段という印象はぬぐえない。

学校週五日制

それから、ついに学校も週休二日である。余計なお世話だが、子どもと教師は喜ぶのと反対に、多くの親はがっかりしていることだろう。だいたい夏休みや冬休みには、世のお父さんお母さんはゆううつになるものである。朝日新聞の四コママンガ「ののちゃん」は、シーズンになるとネタがいつもそちらの方面になる。いままで土曜日にはお父さんがゴロゴロしているだけだったが、毎週そこに子どもが参加する恐れが出てきたのである。血圧が上がるお母さんが増えるおそれがある。

結局、教育のこうした動きは、いままで子どもたちを勉強や規則に縛りすぎたという反省がもとになっている。子どもにゆとりがない、自由がない、みんな疲れている、子どもらしさがない、ストレスがたまっている等々、その証拠として現れてきたのが不登校、いじめ、校内暴力、非行、犯罪、学級崩壊、そしてひきこもりである、と考えられている。また、自分で考える力がない、自分で決められない、自分で発見できない、自分で創り出せない、将来に対する夢がない、希望がない、覇気がない、といったないないづくしも、ゆとりや自由を奪ってしまったせいであると考えられた。

したがって、こういったもろもろの問題を根本的に解決するために、子どもにもっとゆとりを！、もっと自由を！というわけである。

忙しい子ども

現代の子どもが忙しいのは事実であろう。学校が終わったとたんに塾のハシゴをはじめ、晩ご飯はお弁当、駅のホームで栄養ドリンクを飲み干して携帯でお迎えを呼び、家に着くのが夜十時、それから風呂に入って夜食を食べながら録っておいてもらったビデオを見、塾の宿題をして寝るのは十二時で、翌日は７時前に起きなければならないという子どもがいる。そういう子はおそらく土日もサッカーやバスケットにスイミング、ピアノや英会話

で忙しい。書いているだけで目が回りそうだ。

しかし、子どもをめぐる教育産業の状況は変化の側面もある。何と言っても義務教育段階の公立離れ、私立志向が顕著になった。小学校から私立という子は決して少なくないし、いま書いたような凄まじい生活を送る子はたいてい小学校五、六年である。希望通り中高一貫の学校に進学できれば、最大のメリットとして高校受験を経験しなくてすむ。つまり地獄のような受験生生活があったとしても、小学校で卒業できる可能性が高くなった。中学高校の６年間、少なく見積もっても５年間は何でも好きなことが保障される。その貴重な数年間を得るために私立中学が目指されるのであろう。そして、少子化の影響から、数字の上で大学への全入はほぼ実現したに近い。学生がしのぎを削らなくても、大学の方から「どうぞウチに入ってください」と求人が来る。高校時代をうまく過ごして推薦で入れればしめたものである。

だいたい入試における選抜方法も「勉強だけができるような子はいりません」と明言するところが増えている。「一芸入試」が登場したときにはたいそう話題になったが、いまでは珍しくも何ともない。企業ですらそうなっていて、有名大学を出ていようが英検一級だろうが、試験官にひとこと「そんなの関係ないよ」と言われてしまう。

こうなると塾や予備校もいままでと同じく「日々是決戦」というわけにはいかない。鉢巻きをさせてしごき上げるだけでは見向きもしない親が多いし、子どももついて来られない。黒板に向かっての勉強だけでなく、理科の実験や社会見学など、多彩な体験プログラムを用意する。また、夜遅くなったり、土日がつぶれたりするようなカリキュラムは最初から組まない。それよりも一家団欒を大切にしてくださいと、一昔前では考えられないようなことを塾の先生が言うのである。

Ⅳ　ニッポンの子育て

新たな忙しさ

こう見てくると、現代の子どもたちは、かつて見られた勉強漬けの生活からは解放されている面がある。しかし、そのことは子どもの生活にさしたるゆとりを生んでいない。もちろん勉強はしなければならないが、ガリ勉は好まれず、その代わりにスポーツや芸術の力、あるいは英会話などの社会的能力、情操面の豊かさなどを幅広く身につけることが要求されるようになってきた。

昔の子どもと比べると想像もつかないくらい、いまの子どもは幼い頃からさまざまな経験ができる。しかしその中で最大の問題は、当の子どもたち自身がそういう体験を望まない場合があり、やりたくもないものを嫌々やらされている子どもが少なくないことである。

従来は、習字やそろばん、せいぜいピアノあたりがポピュラーな習い事で、英会話とか、冬のさなかに温水プールで水泳を教わるなどというのは、大多数の庶民には無縁のできごと、お金持ちのお坊ちゃん、お嬢ちゃんが「なさる」ことだった。いまではスーパーの安売りチラシと一緒に、〇〇英会話教室、△△スイミングスクールの広告がいくらでも入ってくる。習い事の種類と数がステータスシンボルになることはほとんどなくなった。

子どもも小さくて無邪気なうちは、「あれやりたい」「ここ行きたい」と親にせがむが、しだいに飽きてきて、練習・宿題をサボる、行きたがらなくなるなどのことがしばしば出てくる。そんなとき、気持ちを聞いてやったり励ましたりして、再び子どもがやる気を出すようにしてあげられればいいのだろうが、現実はなかなかそうならない。たいてい「アンタが行きたいって言ったんでしょう！」「いままでいくらお金かかったと思ってんの！」となってしまう。それからよくあるお小言に「やる気がないんなら、やめちゃいなさい！」というのがあるが、子どもがそれを聞いて「えっ、やめていいの？　じゃあやめる」などと言おうものならたいへんなことになる。ここでまた「アンタが・・・」「お金が・・・」に逆戻りしてしまい、収拾がつかなくなる。

親の二重拘束

こういう親の態度を「二重拘束（ダブルバインド）」という。親が怒って「こうしろ、ああしろ」と言い、子どもがその通りにするとますます怒り狂う。子どもはにっちもさっ

ちもいかないところに追いつめられてしまう。そして、子どもが立ちすくむ姿に、親は新たな怒りをつのらせる。

こうなってしまうと、もはや誰のための塾や習い事なのかわからない。親に言わせれば子どものため、しかし当の子どもは案外「お父さんが怖いから」「お母さんがうるさいから」行きたくもないのに行ってやっているという感じになってしまう。

楽しくもないし、やる気もなくなると、せいぜいの気晴らしは、行き帰りに友だちとコンビニの駐車場にたむろする程度になる。こういう子どもには、むなしい疲労感が蓄積していくだろう。往年のヒット曲「シクラメンの香り」に、「疲れを知らない子どものように」というフレーズがあったが、これがいまでは通用しない。疲れちゃっている子どもが多いのだ。

これではストレスがたまるのも当然ということになってしまう。しかも、パッパッと発散できるよう陽性のストレスではなく、内にこもった陰性のストレスになりがちである。

ガリ勉を強制されているわけではない。ましてやご飯を抜きにされたりボロボロの服しか着せてもらえなかったり、奴隷的な扱いを受けているわけでもない。なぜか日本は子ども虐待の最先進国になってしまったが（実はもっともな理由はあって、それは本書のテーマとほとんど重なっている）、それでもおそらく世の七割から八割くらいの親は、それなりに子どもの世話をし、いちおうの家庭環境、親子関係を維持できている方だろう。しかしそれでも満たされず、むなしいストレスを抱えて生きている子どもは多いのだ。

いまの子どもたちには、真綿で首を絞められている面が多分にある。子どもの首を絞めていることを親が自覚しないのも困るが、それ以上に恐ろしいのはその行為を子どものためと勘違いしている場合だ。子どもが幼い頃から心理的に首を絞められ続けて育つと、まず第一に慢性的な心の酸欠に陥る。これはあとでも詳しく考えるが、すなわち愛情欠乏ということである。第二に、親の首絞め、つまり圧迫や抑圧を愛情と勘違いするようになってしまう。虐待された子は、親側の問題がわからず、「自分が悪い子だからお仕置きされて当たり前なんだ」と思うことが多いと言われる。

ユメもチボーもない

少し前のことだが、ベネッセ教育研究所が「子どもにとっての教師」というアンケート調査を行った。それを当時の文部省が中央教育審議会の資料に採用している。調査は小学校五年生（11 歳）を対象に行い、将来への期待を表す六つの質問項目に対して「きっとそ

うなれると思う」と答える子どもの割合を調べたものがある。これは国際比較をしており、東京・ソウル・北京・ミルウォーキー・オークランド・サンパウロが対象地域に選ばれている。東京とミルウォーキーの子ども像を比較してみる。

表３　　小学生の将来への期待・「きっとそうなれる」と回答した子どもの割合（%）

（文部省，1998）

	東京	ミルウォーキー
皆から好かれる人になる	10.5	27.9
有名な人になる	11.8	19.7
お金持ちになる	12.3	23.9
仕事で成功する	20.6	52.7
よい親になる	21.1	63.6
幸せな家庭を作る	38.6	63.5
六項目の平均	19.2	41.9

東京の方が上回っている項目はひとつもない。また、六都市間で平均値を比較してみよう。

東京	19.2%
ソウル	51.5%
北京	50.1%
ミルウォーキー	41.9%
オークランド	41.3%
サンパウロ	49.4%

東京だけがきわだって低いことが一目瞭然である。

同じ調査の中に「小学生の自己評価」というものもあった。やはり同じ六都市間で、「あなたはこういう子どもですか？」という質問項目に対して、「自分にとても当てはまる」と回答した子どもの割合を示している。東京とミルウォーキーでは、以下のようになっている。

表４　小学生の自己評価・「自分にとても当てはまる」と回答した子どもの割合（%）

（文部省，1998）

	東京	ミルウォーキー
勉強のできる子	8.4	43.5
友だちから人気のある子	9.8	35.4
正直な子	12.0	49.8
親切な子	12.3	59.1
よく働く子	14.3	67.1
勇気のある子	19.0	57.8
六項目の平均	12.6	52.1

これもまた、日本の結果はさんざんである。再び、平均値を六都市間で比較してみると、次のようになっている。

東京	12.6%
ソウル	22.2%
北京	33.9%
ミルウォーキー	52.1%
オークランド	38.1%
サンパウロ	45.2%

このふたつを並べてみると、日本の子どもは将来に「ユメもチボーもない」ということ、それから「どうせボクなんてだめな奴さ」「ワタシなんて頭悪いし嫌われてるし」と、極

端に自分を卑下していることが多い、ということが言える。何とも情けない限りであるが、これをあえてプラスに捉え、「やはり日本人の謙虚で遠慮深いところが子どもにも受け継がれている。これは美徳だ」と見なしたらどうだろうか。しかしやっぱり無理があるような気がする。親自身は子どものことをどう考えているのだろうか。

こんな子いらない

やはり同じ文部省が平成五年に「家庭教育に関する国際比較調査」というのを行っており、その中で、子どもと同居している親千人を対象に「子どもの成長に満足しているか」という質問をし、「満足している」と答えた親の割合を示している。これを見て考えてみよう。

対象国は六カ国だったが、手っ取り早く日米の比較をしてみる。

表５　　子どもの成長の満足度（文部省，1998）

「子どもの成長に満足している」と回答した親の割合（%）

	日本	アメリカ
０～３歳	68.7	93.1
４～６歳	53.7	88.5
７～９歳	47.3	82.8
10～12歳	36.3	84.5

日本の親の場合、年齢が上がると満足度も順調に（？）低下していく。先ほどの、子どもへの質問は 11 歳が対象だったが、アメリカなどそのころは逆に満足度がアップしているのだ。

これらのことを総合的に考えると、日本の子どもたちは多くが「ボクはだめな子」「ワタシの将来知れたもの」と考えており、それを親たちは「うむ、なかなか現実をよくわかっている」と評価するのではなく、「お前ねえ、もうちょっとどうにかならないの？」とウンザリしている、こういう図式が浮かび上がってくる。

以前、あるお母さんが「ワタシは子育てに失敗した。もう一回子宮に戻して、産み直し、育て直しをしたい」と語るのを聞いたことがあるが、これが多くの親の偽らざる実感だろう。あからさまに言ってしまえば「こんな子いらない」ということである。「こんなモノ

いらない」というテレビ番組、「『捨てる！』技術」いうベストセラー本（その後、評論家・立花隆氏によってクソミソにけなされた）などがあったが、実はそれを人間に適用したいという密かな願望が、そこに表れてはいないだろうか。

愛情不足

子どもたちには夢も希望も、自信もプライドもない。そういう心理状態はふつうであれば葛藤を呼び起こすが、その葛藤は誰にも（親にすら）理解されない。しだいに子どもたちは誰にも本心を明かさなくなり、無関心、無感動、無表情となって部屋から出てこなくなる。ここに挙げてきたデータの、日本における異常な数値の落ち込みは、ひきこもりが日本独特の文化的現象であることと密接に関連しているだろう。その中で、子どもは屈折したストレスをふつふつとたぎらせていく。

何がいまの子どもたちにストレスをかけているのか。結論を言えば愛情不足である。親が、周囲の大人が子どもを愛さない、愛を与えないことが、子どもたちに異常な高ストレスをかけている。酸欠にあえぐ金魚のようなものである。

こう書くと、同意してくれる人は多いであろう。そして同時に「自分だけは違う」と思うであろう。自信がある人は、自分ほど子どもを愛している親はいないと思うだろうし、そこまでいかない人でも「自分には人並み程度の愛情はある」と考えるであろう。しかし、である。別にそういう人たちにケンカを売る気はないので腹を立てないで欲しいが、そういう自信は、案外危ないと言うか脆いというか、つまり当人が思っているほど愛情があるわけではない、こういうことがままあるのである。回りくどい言い方になってしまった。

いきなり型犯罪

子どものストレスの最も過激な表れは犯罪である。前の章で Hikikomori に対する海外メディアの反応を紹介したように、日本の青少年の凶悪犯罪は世界的にも注目を集めている。犯罪に関する統計的なデータをもっていて、「終戦直後に比べれば青少年による犯罪はむしろ激減している。過敏に反応したり恐怖心を抱いたりして若者を色眼鏡で見ることはおかしい」と言う人がいる（たとえば 2001 年５月５日付毎日新聞、早稲田大学教授・長谷川眞理子氏による「日本の殺人風土　少年事件　むしろ激減」の記事など）。しかし、数字の上ではそうだとしても、やはり青少年がとても考えられないような異常で残虐な事件を多数起こしていることにはちがいない。もし日本で外国並みに銃器が一般的だったら、も

のすごく陰惨なことになっているのではなかろうか。

最近の青少年犯罪には、「いきなり型」という名称が与えられることがある。家庭にたいした問題が見当たらない、経済的に困っているわけでもない、そして当人にも非行や犯罪歴がない、それなのに突然ものすごいことを起こす。親にすら原因がさっぱり思い当たらないことが珍しくない。

一例を挙げれば、2001 年４月、小学校六年生の男子が母親を刺して失血死させるという事件があった。この子どもは自殺しようとして人差し指を包丁で切っているところを母親に見つかり、怒られたことから胸などを刺してしまった。父親は「家族は仲が良かったのに、なぜこんな事が起きたのかを知りたい」と話していると報道された。そして当の子どもは「家族に会いたくない」と言って面会を拒む。動機も理由もあったものではない。断片的な事実をつかむことはできるが、それらを組み立てて事件の全体を把握することがきわめて困難である。

自己愛

父親が「家族は仲が良かった」と述懐しているのは、おそらく本心なのだろう。「責任はすべてお父さんにある。何も心配することはないし、泣かなくてもいい。・・・一度会って話をしよう。いつまでも待っている」という悲壮感あふれる手紙から、そう予想することができる。子どもに冷たい、虐待的な親とは正反対の、ごくまっとうな愛情を子どもにもっていることがわかる。

しかし、その愛情が子どもに届かないのだ。あるいはすれ違いに終わっている。これはなぜなのか。この父親についてこれ以上述べるのは限界なので、一般に広げて考えてみたい。

いま、多くの親の愛情は、どこに向かっているのだろうか。多くの親にしてみれば、当然子どもに向けていると言いたいだろうが、実はその子どもが、生き生きとした実像として捉えられておらず、まるで鏡に映った虚像のようになっているのではないか。子どもの虚像に向かって放射された愛情は、まったく子どもに届かず、反射して親自身に向かってきていると考えたらどうだろう。つまり、親の愛もしょせん自分を愛する自己愛、ナルシシズムに過ぎないということである。

子育てや発達心理学、家族社会学などの専門家（や、それを自認している人々）は、親のナルシシズムを積極的に肯定する。「親が、特に母親が満たされなくては、まともな子

育てなどできっこない」という主張には、一種強迫的な面すらある。

閉そく感の大安売り

いまの日本では「閉そく感」ということばが大流行で、社会も閉そく、学校も閉そく、政治も閉そくなら経済も閉そく、こんなことば、昔は腸閉そくぐらいなものだったが、いまはとにかく閉そくの大安売り、当然子育ても閉そくなら専業主婦も閉そくである。

2001 年４月 18 日付の読売新聞には、見開き二面のスペースで「子育てはいま　その理想と現実　読売・中公女性フォーラム 21」の報告が載っている。一番大きな見出しはズバリ「募る母親の閉そく感　支援体制一層充実を」という必殺の決め台詞である。本文の中にも数えまちがいでなければ「閉そく感」が五回登場し（数えるほどでもないが）、つぶさに読んでいると何となく便秘になりそうな不安がうっすらと襲ってくる。

腹具合の話はおいといて、その閉そく感であるが、子育て論の大御所、大日向雅美・恵泉女子大教授は、次のように発言している。

「この子の将来は私にかかっていると、頑張れば頑張るほど思い通りにならない。こんなはずではなかったといらだち、思わず虐待に近い仕打ちをしてしまう。

子育てに専念している母親は社会からも夫からも疎外された感情を持ち、閉そく感を持たされています・・・育児は母親一人の力では担いきれない時代になっています。今、母親に必要なのは非難ではなく支援です。子育てを社会全体が支える、開かれたものにしなくてはなりません」

これを読む限り、少々被害者意識が強すぎるのではないかと思ってしまう。閉そく感は社会や夫から「持たされる」ものであるという辺りを多くの女性や母親が真に受けたら、かえって夫婦仲が悪くなってしまうのではないかと心配になる。「私がイライラしてんのはアンタや世の中が悪いのよ！　だって大日向先生がそう言ってたもん！　ナニヨ疲れたとか忙しいとか自分勝手なことばっかり言って！　私の方がずっとたいへんなんだからね！　そんなに忙しい会社、やめちゃいなさい！」などと逆上されたら大日向氏は困るであろう。夫はもっと困る。

女優・紺野美沙子氏も「子育て中のお母さんの中には、孤独で、閉そく感にさいなまれている人がたくさんいるのではないでしょうか」と、火に油を注ぐようなことを言う。「そ

うか、私が感じていたこのモヤモヤは閉そく感だったのね。バファリンのんで家事育児なんて時代遅れだわ」などと目覚めてしまう純朴なお母さんがいたらどうするのか。

紺野氏の発言には、他にもアジテーション的なところがあって、読んでいてハラハラしてしまう。

「自分らしい生き方を求めて、みんな悩んでいるのだと思います。・・・やがて、・・・自分を応援するのは自分しかいないんだという境地が開けたんです。育児も自分を育てることだと思います」

これをナルシシズムと言わずして何と言うべきか。

「私の場合は、家のストレスは仕事の場で、仕事のストレスは家で発散しています・・・」

そうか、紺野氏のあの演技はストレス発散のたまものか、そう言えば近ごろ悪役が多いような・・・、とつい余計なことを考えてしまう（いや本当のところはよく知らないのだ）。家は家で旦那さんと子どもさんがストレス発散の対象になっているようだから、ほとんど心理的サンドバッグである。もちろんそれで夫婦円満、家庭円満ならば、他人がとやかく口を挟む筋ではない。

もっといやしを！

閉そく感をうち破るには「いやし」が必要である。大日向氏は次のように言う。

「『妻の話を聞いてあげて』と言うと、『帰って妻の頭をなでてやります』という男性がいました。それは対等に生活を築いていないから出てくる言葉です。男性と女性が、家庭、職場、地域で対等になった時に初めて、話し合うことがいやしにつながっていくのです」

ここで何げなく言われている「対等」ということばは、実は今日の日本の状況、民主主義の問題を考える際にきわめて重要な意味を持ってくる。いまはそのことを指摘しておくだけにとどめたい。

それにしても、理屈っぽく話し合うより、頭をなでてあげただけで癒されてくれる妻がいたらその方がずっと可愛いではないかと思うのだが、余計なことを言うとどんな吊し上げを食うかわからないので黙っておく。

たとえばこうしたものを読んでいて、現代人にとって大切なのは、どれほど「自分が」閉そく感に襲われているか、どうやって「自分の」閉そく感を打ち破りストレスを発散するか、どこまで「自分が」癒されるかということに尽きている、こういうことが明らかになってくる。夫婦がお互いを、親が子を「癒してあげる」ことは第一ではない。夫婦であろうが親子であろうが、自分が一番相手は二番、カステラ一番電話は二番、自分が満足しておらず、癒されていないのに、相手のために何かしてやれるなんて偽善者に決まっている、こう信じられているようだ。これをナルシシズムと言うのである。ジコチューとも言う。

ジコチューと「エゴロジー」

ジコチューというのは、自分勝手な振る舞いがものすごく目立ち、周囲に迷惑をかけまくる人間のことを言うと思っている人が多いだろう。もちろんそれはまちがいではない。駐車違反、車内での携帯、指定日以外のゴミ出し、不法投棄、ペットの糞等、ジコチューの迷惑行為は公共広告機構がキャンペーンを張って注意を促している。

しかし、ごくまっとうな市民生活を送っているように見え、自分でもそう自負している人々の中に、ジコチューは深く静かに浸透しているのだ。それはエゴイズムの論理、「エゴロジー」とでも言える思想である。ジコチューほど目立たないが、よく見てよく考えると、ものすごくエゴイスティックで自分勝手なのである。

Ⅴ　ニッポンのエゴイズム（エゴロジー）

他人は手段

ジコチューは嫌われるが、エゴロジーは好かれることが多い。特に近ごろは多くの識者や文化人がエゴロジーを信奉しており、自分以外にも信者を増やそうとして活動している。子育てや家族について発言している人はほとんどがそうで、もはやエゴロジー教の伝道師である。日本人の無宗教は世界に有名だが、何の何の、実はエゴロジー教信者がものすごく多いのだ。

布教の成果は着実にあがっている。一例を挙げてみると、われわれの住んでいる香川県では「香川県県政だより　元気種（げんきだね）かがわ」という広報誌が配られる。その2001年６月号は「みんなで子育てを考えよう」という特集を組み、「香川県県政世論調査」において行った「結婚や家庭を築くことをどう思うか」というアンケートの結果を載せている。その結果を紹介しよう。

表６　結婚や家庭を築くことについての考え方（香川県，2001）

精神的な安らぎや心のよりどころが得られる	58.8
愛情を感じる人と暮らすことにより幸福感が得られる	57.7
夫婦で互いに高め合い人間として成長できる	49.1
子どもを生み育てることで生きがいが得られる	35.5
日常生活が安定する	33.0
親や周囲が安心する	13.1
親戚つきあいの煩わしさや親の扶養責任などが生じる	11.2
身の回りの世話をしてもらえるなど生活上便利になる	10.3
家事や育児の負担が多くなる	7.0
自由にやりたいことの実現が制約される	5.7
自由に使えるお金が減ってしまう	4.2

(単位：%)

この結果を見て、違和感を感じる人は少ないだろう。ほとんどいないかも知れない。た

いていは結果に共感を覚えたり、「そうだなあ、結婚や家庭ってそういうもんだよ」と納得する場合が多いと思う。

回答結果の項目は十一あり、そのほとんどすべてが「自分に得（または損）になるかどうか」という基準を示すものである。唯一六番目に「親や周囲が安心する」というのがあるが、この場合も、結婚して家庭を持てば、周りからやいのやいのとうるさいことを言われなくなって助かるという、自分の都合が優先されているように予想される。

つまり結婚や家庭は、損得勘定の対象になっているのだ。プロポーズの際には「必ずキミを幸せにするよ」とか「アナタのパンツを洗ってあげたい」とか、いちおう相手の立場に立ったようなことを言うかも知れないが、腹の中ではおそらく「コイツと一緒になってどれだけ得になるか」という計算が渦巻いている。「この人と一緒になったら、どんなことを、どれだけ尽くしてあげられるだろうか」と、相手のことばかり考えるようでは、よくてよっぽどのお人好し、悪ければトンマでまぬけと冷笑される。

損得勘定当たり前、結婚とはそういうものであると考える人は、立派なエゴロジー教の信者になっている。むかし、カントという哲学者は、他者の人格を手段にしてはならない、簡単に言えば人をダシに使うなと述べたが、それはエゴロジー教の教えに反する。立ってる者は親でも使うのが、エゴロジーの真髄である。

マス･エゴロジー

すでに紹介したように、文化人や識者はひんぱんにマスコミに登場して、エゴロジーの普及に努める。また、企業は、人々のエゴロジー信仰心を刺激する商品を次々に開発して、売り上げを伸ばそうとやっきになる。そのことは広告やコマーシャルを見るとよくわかる。

手っ取り早いところでは、2001 年６月に創刊された、オレンジページ社の新雑誌「ベーネベーネ」の新聞広告がいま机の上にある。キャッチコピーは、「『オレンジページ』を卒業したら　そろそろ納得の暮らし作り」。それに続く宣伝文は、エゴロジーの思想をよく伝えているので、少し抜き出してみる。

「毎日の生活を楽しむことから、一歩すすんでより自分らしい暮らしを送ることが大切に思えるようになってきました。・・・結婚していても、いなくても、子どもがいても、いなくても。今必要なのは自分を見つめること、この先、どう生きるかを考えること。・・・『そろそろ納得の暮らし作り』、それは納得のできる人生に続いていきます」

どうだろうか。もはや「楽しむ」とか「充実する」といったことすら女性にとっては時代遅れである。要は「自分で納得できるか」「満足できるか」にかかっている。先にスポーツ選手の言葉のところでも考えたが、判断基準はすべて自分にあることが強調されている。結婚？　うるさいわね。子ども？　ほっといてよ。私は私、アンタに関係ないでしょうということである。人の言うことや世間の常識にこだわってはいけない。ここでは、こだわらないことにこだわるという、ややこしいことが起きている。これらもまた、エゴロジーの重要な教義である。

イギリスの高級車、ジャガー（通の発音は「ジャギュア」または「ジャグア」）の広告は、いつでもエゴロジーのにおいをぷんぷんと発散している。近ごろはこんな具合である。

「ステイタスなんかいらない。スタイルがあればいい。

大切なのは自分の生き方にスタイルがあること。だから、本当に気に入ったものしかいらない。まわりになくていい。そんな生き方を、より加速させるフォルムを S-TYPE といいます」

ステイタスシンボルの代名詞のようなジャガーが、みずから「ステイタスなんかいらない」と言い切るのであるから、これは相当なイヤミである。しかし、「ベーネベーネ」は五百円で買えるが、ジャガーはそういうわけにいかず（ちなみに S-TYPE の上級車種、4.0 リッターV8 エンジン搭載モデルは 763 万円である。家の前にとめてある日産マーチが九台買える）、あんまり書くと単にひがんでいるだけと思われるだろう。

ジャガーにこう言われては、トヨタも黙っているわけにいかない。次のように消費者にアピールする。

「あなたが楽しまなくって、誰が楽しむの？

日本は働きすぎだ。と、世界は言った。その真ん中にあなたはいた。そう。いっぱい働いてきたのだから。『50 代からが一段と楽しい』『60 代・70 代もずっと楽しい』誰もがそう憧れるくらいに、もっともっと楽しみましょうよ。（旅行でも、スポーツでも、なんでも、あなたらしく！）

日本は楽しみすぎだ。と、世界が言う。今、あなたから始まるそんな素敵な未来へ向かって、トヨタも走りたいと思います。

あなたに新しい安全性能、環境性能、そして、楽しさを乗せて」

こんなふうにさあ楽しめやれ楽しめとけしかけられては、買う前に胸がいっぱい、おなかもいっぱいになってしまう。しかし、こんな広告が一度に何千万もの人の目にとまるのであるから、これはもはやマス・エゴロジー、エゴロジーの飽和状態である。あらゆる価値の基準は損得、または好き嫌いで、それはすべて自分で決めていいことになっている。みんながそうしているのだから、同じようにしなければ損である。日本全国、四季を問わず阿波踊り状態になっている。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃソンソン」なのである。

エゴロジーの洗礼

ほとんどの子どもは、すでに赤ちゃんのころエゴロジーの洗礼を受ける。子どもの人気番組「ポンキッキーズ」で、「ピピカソ」という歌が流れるが、その中には次のような決定的フレーズがある。

「ピーピピピピ　ピーカーソーもダビンチもー　いーいかどうかはじぶんでーきめるー」

カタブツの美術の先生に聴かせたら、「キミィ、ちょっとそれは違うんじゃないの」と言うかも知れないが、それは野暮というものだ。子どもにとって、目が四つ描いてあったり、鼻が変な方向を向いたりしていることで大事なのは、それがいいかどうかをピカソが自分で決めたということである。芸術的な意味とか美しさなんてどうでもいい。それは大人も同じで、だから「たけしの誰でもピカソ」という番組が人気なのである。天才画家ピカソも、日本ではエゴロジー教の宣伝マンにされてしまった。エゴロジーのツボをきっちり押さえれば、何でも売れ、何でも流行る。この法則の発見を、どこかの企業で買ってくれないだろうか。

エゴロジーとひきこもり

エゴロジーの流行と定着が、ひきこもり者にとって福音と言うべきところがあるのは明らかである。いいかどうかを自分で決めるのがエゴロジー社会のルールだから、部屋から出ようと出まいと、そのことでとやかく言うのは余計なお世話である。親であってもこの

ルールを破ることは許されない。子どもにも人権があるのだ。自分の人生を自分で生きるという子どもの権利を奪ってはいけない。その代わり、親の方にも子どもに干渉されない権利がある。親子といえどもしょせんは別の人格、この世で一番身近な他人なのだ。そうなれば本当の赤の他人など、もはやモノか空気である。関わるのも関わられるのも迷惑でうっとうしい。そこから逃れるもっとも確実な手段はひきこもることになってしまう。親も最初のうちはうるさいが、そのうちに静かになる。こちらが黙っていても、親にはカウンセラーがこう言ってくれる。「しばらく様子を見ましょう。いまのお子さんはサナギなんです。ひきこもる時間が必要なんです」。

昔、「私は貝になりたい」という名作ドラマがあったが、いまの若者はみんなサナギになりたがっている。深海でひっそりと一生を終える貝ではなく、部屋の壁にへばりついて、いつの日か派手に脱皮することを夢想するサナギである。その脱皮は自らの努力で成し遂げるのではなく、向こうから勝手に、ある日突然訪れてくると期待されている。不真面目と怒られるだろうが、サナギだけに「虫がいい」。

外野からは、お父さん、お母さんが自分の人生を充実させて、生き生きと楽しく生活することも大切ですよというアドバイスもある。親が人生を楽しんでいれば、その姿を見て子どもたちも勝手に楽しむようになる、それが自立した親子関係というわけである。

そう言われて、子どもに注いでばかりで下向きだった視線をフト上げてみれば、そこにはきらびやかなエゴロジー社会が広がっている。「踊らにゃソンソン」と言ってみんなが踊っている。その踊りにうまいもへたもない。勝手な振り付け OK で、自分が楽しくて満足できればいいことになっている。

一度きりしかない私の人生、自分が主人公になって生き抜かなければ生まれてきた甲斐がない。損をしてしまう。それはかえってこの子にとっても不幸なことではないのか。こうして親の子離れ、子の親離れが完成するというわけである。ひきこもりは子どもが自立するために産みの苦しみを味わっていると考えられていて、一足先に親が自立してみせる。しかしそれは実際のところ、孤立と縁切りに近いものである。親も子も「自分は自分、ほかの人は関係ない」という信念に凝り固まってしまう。

エゴロジーと選択

エゴロジー社会の重要なキーワードは「選択」である。何でも自分で選ぶことができると考えられている。好きなものは取り、嫌いなものは捨てる。楽しいことはして、つまら

ないことはやらない。貪欲に追求する反面、我慢は絶対にしない。

学校がそうなりつつあることはすでに述べた。そういう中で教育を受けた子どもたちがどんどん成人して社会に出ていくのだから、仕事をする人がみなそうなる。全員ではないにせよ、割合が急増する。フリーターの増加現象は、その一つの表れであろう。厳しい上司や疲れる仕事、きついノルマに苦しむのはまっぴらごめんだ。非常勤やアルバイト、契約社員、パートなら、不景気な世の中でもけっこう働けるものである。むしろ雇用する側は経費削減のためにリストラを進めたいから、常勤より非常勤の人員を増やす傾向もあろう。

地位は不安定で収入も増えないかもしれないが、職場で我慢してストレスをためるくらいなら、手っ取り早く稼いだお金で当分の間楽しめた方がいいと考える人は多い。かつて日本人はエコノミック・アニマルと呼ばれたが、いまや「カネ」では動かない人が増えている。エゴロジック・アニマルに変化したのかも知れない。別に進歩したわけではないから「進化」ではないだろう。

ものや仕事、生き方が自由に選べるのが素晴らしいことだと信じられている。当然人間関係も自由な選択によって流動化する。ウマが合えば付き合うし、カチンとくれば即絶交である。パソコンや携帯電話による電子メールの普及は、この風潮にターボ付きで拍車をかけた。

京都で起こった「メル友」連続殺人事件はひとつの象徴であろう（2001 年５月犯人逮捕）。被害者は女子大生と OL であり、OL の女性の方は、犯人と出会い系サイトで知り合ってからの四日間で、二十数回に及ぶメールのやりとりをしていた。一日平均六～七回、まるで恋人並みの濃密さである。そして初めて会った夜に殺害されている。メール交換→殺害、この落差の激しさ、ここに本事件最大の特徴がある。交際の果てに別れ話が持ち上がり、それがこじれたあげくの殺人などというものではないのだ。憎しみとか恨みとか、哀しみとか怒りとか、殺人につきものだったはずのドロドロした気持ちのもつれが見当たらない。この犯人、西島宏昭容疑者にとっては、女性の首を絞めることと携帯のスイッチを切ることがまったく同じだったとしか考えられない。

これは、「選択」の、究極の形のひとつである。「いらない」人は、ゴミと同じに捨て去られる。反対に「欲しい」となったら何が何でもモノにしなければ気がすまない人が、ストーカー犯罪を犯したりする。どちらにしても、自分は好きなように選択するが、相手にはその余地を与えない。

進む選択社会

対人関係において選択が極端に進むと犯罪になる。殺人か拉致・監禁かのどちらかである。そこには自分の都合しかない。エゴロジーたるゆえんである。しかし現在、そこまで行かない選択は、多いに奨励されている。いままで選べなかったものでも、どんどん自由に選べるようになってきた。規制緩和が進んだお陰でもある。

公立の義務教育では、「生徒は先生を選べない」と言われていた。いまでは学区が撤廃され、親と子どもはどこでも自分の行きたい公立小中学校を選べるようになりつつある。いまのところ、入学後に担任を選べるところまでは行っていないが、こんなもの、制度をちょいといじれば簡単である。そのうちに圧力がかかって実現するのではないか。「社会にニーズがある」と言えば、水戸黄門の印籠が出たようなものだ。

結婚の際、男女がお互いを選択するのは、これはまあ当然である。しかし、その選択に失敗したと嘆く人間がこうも多いのはどうしたことか（どうでもいいけれど）。ついでながら、最近は同性婚が承認される場合があるので、別に男が女を、女が男を選ぶ必要はない。好きであれば同性でも結婚ができるように選択の幅が広がった。動物や物質と法的な婚姻関係が結べるところまでは、いくら何でも行かないだろう。しかしいまから百年、二百年たったらわかったものではない。

血のつながった親子の縁だけは、どうしても選べない最後の砦であったが、それさえも最近は崩れてきた。不妊治療が進歩したお陰である。ついこの間まで赤ちゃんは人知の及ばない「授かりもの」だった。欲しければもらえる、いらなければ捨てられるなどというものではなかった。しかし、体外授精技術や精子・卵子の凍結保存技術などが格段に進歩して、子どもは授かるものではなく作り出すものへ変わってきた。つまり製品である。

製造に不良品はつきものである。どんなに製造過程をコントロールしても、100%不良品を出さないことは不可能だ。あんまり赤ちゃんをモノ扱いしたくはないが、この世にはそれを仕事にしている人もいる。そこに「社会のニーズ」があるからである。不幸にも「不良品」ができてしまった場合、注文主としてはそれを引き取り（買い取り）たくない。アメリカでは、代理出産で障害児が生まれてしまい、依頼した夫婦が「障害児はいらない」と断った問題が起きた。一見、選択が自由になればなるほど、どうにもならない選択の不自由さも、こうしてクローズアップされることになる。明るさを求めれば求めるほど、陰の暗さが際立ってくるのだ。

親はエゴロジー思想によって、子どもを自由に選択しようとする。しかし、生まれてく

る子どもにだけは、とうとう選択権は与えられない。大富豪の家に生まれるか、犯罪者の子として生まれるか、飽食ニッポンに生まれるか、飢餓のアフリカに生まれるか、平和な時代に生まれるか、戦時下に生まれるか、子どもに選択の余地はない。そもそも生まれてくるかどうかを自分では決められない。勝手にこの世に放り出されてしまうのである。

ひきこもった人が親を「どうしてオレなんか生んだんだよ」と言って責めるが、それは子どもに選択権がないことを恨む苦悩の声であろう。もっとも、親にとってみても、子どもがひきこもるかどうかを選ぶことはできないのだ。ひきこもる子どもを望んで選び取ったわけではない。

つまり、人間は根本的に、自分の存在に関して選択の自由を持っていない。また、自分で選択できたと思っているほとんどのことが、実は外部から勝手に与えられたことである。一流大学に合格できたって、その大学は他の人が創ったものである。大恋愛の末に望み通りの相手と結婚できたとしても、その相手は別に自分が生み育てたわけではないし、所有物でもない。

ついに登場「選択縁」

しかし、あらゆることを思い通りにしたいという、選択を望む人々の欲望には際限がない。坂道を転げ落ち、雪ダルマ式に膨れあがっていく。そして時として、その後押しをする人がマスコミに登場する。

2001 年 5 月 29 日付毎日新聞「新世紀の思考　緩やかなきずな」というコーナーに、上野千鶴子・東京大学教授（社会学）が次のような見出しで文章を寄せている。

「『家族の世紀』の終わり・・・『選択縁』でアイデンティティーの危機管理を」

「アイデンティティー」とは、よく聞くようで、しかし案外その意味が知られていない言葉ではないだろうか。日本語に訳すと「自己同一性」と言う。こうしてもピンとこない人は多いだろう。アメリカの心理学者エリクソンが提唱した概念である。簡単に言えば、「自分は自分だ」という思いである。「自分はこれでいいんだ」という肯定の気持ちや「自分はこのままで大丈夫」という自信などが、アイデンティティーの感覚である。したがって、「自分はこれでいいんだろうか」「この先やっていけるだろうか」などと不安になるのがアイデンティティーの危機である。上野氏はどういう危機管理で、このピンチを乗り

切ろうと言うのか。本文には次のようにある。

「家族や会社だけが主要な人間関係である人々は、それを『卒業』してしまうと同時に、人間関係そのものを失う」

ここでちょっと説明を挟むと、上野氏の言う「人間関係の卒業」とは、たとえば配偶者に先立たれたり、離婚したり、子どもが独立して家を出ていったり、あるいは勤め先を定年になったり、会社が倒産してしまったりすることなどである。上野氏は続けてこう言う。

「血縁でもなく地縁でもなく社縁でもなく。脱血縁・脱地縁・脱社縁の人間関係をわたしは『選択縁』と名づけたが、その核心は加入も脱退も自由なこと。あちらがだめならこちらがあるさ。選択縁とは、ひとつの縁での失敗が全人格の否定にならずにすむ、アイデンティティーの危機管理方式である」

さすが、自信に満ちあふれた論理展開である。上野氏はシングルで子どもも生まなかったが、三十代の終わり頃から、子育てに一段落した友人たちが温泉旅行に行こうと寄ってきて、五十代になると夫と死別離別した友人たちが海外旅行のお誘いをかけてくるようになった、と言う。つまり、夫や子どもを持った女性たちはみな家庭というお荷物を背負って人生のマラソンコースをひた走っており、ひとり悠々とおのれの道を歩んでいた上野氏は、彼女たちから見れば「一週遅れのトップランナー」であって、アラみんな、荷物を降ろしたらやっと追いついて来られたのね、遅かったじゃないのさというわけである。

選択縁という幻想

最初に断っておくが、何も上野氏の生き方にケチをつけようと言うのではない。ひとりの女性が（もちろん男性であっても）シングルでいようが子どもを作らなかろうが、温泉に浸かろうが海外旅行に行こうが、そんなことは個人の自由である。ここでは、上野氏の言う「選択縁」が本当にあるのかどうかを考えてみたい。

縁にはいろいろなものがあるが、上野氏は脱出すべきものの代表として血縁・地縁・社縁の三つを挙げている。このうち、社縁が一番「緩やかなきずな」の呼び名にはぴったりだろう。会社を辞めてしまえば、そこで社縁は切れる。つなげておくか切ってしまうかは、

個人の主体的な選択の自由に任されている。一度切ってしまうと、次につなぐのはなかなかたいへんである。しかし、非常勤やパートなど、最近は選り好みさえしなければ働き口がけっこうあるので、その問題はクリアしやすくなっている。ただし、高齢者には相当きびしい現状があることは間違いない。

しかし、その社縁でさえも、縁を 100%自分からで作り出すことはできない。転職先はそこの創業者が作った会社である。独立自営を選んだにしても、顧客がつかなければあっという間に倒産する。お客さんを自給自足というわけにはいかない。社縁は、どんなにあがいてみても「与えられた」以上のものを自分では創り出せないことがわかる。

地縁にしても同じである。生まれ故郷に見切りをつけて他の土地で暮らしても、そこで新たな地縁が生じる。とっかえひっかえ選択してみても、おのずと限界はある。与えられた条件で折り合いをつけなければならないことが、必ず生じるのだ。

血縁となれば、これは決定的である。前にも述べたように、人間は自分の生まれを自分で選ぶことは絶対にできない。通常の性行為で受精するか、顕微鏡の下でハリにつつかれて人工授精させられるか、当の赤ん坊には決められず、勝手にやられてしまうのである。また、一生をシングルで、子どもも持たずに生きたとしても、それは別に血縁から自由であったことを意味しない。上野氏は「加入も脱退も自由」「あちらがだめなら、こちらがあるさ」と言うが、それを本当に実現させようとしたら、この世は大混乱に陥る。

血縁から自由になりたいがために、まず親を殺し、もしいたら配偶者を殺し、子を殺す。そして、容姿端麗、頭脳明晰、大金持ちの若い相手に、新しく自分の子を産む手伝いをさせる。不出来だったらさっさと捨てて、納得のいくまで子作りに励む・・・。ほとんどマンガだが、血縁を自由にしたがるとはこういうことである。その人の一生とはいったい何だったのか。エゴロジーの完成を目指した果ての自滅である。

選択と危機の同時進行

このように、人間が本当にとことんまで自由な選択を実現しようとしたら、何らかの形で犯罪的行為になってしまう危険性がきわめて高い。選ばれる相手や対象のことを考慮せず、自分の都合だけを優先させるためである。

社会がある程度平和に維持できているのは、人々があまり自分の選択権を主張せず、ほどほどに抑えて、他者との折り合いをつけている時である。これまで比較的、そういう傾向が強かったのが日本社会と日本人であった。「水と安全がタダ」の、世界でまれに見る

平和な国と言われていたのである。

しかし、だから日本人は「個」が「確立」していないのだという意見は、終戦直後から強かった。主体性がなく、自己主張せず、自立できず、善悪を自分で決められず、ひとつも自分で選べない情けない国民、日本人。そんなことだから戦争にも負けてしまったということでもある。

こういう反省と批判は、過去半世紀以上に渡って繰り返されてきた。そして、「個の確立」を目指そうという提言は、時代を追うごとに激しくなり、はた目には洗練されているような装いも身につけてきた。先に紹介した上野千鶴子氏の文章は、現時点での最先端であろう。

しかし、個の確立や自由選択が強く主張されるのと並行して、日本社会は混乱し、荒廃し、その程度はきわめて甚だしくなっている。両者の因果関係にはさまざまな意見があろうが、そのふたつがほとんど同時的に起こってきているのは事実である。

日本人自身は、どうも自国の混乱に対する認識が今ひとつ乏しい面がある。かえって外国人の方が、ずっと的確に事態を把握しているように見える。

2001 年 6 月 8 日、大阪の小学校に包丁を持った男が乱入し、二十人以上の児童と教師を殺傷するという想像を絶する事件が起きた。犯行開始から取り押さえられるまではわずか十分ほどであったという。これだけの短時間に、たった一本の包丁であそこまで人間を傷つけられるなど、とうてい信じがたい。アメリカの銃乱射事件でも、ここまでの犠牲者は出にくいだろう。

事件翌日の読売新聞コラム「編集手帳」は、「近年の日本の治安悪化の傾向も思わざるを得ない。・・・どこか社会秩序のタガが外れかけているような、そんな不安感が漂う」と書いている。ここまでの大量殺人事件に対するコメントとしては、切迫した危機感があまり感じられない。

海外メディアは日本の反応よりはるかにシビアである。同日、読売は次のような速報を紹介している。

「伝統的に安全な日本では例がない・・・米国では、学校での銃乱射が日常生活の暗い一面となりつつあるが、日本の学校でこれほど無差別で、悲劇的な事件が起こることはなかった」（ロイター）

「凶悪犯罪発生率が高まり、若者の絡む無分別な事件が続いたことで、日本が安全

であるとの誇りはすでに揺らいでいたが、今度でまた打撃を受けた」（ワシントン・ポスト）

「日本では六年前のオウム真理教による、地下鉄サリン事件以来、最悪の大量殺人」（AP）

「サリン事件と同様に、間違いなく国民の心に深い傷を残すだろう」（ロサンゼルス・タイムズ）

現実は、「社会のタガが外れかけている」などという、生やさしいものではない。タガなどとっくに吹き飛んで、桶も樽もバラバラなのだ。日本社会に、もはや安全神話はないことを、海外は冷静に見抜いているようである。当の日本と日本人だけが「まだ大丈夫」と思いたがっている。

ひきこもりというタガ

ひきこもりの増加が青少年による凶悪犯罪を抑止するという考え方がある。外に出たら何をしでかすかわからない若者が家に閉じこもっていれば、世の中は平和で安全であるということである。斎藤環氏は次のように言う。

「不適応がすぐさま反－社会的行動に結びつかず、むしろ非－社会的行動に向かうことは、さしあたりは若年層の犯罪率の低下に貢献するがゆえに歓迎すべき点も多い。この意味で『ひきこもり』の増加は、あきらかに日本社会の平和に貢献している。突出した事例のみから『ひきこもり』の危険性をあげつらうよりも、まずこのような肯定的側面に対する配慮を忘れるべきではないだろう」

（「ひきこもり」の比較文化論）

こうなると、ひきこもり者を社会に引き出そうとする働きかけは、犯罪率の上昇を招く危険な行為と考えられる。ただ、いま現在は、ひきこもりを無理に引っ張り出すことはタブーだ。ちょうど天照大神が天の岩戸から外をのぞいたように、社会や世間が面白おかしく遊んでみせれば、ひきこもり者もそれにつられて自分から出てくるだろうというのが主流の方針である。だから、表面上はひきこもる人のことは放っておいて、インターネットやら携帯のメール交換やら、ゲームやらコミックやらアニメやら、車やらバイクやらファ

ッションやら、ダンスやらカラオケやら路上ライブやら、ゴルフやらグルメやら旅行やら、スキーやらスノボやらテニスやらサーフィンやら、バス釣りやらアウトドアやらバーベキューやら、・・・息が切れてきた。とにかくそういうものでみんなが阿波踊り的に遊び呆けていれば、いかに頑固なひきこもりでもその誘惑に負けて勝手に家から出てくるに違いない。さあみんなで楽しく遊んで暮らしましょうということになっている。ひきこもりと遊びの楽しさのどっちが勝つか、綱引きをしているのである。アリとキリギリスのお話は、現代ではもはや教訓としての意味をもたない。暗くてダサいアリになんかなったら、せいぜい巣にひきこもるのが関の山、それよりみんなでキリギリスを見習いましょうと言われている。

それでは、そうやって誘惑につられて外に出てきたひきこもり者たちは、危険な犯罪を犯したりしないのだろうか。そこのところは誰も発言していないようである。そんなことはわかりません、やる奴はやるし、やらない奴はやらないでしょうということなのだろうか。もしそうなら、少々無責任である。

ただし、次のような考え方はある。すなわち、現代人、特に若い世代は多かれ少なかれ合理的で、打算的だから、リスクに対して敏感である。せっかくこの世の春を楽しもうと思って家から出てきたのに、その足ですぐに犯罪を犯したら、今度は刑務所に放り込まれて出たくても出られなくなる。ひきこもりは自分の意志だったが、刑務所暮らしはそうは行かない。そんな馬鹿げたことはしないだろう。だから、人生の楽しさと、この世のおもしろさを教え、示してやれば、そういう危険はかなり避けられるということである。

しかしながら、ひきこもりの果てに凶悪犯罪に至った例を見てみると、そんな理屈はもはや通用していないことがわかる。何が楽しいのかは自分で決めるのがいまの世の習いだから、いかに世間が「ホラ、これ面白いでしょう？　楽しいでしょう？　一緒にやりましょうよ」と誘っても、「冗談言うな、オレは人を殺す方が楽しいんだ」となってしまうことが起こり得るのである。そのあと慌てて「そんなことしたら警察に捕まるぞ」と、常識的なブレーキをかけてみても、おそらく「いまさらジロー」で手遅れである。

ひきこもりを社会のタガと見なすのは、あまりにも安直かつ危険な考えと言えないだろうか。

タガは規則、規範

結局、社会のタガになりうるのは、昔から決められてきたルール、規則や規範しかない。

これは、自由な選択とその権利とは、正反対のものである。やりたくてもやってはいけない、欲しくてもとってはいけない、言いたくても言ってはいけないという規範だけが、タガになるのである。

しかし、戦後の日本は、それまでの反動からだと思うが、このタガをみずからセッセと外すことを大目標にしてきた。そのあげくに「タガが外れかけているようで不安」などとぼやくのは、何をかいわんやである。

しかし、日本人はこのタガ外しに実際のところ大成功している。それはいままで見てきたような犯罪例を見ても明らかであるが、犯罪者にならないまでも、タガが完全にすっ飛んでしまっている人はいくらでもいる。一番顕著なのが子どもたちで、日本の子どもの規範意識の低さは、世界でトップ、いや反対だ、最低である。

その実例はいくらでもあり、わかりやすいもののひとつとして、少し以前になるが、日本青少年研究所が 1996 年に行って文部省がそのデータを採用した「日・米・中の高校生の規範意識」という調査がある。

これは、高校生に対していろいろな社会規範に反する行動項目を示し、「それをするかどうかは本人の自由でよい」と回答したものの割合を三カ国間で比較している。

図１　日・米・中の高校生の規範意識（文部省，1998）

⑴図版ご希望の方はご連絡ください⑵

これを見ると、日本の青少年の規範意識がいかに崩壊しているかよくわかる。万引きと麻薬に関してだけは日本とアメリカの順が入れ替わっているが、その場合は三カ国ともがかなり低い数値にとどまっている。日本だけが飛び出している「先生や親への反抗」「学校のずる休み」は、米中どちらも日本の足元にも及ばない。すごいものである。いやいや感心している場合ではない。

売春に関しても、何と日本の場合は四人にひとりが「したければ本人の自由で OK」と答えている。アメリカでは調べてもいない。つまり質問にすらならないほど強烈に非常識なことなのだ。お小遣い（とは言っても数万～数十万円の額である）を稼ぐために、経済的に困っているわけでもない女子学生が援助交際をするなど、日本でしか起こらない異常現象である。この調査が行われてからすでに数年たっているから、いま新たに同じ質問をしてみたら、割合はもっと上がり、外国との差はさらに大きく広がっているだろう。

なぜ、世界の中で日本でだけこんな事が起きるのだろうか。それは、日本にエゴロジーが深く広く浸透し、何でも自分の好きなように決めていいという選択の自由が、あらゆる場面で当たり前になったからである。

生きていく上での好き勝手、わがまま、やりたい放題が日本ほど通用する国は、世界で他にはない。その結果、ひきこもりという理解不能な現象も、日本だけに起こる。

火の車ニッポンよどこへ行く

いまの日本を自動車にたとえれば、社会規範であるブレーキとハンドルが壊れている状態である。無謀にも、その上さらにアクセルが全開になっている。前に立ちはだかって止めようとする人は、跳ねとばされ、ひき逃げされる。キレた人間を直接いさめようとして、包丁、ナイフ、金属バット、鉄パイプの犠牲になった人が、ここ数年何人にのぼったことか。若者だけが暴れ回るのではない。七十八十の老人が「カッとして」気に入らない相手を殺している。

しかも、世の中に対して発言力を持っている人が、さらにアクセルを踏め踏めとけしかけるのだ。また、多くの企業が商品というガソリンをドバドバ供給する。足りなくなったら外国から輸入してくる。景気が悪いのに燃えさかって暴走するのだから、これぞまさしく火の車である。ここで思いついて「火の車」を辞書で引いてみたら、一番目の意味として「地獄にあるといわれる火の燃えている車。獄卒が罪ある使者をのせて地獄に送るという」と書いてあるではないか（広辞苑）。日本の現状に当てはまりすぎている。

エゴロジーは純粋な民主主義である。民主主義をナベに入れ、火にかけて煮詰めたらエゴロジーが結晶化してくるのだ。日本は戦後半世紀以上をかけてその作業を国家的規模で行ってきたと言える。析出してくる時期によって、結晶はいろいろな形をとる。高度経済成長期のモーレツ社員の人々がいたのは、かなり初期である。このころはまだ、義理とか人情とかしがらみとかいった、いろいろな「不純物」が混じっていた。それだけに味わいもあったであろう。

モーレツ社員が出尽くしたころ、別のものがいろいろ現れてきた。女性で言えば「くれない族」とか「金妻」とかいったあたりがある。その後不倫ブームはすっかり定着し、近年は子どもの虐待が激増してきた。

そして結晶化は子どもに及び、いじめ、不登校、非行、暴力、学級崩壊と来て、いまついにひきこもりの大量出現となった。エゴロジー純度はきわめて高い。クスリにしたら、ものすごくよく効く。持続性、依存性が抜群である。インターネットで無料配布されて、子どもがみんな呑み出した。暴走中の車に乗っているのは怖いので、ラリって恐怖心を消す必要がある。そろってハイになれば、「赤信号みんなで渡れば怖くない」のだ。

日本の民主主義は外国、おもにアメリカからの輸入である。多くの日本人は、民主主義の完成度において未だアメリカには及ばないと思っている。ところがどっこい、それが大間違いである。日本ほど民主主義を完成させた国は、世界に例がない。日本人に自覚がないだけである。酔っぱらいが「わーらひのろこがよっれるんれひゅかぶひょー（私のどこが酔ってるんですか部長）」とクダを巻くのと同じだ。

Ⅵ　ニッポンの民主主義

民主主義とは

日本の民主主義を、さらに広い視野において見てみる。そもそも民主主義とは何なのか。本書の前の方で、民主主義とは「何でもあり」の世の中であると書いた。これはマイナスイメージを抱かせる言い方なので、多くの人は「本当にそうなのか？」と警戒するであろう。

だいたい、一般的に言って、民主主義にはマイナスのイメージがない。あってもきわめて少ない。最近、たとえばブッシュ大統領とゴア候補が争ったアメリカ大統領選挙で、決着がちっともつかなくて、世界中がハラハラしたことがあった。あのときは、「民主主義の危機か？」とだいぶ騒がれたが、危機的とされたのは民主主義そのものではなく、選挙人制度と開票システムの方だった。あの出来事は、民主主義のさらなる確立を目指さなければならない、という金科玉条に、世界中のみんなが深くうなずいて終わったのである。

とにかく、民主主義、と言えばすなわち「いいこと」「いいもの」ということになっている。では民主主義とは何か。いまから高等学校倫理社会の授業を始めます。居眠りしないでください。あっ、本もそのままにお願いします。コーヒーはご自由にどうぞ。

『広辞苑』を引くとこう書いてある。

「語源はギリシア語 demokratia で、demos（人民）と kratia（権力）とを結合したもの。すなわち人民が権力を所有し、権力を自ら行使する立場をいう。古代ギリシアの都市国家に行われたものを初めとし、近世に至って市民革命を起した欧米諸国家に勃興。基本的人権・自由権・平等権あるいは多数決原理・法治主義などがその主たる属性であり、また、その実現が要請される」

広辞苑は重いし固い。

もう少しやさしくかみ砕いたものに、『学研大国語辞典』がある。その説明は以下のようになっている。

「もともと政治上のことばで、主権が人民にあるという政治の考え方で、リンカー

ンの『人民の、人民による、人民のための政治』ということばがよく言い表している。しかし今日では、人間の自由や平等を尊重する思想という意味で、政治上だけでなく広く使われている」

これで中学校社会科の公民という雰囲気になった。

権力

一番のポイントは、権力（主権）が人民、つまりごくふつうの人々にある、ということである。誰が何をしてもいいということだ。ある権力の行使を、できる人とできない人がいるというのは民主主義に反している。誰でも、何でもできるというのが民主主義の大原則である。本書の定義「何でもあり」は、あながち間違いではなかった。

ただ、それがストレートに通用する世の中だったら、これはメチャクチャになる。弱肉強食の無法地帯が出現する。ホッブズというイギリスの哲学者は、それを「万人の万人に対する闘い」と呼んだ。人の世を自然状態のまま放っておけばそうなってしまうと言う。

しかし、人間は動物と違って「理性」を持っている。人はその理性にしたがって「契約」を結び、国家を作った。これが「社会契約」の考え方で、ホッブズ以後、ロック、ルソーといった思想家によって継承、発展させられていく。

つまり、契約、約束事を決めて、無茶な権力の乱用をコントロールしようということである。具体的には憲法や法律である。契約上、警察官とか裁判官を決めて、その人たちだけは契約違反をした人間を捕まえて処罰する特権を持っている。民主主義をうまく機能させるために、こういうルールが決められた。

権力者もキレる

しかし、ひとつ困ったことがある。人間はいつでも理性的でいられるとは限らないのだ。窮地に追い込まれたり、欲に目がくらんだり、色香に迷ったりすると、すぐに頭の中がショートして理性がすっとんでしまう。いわゆるキレるという状態である。個人的レベルでは、こんな事は日常茶飯事である。近年では、理性がとんだ方が人間らしくてステキ、と言われる。しばらく前、「バカヤロー!!」という映画（テレビ）シリーズが流行したではないか。『失楽園』の大ブームもあった。多くの現代人は、理性を守るより捨てることにあこがれている。

国家レベル、外交レベルでも理性がとぶことがある。これは時として大惨事を招く。古いところでは古代エジプト王国の滅亡がある。ローマの政治家アントニウスは女王クレオパトラにぞっこん惚れてしまい、それがもとでローマとエジプトとが戦争になった。表現は悪いが、アントニウスは女性と引き替えに国を売ったようなものである。理性もへったくれもない。

古代人が無知で愚かだったからそういうことになったのかと言うと、決してそうでもない。第二次世界大戦末期には、ソ連軍の満州侵攻というものがあった。それ以前に日ソ間には中立条約があったのだが、その裏でソ連は米英と通じ、対日参戦の秘密協定を結んでいたのである。国際条約といえば、これはもう理性が字になって壁にかけてあるのと同じだ。しかし、戦争という非常事態の下では、字になっていようが何だろうが、そんなものは簡単にひっくり返ってしまう。おかげで数千人の中国残留孤児が発生してしまった。また、当時のトルーマン米大統領は、自分の「男らしさ」を証明したいがために、日本への原爆投下を決断したのだという説がある。これも理性以前の話ではないか。もしこの通りだとしたら、大統領も五歳の子どもも同じである。幼児の方が大人の言いつけを守るだけまだマシだ。

現代日本の話はぐっと小粒になるが、以前芸者さんとのつきあいがもとであっさりクビになった総理大臣がいた。その点、不倫がばれても堂々と任期満了まで勤め上げたクリントン大統領は大物だったかも知れない。現役裁判官の、女子中高生買春事件というのもあった。

契約と理性による権力のコントロールは、実はほとんど不可能なのである。ここに、民主主義最大と言っていい問題点がある。権力が理性によるコントロールを失った時、民主主義社会は、すぐさま生き地獄に姿を変える。その差は、ほとんど紙一重である。

ナタデココと戦争の話

民主主義では、人民に権力がある。政治的に見て、権力の大きなものと言えば、だいたい経済力と軍事力、すなわち金と力である。それらをどう使うかは人民次第であり、使い方の善し悪しも人民が決める。もともと決まっていることはなく、都合によっていかようにも変わり得る。

すると、経済の世界でもいろいろと矛盾が起こる。たとえば、かつてナタデココがブームになったとき、日本の商社がこぞってフィリピンに出かけていった。地主さんを指導し、

借金で工場を建てさせ、ナタデココをジャンジャン作らせて、どんどん日本に輸出した。どういうわけか日本人はこれに狂っていたから、連日買ってきてむさぼり食べた。地主さんもバリバリ稼ぎ、勇んで第二、第三工場を新築して規模拡大を図った。しかし、ある日突然、日本人はナタデココを食べるのをピタリとやめた。イタリアからティラミスが入ってきたからかどうかは知らないが、とにかく売れなくなった。商社という商社は一斉にフィリピンから引き揚げた。地主さんが驚愕して引き留めても聞く耳を持たない。残ったのは無人の工場と在庫の山、そして借金の山である。

多くの日本人は、その後ナタデココ生産者がどうなったか知らない。なぜか食べたくなったから（理由なんかないのだ）作らせて買ってきた、相手も儲けて喜んだ、それだけのことである。その後お互いが路頭に迷おうが再成功しようが、知ったことではない。お金の流れに善いも悪いもない。強いて言えば、儲かれば善で、損をすれば悪である。

似たようなことが、最近は中国との間で、シイタケやネギをめぐって起きている。かつてフィリピンが怒ったが、いま中国も怒っている。一方日本の農家も怒っている。怒った中国は、エアコンや自動車などに特別関税をかけて報復する。すると今度は日本のメーカーが怒り出す。三つどもえ、四つどもえで手がつけられない。商社にしてみれば火の粉をかぶらないうちに手を引くのが得策だろう。商社マンは儲けるのが至上命令だから、お金の扱いに善し悪しなど言っていられない。

軍事の世界でも、平和のための介入戦争という大矛盾が起きる。第二次大戦後でも、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、ユーゴ空爆など、枚挙にいとまがない。百歩譲って、平和維持のための最終手段と考えたとしても、どちらが正義でどちらが悪なのかは絶対に決められない。いまの日本はアメリカ側なので、国民のおおかたからもアメリカが正義で、イラクやユーゴスラビアが悪者に見える。しかし、ミサイルを撃ち込まれている側にしてみれば冗談ではない。日本もついこの間までは「鬼畜米英」と言っていた。

善悪を好き嫌いで決める

結局、みんなが賛成したことが善になり、真になる。みんなが反対したことが悪になり、偽になる。善悪、真偽の判断基準は人民のうちにある。これを究極まで押し進めたのが日本のエゴロジーである。日本では高校生の多くが売春を正当化するので、いつの間にか「そうだなあ、まあいいんじゃないの（ただしよその子がやる分には）」という風潮がなきにしもあらずである。親や教師には反抗するのが当たり前で、しない方がどうかしている。

ひきこもりだって何ら恥ずべきことではない。堂々とひきこもっていればよろしい。

こういうことがアメリカ人には理解できない。先生やお父さん、お母さんの言いつけは守らなくてはならない。学校をサボってはいけない。売春なんてもってのほか、アメリカ人を馬鹿にするのか！汚らわしい。一方で、こういうアメリカの若者を、日本人は理解できない。なぜなのだ？　なんでそうなるの？　ウッソー、信じらんない。どうして民主主義の本家本元のアメリカで、その純粋形態であるエゴロジーが発達しないのか。それは、アメリカにまだまだキリスト教の影響が色濃く残っているからである。

キリストの教えが、アメリカ民主主義がエゴロジーに堕落するのを防いでいる。アメリカでは、大統領就任式で、新大統領が、初代ワシントンから引き継がれてきている聖書の上に手を置き、神の名において職務を誠実に遂行することを宣誓する。権力の自分勝手な行使は神が許さない。そして、その誓いが守られることを、大多数のアメリカ国民も信じている。ブッシュ大統領の就任演説は、次のような言葉で締めくくられている。

「あなた方に神の祝福を。アメリカに神の祝福あれ」

アメリカのこういう様子を見ても、別に日本人は驚かない。しかし、自分の国で似たようなことが起きたら、おそらく腰を抜かすだろう。国会の議場に祭壇を設け、首相が仏像や神棚に向かって一礼して、「神仏に誓って職責をまっとうします」と宣誓したら、暴動か内戦が起きるのではないか。したがって総理大臣は、所信表明演説で国民に向かって「憲法にのっとって鋭意努力する所存です」と言っておしまいである。

日本の政治家にとっては、票を握っている国民こそが神様である。まさに「お客様は神様です」。しかし、この神様たる国民は、気分によって態度をコロコロ変える。小泉政権が発足したとき、青木元官房長官が「小泉さんが言っていることをそのまま森さんが言ったら、エライことになっただろうな」と漏らした。日本の国民とはそういうものである。善悪、真偽をわきまえているわけではない。好き嫌いによって動いているだけである。したがって日本人はエゴロジーで政治を振り回し、逆に政治によって振り回され、どんどん坂道を転げ落ちていく。

日本は世界の民主主義国家の中で、いつの間にかそれこそ一周遅れのトップランナーになってしまった。しかしいま、欧米のキリスト教倫理は急速にすたれつつある。厳格なイスラム諸国ですら、国民の間にイスラム教離れが進行しているそうである。世界中が日本

のまねをし始めた。近い将来、外国でもひきこもりが出てくる可能性は高い。

自由

自由も民主主義の重要な要素である。では、自由とは何か。この意味を『広辞苑』から引用していたらたいへんである。関連語も含めて六段、三ページに渡って書いてある。しかし、冒頭に「古くは、勝手気ままの意に用いた」と、興味深いことが書いてある。日本でよく言われることに、「戦後の日本人は自由とわがままをはき違えてきた」というのがある。しかし、語源をたどっていくと、日本人はそれほどズレた解釈をしていたわけではないらしい。ちなみに、仏教的にはまた違った意味があるようである。

語源はともかくとしても、日本人が自由（勝手気まま）の追求に貪欲であるのは確かだ。そして、自由と勝手のはき違え、に続いて言われるのは、「自由には必ず責任が伴う」ということである。しかし、このことがたいていの日本人にはピンとこない。多くの日本人にとって、責任とはとるものではなく、果たすものでもなく、逃れるものである。昭和三十年代に植木等が歌ったときには「無責任」もギャグのネタだったが、いまでは社会常識になっている。

もし、責任を果たしても果たさなくても結果が同じか、大して変わらなかったら、どうして責任が大切なのか日本人にはわからない。結果、というのはつまり損得のことである。エゴロジーニッポンにおいては得＝善、損＝悪であるから、責任問題は二の次三の次になる。損得に影響がなければ、責任は無視した方が合理的である。合理性も現代民主主義では善なるものの代表である。

もっとも、合理性ということをもう少し考えてみると、合理的であることが悪であるとは言えない。日本人は本当に合理的なのだろうか。日本人にあるのは損得勘定だけになりつつある。損得しか見えない視野狭窄状態を合理的と呼んでよいものかどうか。それはどちらかと言えば欲の皮が突っ張っていると言った方がピッタリ来る。

人の義

欧米キリスト教社会では責任、つまり「義、人の義」を果たすことは人間として当然である。それは損得以前の問題で、つまり日本とは価値観が正反対である。日本人はつい「どうして？」と聞きたくなるが「どうして」もへったくれもないのだ。神がそれを人の義として定めたからである。人間が生きるとは義を行うことである。信じてそれにしたがうの

が信仰ということである。

たいていの日本人には信仰がないので、ますます頭がこんがらがってくる。そこで、「ノーブレス・オブリージ」という外国語を輸入して理解しようと試みたりする。これは「高い地位に伴う道徳的・精神的義務」という意味である。つまり日本人は世界で類を見ないほど豊かになった。最先進国の国民として恥ずかしくないように、進んで義務を果たすべしということである。こんな意見に対しては「俺ぁそんなに偉くねえよ」と開き直ったらおしまいである。日本人には卑下と傲慢が混在している。こういう心理を「両価性（アンビヴァレンス）」と言う。

日本人に対して、欧米並みの自由と責任の両立を求めても、それは無理というものである。おおかたの日本人には、不合理と思えること、不利益に見えることは問答無用で切り捨てる習性が染みこんでいるのだ。それを変えようと働きかけてもよけい意固地になるだけである。

ニッポン民主主義において、自由とは限りない自分勝手の追求を意味する。そこにブレーキはついていない。

平等

平等と言えば、いま日本でトピックになっているのは「結果の平等か、機会の平等か」の論争である。もちろん、「機会の平等」を主張する方が優勢である。そうでなければグローバリゼーション、市場主義、自由競争の国際社会では生き残っていない。ただでさえ日本の国際的な地位は下降の一途をたどっている。これ以上順位を落とすわけにはいかないのだ。

日本は伝統的に「結果の平等」を偏重してきたと言われる。何でも均等画一の横並び主義、出る杭は打たれ、落ちこぼれは保護される。学校の勉強も、平均より少し下の学力に照準を合わせて進める。運動会の徒競走も、ゴール前で全員一時停止、それから手をつないでみんな仲良くテープを切る。

これがまずかった。バブルの崩壊と、それに続く「失われた十年」も、根本には「結果の平等」偏重主義がある。みんな同じとは、つぶれるときもみんな一緒ということである。日本民族の一家心中。冗談ではない、そんなことになってたまるか。

諸外国も日本に見切りをつけ始めた。1980 年代には、海外の企業はこぞって日本式経営を褒めそやし、取り入れようとしたものだった。終身雇用制による生活と身分の保障、そ

れに答える社員の忠誠心。それが日本企業の生産性を飛躍的に高めたと信じられた。まさに「ジャパン・アズ・ナンバーワン」であった。

しかし、バブルが崩壊して景気がどん底に落ちて以来、十年たって新世紀に入っても、日本は国際社会に完全復帰できない。少子高齢化が進み、若者は働かず、労働力が不足して景気は回復どころか超低空飛行でジリ貧である。アメリカ中央情報局（CIA）は 2000 年末、「日本は世界経済の三極に残れない」という見解を公表した。現在の「三極」とは、アメリカ、EU、日本である。ところが 2015 年には日本はそこから脱落するだろうと言うのである。ひどかった 1990 年代より景気は回復するが、それでも GDP 比較で中国に抜かれるだろうとも予想している。日本はまったく期待されていないし、下手をすれば足引っ張りのお荷物になりかねないと警戒されている。先頭集団から中間グループに滑りつつあり、さらにこのまま順位を落として、置いてきぼりを食いそうである。

エリートを養成せよ

日本はいまや崖っぷちに立っていて、転落は時間の問題のように見える。政界・財界のリーダーはしばらく前から猛烈に焦りだした。しかし、こうした人たちはほぼ例外なく高齢だから、自分でどうにかできることには限界がある。新しい能力を開発しようと思っても体がついてこない。やはり若い世代に期待をかけるしかない。そこで重要になるのが教育改革である。

「教育改革国民会議」の最重要目標に、「日本人を世界のトップランナーにする」が掲げられたことは、すでに紹介した。文部科学省も、「結果の平等偏重主義」と批判されてきた従来の方針をなかなか変えなかったが、世論の流れ（つまり社会のニーズ）に押されて、「ゆとり教育」の方向転換を発表した。

体験学習をメインに謳った「総合学習」については、前倒しの実施が始まったあとで「体験だけでは不十分」と言って現場の教師を慌てさせた。どういう授業をすればいいのか、何を目標にすればいいのか等で混乱が起き、抗議や質問の電話が省に殺到したそうである。

教育内容を規定した学習指導要領についても、これまでは「到達目標」「標準」という共通理解があった。もっとも、公立小中学校の授業をいくら真面目に受けていたって、それだけではいい高校、いい大学には行けない。そんなことはもう何十年間も世間の常識であった。しかし、本音はそうであっても、あくまでも建て前は「指導要領ができていれば十分である」とするのが、日本の学校教育の大前提にされてきた。

しかも今度は内容をさらに三割減らして、それをスタンダードにすると言った。ただでさえジワジワと子どもの学力は落ち続けているのに、そんなことをしたらとどめを刺すようなものである。世論は一斉に猛反発した。政財界、大学から一般国民に至るまで文部科学省を包囲しての一斉射撃、集中砲火である。

文部科学省も守備網をあっさり突破され、白旗を揚げるような形で「指導要領は最低の基準を示すもの」という見解を示した。「これだけできていれば十分」から、「こんなことはできて当たり前」への転換である。最前線で活動する兵隊、つまり学校現場の先生たちは、いきなり来た司令本部からの作戦変更命令にまたまたびっくり仰天である。しかし、子どもたちは毎日学校へ通ってくるのだから、まごまごしているわけにはいかない。

こんな調子で、とにかく「できる子」の芽を摘まず、やる気をそがず、エリート養成をためらわないことが確認された。そうでなければ日本の未来は暗い。ただ、エリートが育つ一方では、必然的に大量の脱落者が発生する。エリート養成をためらわないとは、同時に落ちこぼれの産出もためらわないということだ。

かつてゆとり教育が礼讃されていたころは、それでもなお生じてくる大量の落ちこぼれに社会が頭を悩ませていた。その状況を克服しようと、さらなるゆとりの導入が提案された。ことばは悪いが、このイタチごっこはえんえんと続き、そうこうしているうちに学力だけでなく景気、国際競争力など、つまり日本の国力そのものが非常に低下してきた。日本人はいよいよ追いつめられて、ついに「聖域なき構造改革」を叫ぶようになったのである。

機会の平等

しかし、教育プログラムから脱落してしまう子どもたちを放っておくわけにはいかない。それは憲法の「基本的人権の尊重」という規定に反し、国家の基礎を危うくする。したがって、ひとつにはセーフティネットを作ることが求められる。受験や転職に何回でも繰り返し挑戦できるようにしたり、福祉施策を充実させたりする。競争を激しくするが、負けてもいちおうの保障はするということである。

勝ちたかったら死にものぐるいでがんばれ。負けてもいいのなら手を抜いてよろしい。どちらにするかは自分で自由に選択せよと言う。あらゆる子ども、あらゆる人に対して、同じように選択の自由を保障するのが機会の平等である。

竹中平蔵金融担当相は、慶応大学教授だった頃「Weekly YOMIURI」の表紙を飾り、そ

の際に「がんばりたくない人はがんばらなくていいんです。がんばりたいと思う人だけが努力して成果を手にすればいい」という主旨のことばを寄せている。これが機会を平等にしようという考え方である。

しかし、誰でも、いつでも、自由に競争に参加できるようにしておくだけで、本当に平等が実現できると言えるのだろうか。たとえば、おなかが空いている人たちが待っているところで、テーブルの上にご馳走を並べる。「さあできましたよ。どうぞ召し上がれ」と一声かけると、待ってましたとばかりにみんなが殺到する。テーブルの近くにいた人、足や手の早い人、虎視眈々と狙っていた人、人を押しのけて平気な人などは、望み通りに空腹を満たすことができる。

しかし反対に、テーブルから離れていた人、何をするのも遅い人、やたらと遠慮深い人などは、たどりついたら皿はきれいに空っぽという目に遭う。こういう人たちだって、決して食べたくないのではない。お腹と背中の皮がひっつきそうな思いをして我慢していたのだ。しかし、テーブルに駆けつけたときにはいつもご馳走が消えているのである。

コックさんは、ひいきも差別も全然していない。ただ料理を作って並べ、待っている人には平等に「どうぞ」と声をかける仕事をこなしただけである。誰がたくさん食べようが食いっぱぐれようが、それはコックさんに関係ない。「アッシにはかかわりのねえことでござんす」、木枯らし紋次郎である。

これが機会の平等である。そして、セーフティネットとは、食いっぱぐれた人にも残り物をあげましょうということである。どこに平等があるのだろうか。勝つ人、勝てそうな人だけに都合がいいシステムである。

純国産で一番のエリートと言えば東大を出た人であろう。東大生の親の収入額は、平均よりかなり高いことが知られている。また、東大生の生まれ月を見ると「早生まれ」はだいぶ少ない。もちろん、こうした条件が絶対的に作用するわけではない。しかし、生育歴以前に、生まれ月、親のあり方などが、エリートになれるかどうかに大きく作用することも事実である。それらの条件は、本人の努力では変えられない。与えられた機会を甘受する以外にどうしようもないのである。それを、本来の意味での「縁」と言うのだ。縁は、最終的には自分で選ぶことができない。

つりあいをとる

チャンスを同じにそろえるだけでは「平等」とは呼べないことがわかる。あえて言うな

らそれは「対等」「同等」ということになろうか。平等の「平」の字には「つりあいがとれていること」という意味がある。程度や等級、ランクやレベルやサイズが同じでも、つりあいがとれていなければ平等ではない。反対に、そういったものが違っていても、つりあいがとれて平等になることはあり得る。

小学校の理科の実験で「てんびん」が出てくる。T字型のてんびんばかりの左右におもりをぶら下げて、つりあいの法則を学ぶものだ。この実験を覚えている方は多いだろう。一方にひとつ、もう一方に三つのおもりを下げても、支点からの距離を変えることでつりあいを保つことができる。しかし、左右が同じふたつのおもり同士でも、支点からの距離が違えば均衡は崩れる。

つりあいをとり、かたよりをなくすには、こういうことを考えなければならない。

民主主義はつりあいを無視する

先に述べたように、民主主義の原理は平等と、もうひとつは自由である。日本における自由は、勝手気ままの貪欲な追求だけになっていて、そこにブレーキはない。好きか嫌いか、利益になるかどうかが行動の基準であり、それは民主主義の純粋な形態、エゴロジーでもある。

民主主義の原産地である欧米の場合は、そこにキリスト教というブレーキが強力に効いている。聖書に反するようなエゴの肥大は、人間として許されない。神が許さないのだ。欧米において、善悪の判断基準は神にある。

日本では、善悪を決めるのは人間である。すると必然的に、みんなが賛成したことが善になり、みんなが反対したことが悪になる。援助交際はみんながいいと言うからいいのだ。下手をすれば殺人も同じように肯定される。「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いに、まともな答えが出てこないのがその証拠である。

したがって、日本で平等を実現するのは限りなく不可能に近い。平等とは、他人とのつりあいをとることである。それは、時として、進んで損をするということである。他者とのつりあいがとれていないことがわかったら、自分を抑え、ひかえて、人様を優先することである。自由とエゴの追求にブレーキをかけるのが平等の意味なのだが、ブレーキが故障している、または最初からそんなものがついていない日本人に、どうしてそれが可能か。できっこない話である。

民主主義は、本来的につりあい、すなわち平等を無視する制度である。欧米において、

いちおう二百年間ほど、民主主義が安定的に機能してきたのは、その制度をコントロールする力をもったキリスト教があったからである。

民主主義の属性は平等であると、辞書にも書いてあるのにといぶかしく思う人はいるだろう。それは、理性の世界での約束事、つまり社会契約として平等を守りましょうということであった。しかし、クレオパトラとアントニウスを見ればわかるように、人間の理性はしごく簡単に吹き飛んでしまう。キリスト教はそこを超えて、ガチッと強力なタガをはめたのである。しかし、欧米でも、デカルトから始まる近代の哲学者たち、それから有名なところではニーチェやフロイトなどが、このタガを外そうとしてきた。それがどういう思想で、その後どうなってきたかは別のテーマになるので、ここではふれない。

闘う人生

こんなわけで、日本で平等と言えば、せいぜい「結果の平等」か「機会の平等」のどちらかを取り上げるくらいしかない。どちらにしても、外見上、レベルと形とサイズをそろえましょうということであり、人間同士そのもののつりあいをとることとは、まったく違ったことである。したがって「結果」でも「機会」でも、実は両者に大差はない。

ただ、おそらく「機会の平等」の方が、多少合理的で、低コストだろう。競技場を作って、闘争心を煽っておけば、あとは当人同士が勝手に争ってくれる。勝ち残った強くて速い奴を拾ってきて（表現は悪いが）使えばいい。「結果の平等」は成長するまで世話をする養殖のようなものだから、だいぶ効率が悪い。

しかし近ごろは、ひきこもってしまって競技場に出てこない人が増えてきた。無理に引っ張り出そうとすると、よけい奥へ奥へと引っ込んでしまう。下手をすると手足がちぎれる。うまく引きずり出せても、最初から戦意喪失しているのでは困る。だから、この闘いがどれほどおもしろいか、楽しいか、そして勝者にはどんなに豪華な賞品があるかを見せて、自分からスタートラインやリングに立とうとする意欲をかき立てる必要がある。

また、闘いがハードなほど燃える人は、放っておいても大丈夫である。しかし中には、試合の前から尻込みする人とか、途中棄権する人とかが出てくる。また、勝ち残ったとたんに燃え尽きてしまうことがあるかも知れない。闘いは、強くて役に立つ人間を選別するのが目的であるから、その過程で使い道にならない者が続出したら困る。闘いのセッティングに意味がなくなってしまう。

そのためには、ハードからイージー、重量級から軽量級まで、闘いのランクを分けてお

く必要がある。たとえば学校教育には習熟度別学級の考えというのがある。これはもちろん、勝ち残りの子どもを多く確保するためだけの施策とは言い切れない。子どもの持ち味に即して、よりよい教育をする目的もあるはずである。しかし、機会の平等や、トップランナー、エリートの養成に対する期待を考え合わせると、社会に役立つ人間をより多く生産しようという意図は、決して少なくはないだろう。

また、敗者復活の道をちゃんと用意しておくことも大切である。出場を辞退したり、途中棄権したりした中には、単に体調不良だったり、実力を出し切れなかっただけの者が多くいるはずである。それらの貴重な人材を、たった一度か二度の負けで失ってしまうのは惜しい。ただでさえ、CIA の報告にあるとおり、日本は少子高齢化現象が加速しており、有能な人材を確保するのが難しいのである。たとえば中国やインドのように、優秀な子どもがいくらでも湧いて出てくるようなわけにはいかない。貴重な資源は、節約して大事に使わなければならないのである。

日本の民主主義社会では、「平等」が、人材育成システムを効率的にする概念かどうかが重要である。

二極化現象の可能性

闘いをすれば、必ず勝つ人と負ける人が出る。教育の世界で言えば、エリートと落ちこぼれが生まれる。学校教育の建て前は「あらゆる子どもに学力の保障を」であるが、本音は違う。たとえば学習指導要領が「到達の最低基準」になった。そこまで行くのがやっとの子、そこさえ行くのが困難な子がいる。一方、そんなハードルは無いも同然、楽々またぎ越して次のステップへ上る子もいる。文部科学省はそういう状況を奨励すると言っているのだ。これから先、子どもの世界で勝ち負けは一層あらわになる。

教育だけでなく、社会のあらゆる場面でこうした現象が起こる。「機会の平等」は、建て前上は保障されている。セーフティネットもいちおう準備されている。政財界のリーダーたちは、心おきなく闘いなさいと人々をけしかける。

このまま行くと、日本国民には、何%かの上層階級と、おそらくそれよりは多くなる下層階級に分かれる、二極化現象が生じる可能性がかなり高い。かつての日本人は「一億総中流」と呼ばれたものであった。ほとんどの人がその中で満足していたし、国民が一丸となって働くことで、国際的に高い地位を築くこともできた。そのことがまた日本人の満足感と自信を高めるという循環が生じていた。

しかし、高度経済成長が終わって一段落すると、それまで長所だったはずの国民性が、一転、短所として指摘され始めた。もともとそういう指摘は戦後長く続いていたのだが、経済が好調なときにはあまり声高に主張されなかったようである。何だかんだあっても、実際に「稼いでいる」「金持ちになった」という事実と意識が強烈で、他のことは大した問題にならなかった。しかし、経済が頭打ちになり、低迷し始めると、地下水脈のように続いていた日本人の自己批判、自己卑下の心理が、急激に噴出してきた。

競争を嫌い、個性を軽視する風潮が日本をだめにした。そんなことではグローバリゼーションの波に乗れない。すでに乗り遅れのきざしはある。エリートを量産して再び波に飛び乗るべきだ。脱落者が出るのは仕方がない。それに、ダイエットしてある程度スリムにならなければ、波乗りをうまくこなせない。ついてこられない者には、浮き輪を投げておく。ついてこなくていいからそこに浮かんでいろ、来たければ勝手にバタ足でもしてこいというのである。

こういう二極化の推進こそが「構造改革」に他ならない。これまでの一致団結主義を捨て、勝ち組と負け組がはっきり分かれる社会構造に変えることである。いま、日本人のほとんどが、構造改革に大賛成している。そしておそらく、賛成している人のこれまた大部分が、自分は勝ち組に入ると楽観している。「構造改革は痛みを伴う」「血が流れるのはやむをえない」と、政治家は言う。国民の多くは、自分だけは痛い目に遭わず、血を流すのは他の連中と思っているようだ。これは政治家にとっても実に都合がいい。

ひきこもり者も勝ちを目指す

しばらく前まで、ひきこもり者は自由競争のリングに上がらなかった。「上がりたくても上がれなかった」人も多いだろう。しかし、すでに紹介したように、インターネットの爆発的な普及が状況を変えた。オンライン競争、バーチャル競争が可能になったのである。繰り返すが、日本は人材不足なので、ひきこもっていてもいなくても、経済活動に参加する人間は貴重である。ひきこもりならそれでもよろしい、とにかく金を稼いで欲しいということになる。

日本の産業構造は、今後ますます変わっていくだろう。農林水産の第一次産業は、かなり前から衰退が激しい。このことは小学生にとっても常識である。続いて第二次産業、工業や製造業も同じ道を歩みつつある。かつて円高の影響を受け、多くの製造業者が海外に生産拠点を設けて、現地生産にシフトした。産業の空洞化現象である。いまでは、ノウハ

ウを吸収した現地スタッフが自前で生産を始めている。できあがった製品は、国際価格の低さで、メイド・イン・ジャパンの比ではない。もちろん、製造技術は日本仕込みなので、性能や故障のしにくさなど、信頼性と安定性が飛躍的に向上している。流通業者にとっては、輸送費や中間マージンを上乗せしても、まだ十分に利益が出る。日本の「ものつくり」は、いまや風前の灯火である。

日本の生き残る道は第三次産業、特にその中でも情報サービス業であると、多くの人が考えている。「情報」「ソフト」という実態のないものが商品となって飛び交う。そこでは、流通のコストがかからない。デジタル情報は瞬時に送信されるので、時間的なロスもない。したがって利益率がきわめて高くなる。楽をして儲かる可能性が非常に高い。エゴロジーが発達した日本では、「楽して儲ける」ことほど素晴らしいことはない。パソコンの前でマウスを転がすだけで、莫大なお金が入ってくるかも知れないのだ。アメリカではネットバブルが崩壊して、ネット関連のベンチャー企業の多くが窮地に追い込まれたが、そのことはITの推進自体にブレーキをかけるものではない。それらを教訓として、よりうまくやることが目指される。

このような変化の中で、ひきこもり者にも「勝ち」のチャンスがめぐってきた。勝山氏の『ひきこもりカレンダー』の本文は、次のように結ばれている。

「二十九年かかってこの程度
手遅れに早いも遅いもない。
まだ何も答えが出てないじゃないか。
勝ちに行こうぜ」

答えは出ていないのか

「何も答えは出ていない」と勝山氏は言う。確かに、現時点ではそう見えるかも知れない。しかし、未来への予測は日々行われている。世界が日本を分析して出している予測では、いまのところ日本が「勝ちに行ける」可能性はものすごく低い。あと十年もしないうちに、日本は世界の先頭集団から脱落すると考えられている。

「日本は必ず復活する」と、ありがたいことを言って励ましてくれる外国人もいる。しかし、データの上でそれが確実としているのではない。そうではなく、日本人の伝統的な美徳、たとえば真面目、勤勉、質素倹約、謙虚、優しさ、思いやり、こういった良さを再

び発揮することで、難局を乗り切れるという意見がしばしば目にとまる。

しかし、当の日本人が、「そんなもの邪魔くさい」と考えている。そういう日本の古い体質こそが、日本の低迷の元凶そのものであるとされているのである。義理人情、しがらみなど切り捨てて、個を確立しないとだめだと考えている人が多い。ほとんど全員に近いように見える。ときおり海外から「それは違うんじゃ・・・」という声が届けられても聞く耳持たずである。

日本人がみな、自分で目かくしをし、耳栓をしているとは言えないか。そうであればひきこもりも何も関係なくなるのは当然である。たとえ社会に出ていても、人のことはお構いなし、手探りで我が道を行くだけであれば、精神的に引きこもっているのと同じであろう。その上さらに、アイマスクと耳栓をセッセと配ってくれる人がいる。「個の確立」を主張する人々である。

個が確立すればいろいろなものが見え、自分で判断できると考えられているが、それは違う。個が確立すると、自分しか見えなくなる。東京都立大の宮代真司氏は、いまの日本人（特に若者）のことを「仲間以外はみな風景」と表現した。しかし、いまやさらに状況は進んでいる。仲間はもちろん、家族、親、子、すべてが風景になっている。

自分しかないのである。自分しかないというのは、裏を返せば自分がないことだ。人間は、他者があるから自分がある。だれか他の人がいるから、自分のことが見えるし、善悪や真偽の判断ができるし、自身の存在を実感できるのである。

他者も自分も、すべてを見失った人々が、ブレーキとハンドルの壊れた（とれてしまった）日本製自動車に乗り込み、全体重をアクセルにかけて暴走する。答えは出ているのではないだろうか。

Ⅶ　ニッポンの「甘え」

甘えとは

日本人独自の心性を表す有名な概念に「甘え」がある。ひきこもりは「甘えだ！」と言われることが多いから、「甘え」について考えることは意味が大きいであろう。

「甘え」を世界に紹介したのは、精神科医の土居健郎氏である。土居氏は、「甘え」ということばが日本語独特の語彙であることを、次のようなエピソードによって紹介している。

「・・・恐怖症に悩むある混血の女性患者の治療を頼まれた時のことである。ある日彼女の母親から私は患者の生い立ちのことなどいろいろ話を聞いた。この母親は日本生まれの日本語の達者なイギリス人であったが、たまたま話が患者の幼年時代のことに及んだ時、それまで彼女は英語で話していたのに急にはっきりとした日本語で、『この子はあまり甘えませんでした』とのべ、すぐまた英語に切りかえて話を続けた。このことはあまりに見事に甘えの語の特異性と、同時にその語が表現する現象の普遍的意味をあらわしていると思われたので、私は話が一段落した時彼女に、さっきなぜ『この子はあまり甘えませんでした』ということだけ日本語でいったのか、ときいてみた。すると彼女はしばし考えてから、これは英語ではいえません、と答えたのである」

（『甘えの構造』　傍点は筆者）

『広辞苑』で「甘え」を引いてみると、「甘えること。また、その気持ち」とあり、では「甘える」とは何かというと、次のように書いてある。

「① 甘みがある。甘たるくなる。
② 恥ずかしく思う。きまりわるがる。てれる。
③ 慣れ親しんでこびる。人の親切・行為を遠慮なく受け入れる。」

『学研国語大辞典』は、『広辞苑』にある③の意味に着目しているらしく、そこをさらに詳しく解説する。

「① なれて人なつっこくする。また、なれてわがままにふるまう。
② 〔人の行為・親切心などを〕つごうよく利用する」

このような様子を表す語が、英語にはないそうなのである。外国人が「甘え」を定義しようとすると、次のようなまことに堅苦しいことになる。

「基本的には食事や身の回りの世話をしてもらうというようなことについて、他の人の好意を当てにして依存することのできる能力」

（フランク・A・ジョンソン　『甘えと依存』）

多くの日本人がこれを読んだら、おそらく肩が凝ってきて、甘える気も失せるであろう。ジョンソン氏は続いて、「土居自身は『wheedle』という単語がそれに相当する英語だとしている」と述べている。ついでに wheedle も英和辞典で引いておこう。

「① 〈人を〉おべっかでだまそうとする、口車に乗せようとする、たぶらかそうとする」
② 口車に乗せて（…）させる、うまいことを言って（…の状態）にする
③ 〈物を〉（人から）甘言で巻き上げる、〈人から〉（物を）だまし取る」

（小学館『ランダムハウス英和辞典』）

これは相当に印象が悪い。

許されてきた「甘え」

外国人からすればきわめて奇異なことなのだが、日本社会では伝統的に「甘え」が許されてきた。いまでも、社会的な場面では、「おことばに甘えて」うまく相手の好意にすがるのが、つきあいに長けた「大人」の振る舞いである。甘えは子どもの特権ではない。

「甘え上手」にも、非難の響きはなく、どちらかと言えば誉めことばとして通用している。「上手」ということばがつくこと自体、甘えの肯定的な側面を示している。英語の wheedle の意味をそのまま当てはめれば、「詐欺師」「野ダイコ」ということになると思うが、そういうニュアンスはない。

甘え方が少ないと、「水くさい」「他人行儀」と言われてしまう。本当に他人同士なのに「そんな他人行儀にしないで」ということばが出たら、これまた外国人には理解しがたいことだろう。反対に甘えが度を超すと「馴れ馴れしい」「図々しい」「厚かましい」「ぶしつけ」「図太い」等々ということになる。しかしこれらは「甘え過ぎ」という以上の、対人関係の不適切さを言い表すようである。「甘え過ぎ」の場合、軽くたしなめられることはあっても、ものすごく嫌われたり責め立てられたりすることは少ないように思う。

だから、うまく甘えられなかったり、甘えが拒絶されたりした時、「甘えた自分が悪かったのだ」と反省することは少ない。反対に、甘えさせてくれなかった相手を非難する心理が生じる。そしてその気持ちを周囲も認めるということが起こる。ジョンソン氏は、土居氏の考察に基づいて、甘えが失敗した時、それに続いて気持ちがどう変化していくのかを整理している。

①すねる　②恨む　③ふてくされる　④ひねくれる　⑤すまない　⑥こだわる　⑦とらわれ　⑧やけくそになる　⑨わがまま　⑩ひがむ　⑪被害者意識　⑫くやしい　⑬甘んずる　⑭わだかまる　⑮とりいる　⑯てれる

この整理を、ジョンソン氏は「便宜的であって、包括的なものではない」とことわっている。だから、より厳密に探せば、もっとたくさんのことばが出てくるかも知れないのである。十六個だけでもずいぶんあるという感じである。そして、「甘え」同様、それぞれに対してピタッとひとことで訳せる英語は、どうもないらしい。⑦とらわれ、⑫くやしい、あたりはどうにかなるようだが。

一つひとつを見ると、われわれにはなじみの深い心理ばかりである。それにしても、自分が甘えられなかったからといって、すねたり恨んだりするのでは、それこそ「甘えるのもいい加減にしろ！」という感じだが、日本人にとっては、そのことが案外ふつうなのである。それは、その言動がかなりの程度許されている、ということである。

このように、日本人にとっては、甘える、甘えさせるということが、家族や社会をスムーズに、なごやかに運営するためには欠かせないことであった。

欧米は理性の社会

欧米人の思考様式の中心には、理性がある。これは、人間を自然なままに放っておいたら、本能むき出しでお互いに傷つけ合い、奪い合うオオカミになってしまうという考えに基づいている。したがって、動物と違って人間だけに与えられた理性で、欲望や攻撃性、衝動性を抑えなければならない。そしてそのことを人間に命じたのは神であった。理性において神と結ばれているのが、あるべき人間の姿である。しかし、時として人間はその理性を失い、欲望のおもむくままに行動してしまう。それが人間の「原罪」なのである。伝道師パウロはそのことを「精神には神が宿っているのに、肉体に悪魔が宿っていて、私に悪を為さしめる」と言った。

このような欧米キリスト教の考え方では、人間は一人ひとり神と結ばれている。昔のチャリティソング「We are the world」の歌詞に「We are the world　we are the children」という部分があったが、この「チルドレン」とは「神の子」という意味である。一人ひとりが神と結びついた神の子であるからこそ、すべての人はみな等しく、「隣人」なのである。　そして神が「汝の隣人を愛せよ」と命じたから、人はお互いに愛し合い、許し合わなければならない。すべては「神の御業」である。人間同士が勝手な判断で結びついているのではない。ここに、欧米個人主義の基本がある。個人的存在である人間たちは、神によって束ねられている。反対に人間の側から言うと、人間は理性によって神を求めている限り、互いに結びついて社会を形成、維持していくことができる。

キリスト教的な理性のレベルで考えれば、自分でできることは自分でするのが当然である。人間は、神と結ばれた存在であって、人間同士は本来お互いに独立しているからである。したがって、たとえ親子でも、できることまで手出しをするなどというのは考えられない。

甘えは非理性的

一方、日本的な甘えは、自分ではできないことを人に頼むというのではない。四歳の子どもに「親に甘えるな。自分の食い扶持は自分で稼げ」と言ったら、親としての人格を疑われる。しかし、同じ四歳の子が、自分で上手に箸を使えるのに、親にご飯を口に入れてもらいたがったら「もう、この子ったら甘えん坊ね」と言われながらも、たいていその望みはかなえられる。しようと思えば自分でできることを人に頼ったとき、それを甘えるという。そして日本人は、そういう心理や言動を積極的に肯定するのである。甘えたり甘え

られたりするのは、親愛の情の表現でもある。

心のはたらきという点から考えると、甘えは理性、あるいは理性的なものではない。日本人は長い間、家族や社会の生活場面で、甘え、甘えられながら、かなり平和に生きてきた。明治から昭和二十年までの約八十年間は、日本が戦争に明け暮れた時代であった。が、言うまでもなくそれは対外的な戦争であり、内戦ではない。また、歴史をたどってみると、『魏志倭人伝』にある倭国の大乱、それから源平合戦、戦国時代、関ヶ原の合戦、明治維新と、国を二分、三分するような大きな内戦があった。しかしそれらはいずれも、国としての秩序を根底から覆す革命ではなかった。たとえば、フランス革命、ロシア革命、アメリカ独立戦争、中国の文化大革命などと比べると、その規模はかなり小さかったと言って差し支えない。世界史の視点から見れば、日本ほど長期にわたって平和を維持してきた国家は例がないであろう。

そして、日本の場合、平和を保つために理性を持ちだしてこなくてもよかったということが言える。理性という「建て前」のレベルではなく、「相身互い」「持ちつ持たれつ」「お互い様」と言って甘え合う「本音」のレベルで付き合って、十分に潤いのある、円滑な社会が実現できたのである。

「甘え」と「神」

甘えはこのように非理性的である。ことばや理屈では説明がつかない。「ツーと言えばカー」「あうんの呼吸」「以心伝心」の世界である。ことばで甘えることもあるが、それ以上に表情、身振り、振る舞いによって甘えたい気持ちが相手に伝えられる。子どものそうした様子に、親はきわめて敏感に反応する。大人同士であれば、恋愛感情などほぼ１００％がこれである。しぐさの裏に隠された気持ちにピンとこない野暮天はすぐに振られる。「あたしのことアイシテル？」「お願い、本当のこと言って」「ウソでもいいからホントのこと言って！」こんなことではもう危ない。そして男女が理屈を言い合い始めたらもう別れ話である。

つい話が横道にそれる。日本人には理性が不要という問題であった。これは明治時代以降の国策、「富国強兵、殖産興業」の実現のため、たくみに利用された。

日本が、長い鎖国を解いて欧米諸国を見てみると、そこには驚くべき高度な文明社会があった。そして、その背景にあって人々を強固に支えていたのは、唯一絶対なる神であった。大日本帝国憲法作成の中心となった伊藤博文らは、その準備のためヨーロッパに視察

に行った際、「欧州の憲法政治の基礎には宗教がある」ことを学んだと言われている。

明治の新国家建設に際して緊急の課題だったのは、一刻も早く欧米並みの国力を備えた、強大な国家を作り上げることであった。列強の帝国主義に呑み込まれ、植民地化される日が、いつ来ても不思議はない。その事態を避けるため、何らかの大義名分のもとに国民を集結させ、一致団結して大国化を実現する必要がある。

しかし、それまでの日本の宗教には、伊藤らが求める「唯一絶対」なるものが見当たらなかった。そこで、皇室が、日本におけるキリスト教的な神の代わりとされる。神道が日本の精神的支柱になり、天皇は「万世一系の現人神」となった。

古来、日本の社会においては、「支配服従の関係に家族原理が支配」していた（仏教学者、中村元氏）。日本全体をひとつの大家族と考える精神的風土があったのである。それは、おそらく稲作文化の発展の中で、自然とつちかわれてきた思惟方法であったろう。
外部からの強制によってできあがったものではなかったと思われる。「甘え」は、その中で生まれ、通用してきた考え方や行動であった。

このように、もともと日本人はお互いに家族的な感情を持っていた。それが、明治になって、本当に天皇が絶対なる＝父なる神、すべての国民は天皇の「赤子」と定められたのである。建て前の上で、強制的に、日本は家族であるとされた。本来非理性的だった気持ちの通い合いが、理性の世界に引きずり出されて、形づくられたのである。

戦時体制と甘え

明治政府の思惑は、日本人古来の思惟方法と見事に一致したと言えよう。その後、終戦を迎えるまでの日本国民の様子は、よく知られているとおりである。甘えの精神も、体制の維持にはきわめて好都合であった。ただこの頃、日本人（エライ人ではなく、フツウの人）は、自分から甘えることはほとんど許されなかったように思う。その代わり、他人から甘えられることはほぼ 100%許さなければならないという風潮があったのではないだろうか。

土居氏も指摘しているが、日本の社会で偉い（つまり社会的地位や身分が高い）人は、周囲からおだてられ、チヤホヤされなければならない。能力と身分の高さは比例しなくていい。もっと言えば、身分の高い人があんまり辣腕をふるってバリバリ仕事をするのは、しばしばワンマンとして嫌われる。偉い立場におかれていても、実際には何もしなくていいし、できなくてもいい。「お飾り」として奉られていれば役目を果たしたことになる。

武家社会における公家はその典型だろうし、江戸時代も末期になると、将軍といえども「上様のおなーりー」と呼び出されて、出たり引っ込んだり、床下に隠れた家臣の声色に従って口をパクパク動かしたりするくらいが仕事だった。うっかり自分で何か言おうものなら、官僚たちに寄ってたかって口をふさがれる。驚くべきことに、この伝統は現代の政治にも引き継がれている。国会である議員が、官僚の用意した答弁書を読んでいて、（ここでお茶を飲む）という部分にさしかかり、「カッコ、ここでお茶を飲む、カッコトジル」と声に出して読んでしまったという話があった。官僚も大変と言えば大変である。

日本的甘えの社会では、身分の高い人間は何にもできない、赤ん坊同然の人間でも通用するということがあった。かつての戦時体制において偉い人と言えば、天皇ひとりしかいない。何しろ「偉い人」と書いたが、天皇は人ではなく神様だったのだ。神様のおそばにお仕えする少数の人間がいて、その下に膨大な臣民が配置された。天皇みずからはほとんど何もせず、「上官の命令は朕の命令と思え」のひとことですべてが決まり、すべてが動いた。

こういう支配体制のもとで、ほとんどすべての人間がそれにしたがい、「我なし」「滅私奉公」「ご無理ごもっとも」「さわらぬ神にたたりなし」等々の、きわめて日本的な社会風土が強固に形成されていった。もともと武家政治下の身分制度からこうした風潮はあったようだが、天皇が神になってからはそれが決定的になり、日本全国津々浦々にまで行き渡った。

士農工商の時代に「我なし」を強制するのは、主として農民を支配するためであった。しかし明治時代になっていちおう身分制度は撤廃され、学校や教育勅語ができて、イデオロギーを効率よく広める制度が整えられた。こうして、人間でありながら神とされ、奉られ飾り物にされてしまった人を、全国民が手取り足取りお世話する社会が作られたのである。

さてこのように、天皇に対する、すなわち大日本帝國に対する滅私奉公の精神が徹底して叩き込まれた。それは、「ご無理ごもっとも」の気持ちで、自分の欲とか希望とか期待とか、そんなものは全部まとめてどこかに捨ててしまい、社会の命令や要請を 100%受け入れることである。先ほどの言い方に戻れば、自分は決して甘えないが、人は限りなく甘えさせる、そういう姿勢を自分に強制することである。もはや「お互い様」などというものではない。交互通行ではなく一方通行である。

「ぎすぎす」と「ホドホド」

日本人は主体性がなく、個が確立できない集団埋没主義だと言われる。そんな生ぬるい国民性だからアメとムチにすぐ尻尾を振る。「優秀なる大和民族」とおだてられると、たちまちその気になってしまう。君が代を歌わされ、日の丸を持たされ、菊の御紋のついた銃を下賜されると、どんなに残虐な戦争犯罪でも笑って犯す。反対に、鉄拳制裁でしごき上げられ、憲兵隊や特高警察に睨まれると、不当な権力にも負け犬のように媚びへつらう。竹槍とバケツリレーで本土決戦に備えよと言われると、本気になって訓練する。「非国民」と後ろ指を指されることにビクビクする。

一転して敗戦となると、昨日まで「鬼畜米英」と子どもに教えていた先生が、「民主主義万歳」と豹変する。主体性がない、自主性がない、判断力がない、プライドがない、個性がない、主張がない、ないないづくしである。

「甘えの構造」という、日本独特のなれ合い社会がその温床であると、よく言われる。大なたを振るってその体質を断ち切らないと、日本はいつまでたっても生まれ変われないし、国際社会から相手にされなくなる。そして、いつまた戦時中のような世の中に逆戻りするかわかったものではない、とも言われる。

土居健郎氏は、さすがにそんな乱暴なことは言わない。ただ、『甘えの構造』の裏表紙（カバー）には、次のようなことが書いてある。

「では、『甘え』は絶対にいけないものなのか。必ずしもそうではない。『甘え』は、適度に甘えていれば潤滑油になるが、過ぎると周りから疎外され、無理に抑圧すると欧米なみのぎすぎすした個人主義を招くといった具合で、もともとアンビヴァレント（両価的）なのである」

いったい、甘えはいいものなのか悪いものなのか、ここだけ読むと悩んでしまう。要するにホドホド（適度）にせよということなのだろう。そうだとしたら、その「ホドホド」がまた難しいではないか。まさに、大江健三郎氏の言う「あいまいな日本の私」である。そもそも甘えがなければ「ホドホド」などというあいまいさも許されないはずだ。

また、甘えが無理に抑圧されると、「欧米なみのぎすぎすした個人主義」になってしまうと書いてある。日本らしいしっとりとした情緒、「金鳥の夏、日本の夏」のような雰囲

気が壊れてしまう。なるほどそれは困るかも知れない。しかし、欧米的な個人主義が本当に「ぎすぎす」しているかどうかは問題である。

すでに書いたように、欧米の個人主義の背景にはキリスト教文化がある。一人ひとりの人間が神としっかり結び合っているのが個人主義の基本である。そして、神は人間たちに「隣人を愛せよ」と命じた。それこそが人間の生きている証であると言った。神の命令は絶対である。現代日本人は 99.99%、「絶対」などというものを信じない。だから、合理主義者のはずの欧米人が「絶対なる神を信じる」などと言うとびっくり仰天して目を白黒させる。欧米人にしてみればそんな当たり前のことで驚く日本人こそエイリアンである。

その辺りのことはおいておくが、とにかく欧米人は神の教えに絶対服従する。したがって、欧米的個人主義が「ぎすぎす」するということは本来考えられないのだ。しかし、欧米社会がぎすぎすし始めたことは事実かも知れない。もしそうだとしたら、それは個人主義が徹底したと言うより、従来の個人主義が変質して、日本的エゴロジーが蔓延しつつあるからではないだろうか。だいたい、個人主義の欧米社会より、日本の方がぎすぎす度は遙かに上である。終戦直後からぎすぎすし始めて、高度経済成長期の頃にアブラが切れてしまい、ジョイントはすり減ってあちこち外れ始め、日本はもはやガタガタ、バラバラのポンコツである。

甘えが通用しない世界

欧米社会がぎすぎすし出しているとしたら、それはキリスト教への信仰が薄れてきたからである。おそらく、甘えがあるとかないとかいう問題ではない。もともと欧米に甘えはないのだ。

伊藤博文が考えたように、日本には唯一絶対な神がいなかった。日本人は、死んでしまえば誰もが「ホトケ」あるいは「カミサマ」になる。こんなことは欧米では考えられない。許されて天国の門をくぐれても、神様の一員に加わるなどとんでもない話である。神（＝創造主）はひとり、唯一絶対で、人類はその子どもである限り、みな兄弟で平等である。神が「汝裁くことなかれ」「あなたの敵を許しなさい」と命じたから、それにしたがって他者を許さなければならない。反対に言えば、神の教えに背くような人間には容赦しなくていいし、甘い顔を見せてはならないことになる。欧米人がいつでも自信にあふれ、きわめてドライに割り切って物事を進める（日本人にはそう見える）のは、神という絶対的基準にのっとって行動しているからである。どこをめくっても間違いが一つもないマニュア

ル＝聖書が、そこにはある。聖書に、ホドホドに甘え、テキトーに甘えさせましょうなどとは書いていない。すべてを厳密に神が定める、ケジメの世界である。

甘えがやけくそに

日本社会はこれと正反対で、もともと外的な基準がない。そこでお互いが「こっちこそ正しい」「お前の目盛りは狂ってる」と言って譲らなかったら、関係は永遠に平行線をたどり、決して接点は生まれない。そんなことでは隣近所でケンカばかり起こり、社会は崩壊する。そこで、決裂しそうな点は譲り合い、接点は重ね合って、社会の規範を手作業で組み上げてきた。やや極端な言い方になるが、日本の歴史と社会は甘えと妥協の産物である（もっとも、外的な基準が皆無だったのではない。後に考えるが、日本では仏教の倫理がモノサシ、調整役として働いていた）。

それがファシズムと軍国主義の母胎になったのかと言うと、どうもそうではないように思われる。甘えと妥協がしっかりと機能していれば、一部の人間が周囲を巻き込んで身勝手に暴走しようとした場合、「そんな無茶言ったらいかん、みんなが迷惑する」というブレーキがかかる。

日本的甘えの社会が、そのままの形で欧米列強の帝国主義と対決せざるを得なかった時、本来平和的であった精神風土が、そのまま武器として置き換えられたのであろう。「和をもって貴しとなす」「向こう三軒両隣」等の集団志向性が、「進め一億火の玉だ」にされてしまったのである。「甘え」が海外に通用しなかった時、「やけくそ」に代わったのだと考えられる。そのやけくそを誰も止められず、全国民がそこに巻き込まれてしまったのが戦前、戦中の世の中である。

もう甘えません

甘えられなかったからと言ってヤケを起こすのはよくない。それは昔から代わらない社会のルールであり、たぶん今でも幼稚園の先生は子どもたちにそう教えている。しかしそうは言っても、あんまりきっちりとケジメばかりつけるのも窮屈だから、少しくらいは大目に見ましょう、ただし、大目に見てもらっていることをわきまえて、ヤケもホドホドにするように・・・、これが日本的甘えの構造であった。

しかし、いまから半世紀と少し前、国際社会に「大目に見る」などという論理は通用しなかった。ヤケを起こしたきかん坊には、徹底してお灸を据える。世界にはこのケジメし

かなかったのである。ところが、そのお灸が効くどころか、日本は「熱いやないか何さらすねんこのドアホ！」とばかりに暴れまくった。連合国軍は驚き、お灸ではすまさない作戦に変更した。東京大空襲、沖縄戦、ソ連参戦、原爆投下と、戦争末期のその徹底ぶりは凄惨のひとことに尽きる。完膚無きまで叩きのめされ、日本はついに全面無条件降伏となった。

敗戦後、日本は心を入れ替えて（その入れ替え方がマズかったのだが）「もう誰にも甘えません」と世界に誓った。そのためには民主主義を勉強しなければならない。文部省は、昭和二十三年に『民主主義　上・下』という教科書を発行しており、その最初の方には次のような部分がある。

「ところで、世の中は、おおぜいの人々の間の持ちつ持たれつの共同生活である。したがって、自分自身を人間として尊重するものは、同じように、すべての他人を人間として尊重しなければならない。・・・自らの権利を主張する者は、他人の権利を重んじなければならない。自己の自由を主張する者は、他人の自由に深い敬意を払わなければならない」

甘えると言うことは、他人の権利をほんの少し侵害し、ほんの少し自由を奪うことだと言い換えても、さほど間違いではないだろう。私もあなたもちょっとずつ甘え合って、お互い様で仲良くやっていきましょうということである。しかし、これは、民主主義の説く権利と自由の尊重に反する。ちょっとだけならいいだろうと甘えた気持ちで他人に寄りかかると、それがだんだんエスカレートしてしまうものだ、そんなことではイカンというのが民主主義の教えである。

人は甘えずにいられない

が、人間はたいてい、言うこと（考えること）とすることが食い違うものである。「ほしがりません勝つまでは」をやめて、「もう甘えません金輪際」と誓ってはみたものの、言ったことがすぐさま完璧に実行できるわけではない。「わーかっちゃいるけどやめられねえ、ァそれスーイスーイスーダラダッタ・・・」と歌われるとおりである。

民主主義の徹底により、建て前上は「甘え御法度」になった。しかし、何千年と続いてきて、骨の髄まで染みこんでいる甘えの構造を、一朝一夕に消し去ることは不可能である。

甘えが禁止されるとどうなるか。いままで言ってきたことをまた繰り返さなければならないが、日本人はふてくされ、ひねくれるのである。以前はヤケを起こして戦争に突入したが、今度はそうは行かず、世界的な経済戦争に身を投じて、そこでの勝ち残りに命を賭けた。子どもの場合は受験戦争である。

建て前の上では「甘えまい」と努力するが、本音はなかなかそうなれない。これが人間の難儀なところである。甘えられない悲しさ、寂しさを、すねて恨むことでしか発散できない。恨まれた方はいい迷惑で、「冗談じゃない」と反対に恨み返すことになる。こんなことならいっそのこと、素直に甘え合う世の中になった方がずっといいと思うのだが、どうだろうか。

甘えるんじゃない！

さて、ほとんどの日本人は、建て前上、子どもを除いて「甘え禁止」となったが、さまざまな形でその反動が出た。自分が甘えられないのに、人から甘えられるなどもってのほかである。かつては「人には優しく、自分に厳しく」というのが大人たる者の条件だったが、この世の中でそんなことを言っていたら、心理的ストレスがたまりへたばってしまう。「人には厳しく、自分に甘く」、いつのまにかこれが人生の秘訣、世の中の常識になった。

甘えが許されない世の中になったとはいえ、時にはつい本音が出て、ホロリと甘えたくなるものである。しかしそんなことをしてごらんなさい、たちまちピシャーンとはねつけられて、そっぽを向かれてしまう。そうなると「甘えた自分が悪かった」とは絶対に反省しないのが日本人である。「こ～の～恨み～、晴らさでおくものか～」となる。結果、自分の甘えは棚に上げて、人からの甘えにはものすごく敏感になる。そして、他人からのわずかな甘えも許さない。義理も人情も、理性もへったくれもなく、正真正銘の「ぎすぎす」である。

土居氏が本の中でしばしばふれているように、戦後しばらくは、子どもにはいちおう甘えが許され続けていた。しかし、大人社会のぎすぎすは、自然と子どもに受け継がれていく。いくら口で「人には優しくしましょう」と教えても、行動が伴わないのだから、教育できるわけがない。子どもは大人の鏡である。どんなに格好をつけても、必ず真実の姿が映ってしまう。

そうやって育った子どもたちが、親となる時代がやってきた。自分の子どもの甘えを、親は許さない。仮に「甘えさせてあげなくては」と思ったとしても、行動が伴わない。「わ

ーかっちゃいるけどやめられねえ」である。行儀作法をやたらと厳しくしつけたり、勉強を強制したりする。いちおう「子どものため」という大義名分はついているが、実際は親の価値観、エゴのままに子どもを操縦しているだけである。そこには温かく潤った愛情がない。

さらに現代は、そのまた子どもが親になってきた。ここにいたってとうとう「子どものため」という大義名分もすっ飛んでしまった。子育ては自分のためにするものになったのである。実際「子育ては自分育て」と公言してはばからない人が多い。それをきいて感心する人はもっと多い。

親と子は対等になり、それがさらに進んで、いまや親が子に甘えるようになった。子どもは親のペットであり、いやしグッズである。いやしグッズのくせに、ビービー泣いたり、口応えしたり、すねたりいじけたりなど冗談ではない。あっちを叩き、こっちをひねって直してみるが、思い通りに直らなかったり、よけい壊れてしまったりしたら、あっさり捨てられる。子どもへの虐待の大爆発である。

虐待はいまでもしょっちゅうニュースになるが、もはや珍しくも何ともないのでその扱いの小さいこと、うっかりすると見過ごしてしまう。しばらく前にカナダで、若い日本人女性が子どもを死なせ、自分も行方不明になるという事件が起こった際、国中が大騒ぎになったらしく、カナダの各紙はトップの扱いであった。日本では、テレビのワイドショーが、そのカナダの驚愕ぶりをほんの少し紹介しただけである。

甘えは悪くない

相変わらず日本に「甘えの構造」は残っているとしても、その形は以前とは変わっているようである。つまり、自分は限りなく甘えるが、人からの甘えは絶対に許さないというものである。あえて言い換えれば、「甘えの衝突」とでもなろうか。しかし、もともと甘えは人間関係を表す概念であり、その関係が切れてしまった状態には、もはや甘えの考え方すら通用しない。

甘えは、建て前・理屈抜きの、本音の人間関係である。こころとこころのふれあいと言ってもよい。そんなものが通用する世の中は終わった、とか、うっとうしい、邪魔くさいとか言って捨てようとしてきたのが日本と日本人だった。ところがどっこい、甘えはそんな簡単に捨てられるものではなかった。甘くて美味しい果肉を捨てたら、固くて不味い芯（恨みやひねくれ）が出てきてしまったようなものである。その不味い芯を「こんなモン

食えるか！」と言って、相手の口に押し込もうとするのだから始末が悪い。自分だけ甘い汁を吸おうとするのは虫がよすぎる話である。

甘えを捨てることは、こころとこころの通い合いを捨てることにも等しい。それは大きく言えば、人間として生きていけるかどうかに関わる一大事である。その破綻が、現在すでに至るところで現れつつある。

甘えが生きるためには、不味い芯の部分を人に押しつけず、少しくらいは我慢して自分が囓らなければならない。多くの人がそうできるかどうかに、日本の今後がかかっているとも言えるであろう。

ひきこもっている人たちは、甘えに飢えていることがあるかも知れない。必要な糖分はとらなければならない。栄養補給、疲労回復、不安解消、いろいろと効果が高い。その一方でとりすぎによる不健康な肥満には注意が必要である。時には「良薬口に苦し」ということも大切だ。また、スイカやお汁粉だって、ひとつまみの塩を加えることで甘みがグッと引き立つものである。

Ⅷ　ニッポンの「和」と「権威」

聖徳太子の「和の精神」

「和」も、甘えと並んで日本の伝統的な精神風土を表す有名なことばである。多くの日本人が知っているように、このことばは聖徳太子が政治の方針として取り上げた。小中学校の歴史でも勉強する「十七条の憲法」である。「和をもって貴しとなす」というひとことは知っていても、それに続く部分はあまり知られていないように思う。次のように書かれている。

「一に曰く、和をもって貴しとし、忤（さから）うことなきを宗とせよ。人みな党（たむら）あり。また達（さと）れる者少なし。ここをもって、あるいは君父に順（したが）わず。また隣里に違（たが）う。しかれども、上和（やわら）ぎ、下睦（むつ）びて、事を論（あげつら）うに諧（かな）うときは、事理おのずから通ず。何事か成らざらん」

仏教学者・中村元氏は、これを次のように現代語に訳している。

「おたがいの心が和らいで協力することが貴いのであって、むやみに反抗することのないようにせよ。それが根本的態度でなければならぬ。ところが人にはそれぞれ党派心があり、大局を見通している者は少ない。だから主君や父に従わず、あるいは近隣の人びとと争いを起こすようになる。しかしながら、人々が上も下も和らぎ睦まじく話し合いができるならば、ことがらはおのずから道理にかない、何ごとも成しとげられないことはない」

「和」とは何か

聖徳太子は遙か古代の飛鳥に活躍した人であり、五七四年に生まれて、六二二年、四十九歳で没している。以来千四百年近くも日本人に親しまれ続け、かつては一万円札の顔としてまさに日本を代表していた。偉人とされる人は多いが、その中でも日本人にとって聖徳太子はどこか特別な人物である。「和ヲ以テ貴シトナス」も、中学生くらいならたいてい誰でも知っている。

それでは、精神的態度としての「和」とは何か。「和」を訓読みにすると「和（なご）

やか」「和（やわ）らぐ」となり、だいたいの意味は想像がつく。また、大修館書店の漢和辞典、『大漢語林』を引いてみると、「和」の字には、「仲良くする」「ととのえる」「人と人の声が合う（そう言えば「ご唱和ください」ということばがある）」等の意味がある。

聖徳太子によると、和の反対は「忤」となっている。これはなかなか見慣れない漢字で、ワープロでも辞書検索をしないと出てこない。音読みは「ゴ」、訓読みは聖徳太子も書いているように「さからう」であり、他には「もとる」「みだれる」「まちがう」といった意味がある。

「和」は、先ほどまでいろいろと考えてきた「甘え」とかなり共通しているものと言えよう。とにかく、いろいろと理屈をこねたり、反論したり批判したりすることは前面に出さず、相手の考えには賛成することを前提にして、仲良くやってきいましょうという姿勢である。

三人寄れば文殊の知恵

この「和」がまた、戦後の日本ではすこぶる評判が悪かった。いや、評判が悪いなどと言うレベルではない。かなり徹底して嫌い、軽蔑し、積極的に放棄しようとした日本人は多い。その根底にあるのは、やはり太平洋戦争への反省と後悔の念だと考えられる。

いつでも周囲の顔色をうかがい、それと「和して」いくことしか考えない。まさしく主体性のない日本人、自信がなく、判断力がなく、責任感がない。すぐ人に引っ張られ、影響される。こうした日本人の心性が、軍部独裁の温床となったという考えである。そのおかげで日本は国中が焦土と化してしまったではないか。

戦後、そこから脱却して再び国際社会に返り咲くために、民主主義教育が強力に押し進められた。前に紹介した、文部省の『民主主義』は、次のように言う。

「国民のひとりひとりが自分で考え、自分たちの意志で物事を決めていく」

「ことわざにも、『三人寄れば文殊の知恵』という。まして、高い教養を持った国民のすべてが、自由な言論を基礎として共同の真理を発見するために不断の努力を続けて行くならば、物事の正しい筋道を見出すことのできないはずはない」

さて、唐突だが現代に視点を移してみると、五十年以上も昔に文部省が期待し、予言し

た理想社会は実現したであろうか。今の日本に「物事の正しい筋道」が見出されているかということである。「たしかにそうなっている」と思える人は、よほどの楽天家か、こう言っては何だが単なる世間知らずであろう。政治家も口を開けば「未曾有の国難」「かつてない危機」とマイクに向かってしゃべっている。そしてそれは実際、デマとは言えない。もはや繰り返しになるので、いちいち具体的な現象は挙げない。

どうしてそうなったのだろうか。文部省のかけ声にもかかわらず、国民がみんな「笛吹けど踊らず」で言うことを聞かなかったからか。いやいやそうではない。反対に、やり過ぎ、徹底し過ぎたからである。民主主義が、極端まで押し進められたからである。

民主主義には「こころ」不在

民主主義社会では、基本的に、仲良くし、譲り合うことは起きない。いちおう「自分が自由と権利を主張したければ、人の自由と権利を尊重しなければならない」という約束、いわゆる「社会契約」がある。子どもがよく言われるのは、「自分がされていやなことは、人にもしてはいけない」というものである。

しかし、「なぜそれを守らなければならないのか？」という疑問が起こった時には、誰もそれに答えられない。事実、「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いに答えられる人が、いまの日本には一人もいない。別の言い方をすれば、答えている人はいるが、その答えに納得しない人がゴマンといるのだ。

どうして他者を尊重しなければならないのか、という問いに対して、民主主義にもとづいて答えようとすると、それが契約、ルールだから、としか言いようがない。すると、そんなルール守りたくない、という人間が出てくる。社会的なルールを破ると、罰金を科されたり、逮捕・投獄されたりする。一番重いのは死刑である。しかし、死刑にされてもいいから、死んでもルールを守りたくないという人間が出てきてしまう。そうなったら、もうあとがない。「そう、わかった、じゃあ勝手にすれば」としか、もはや言いようがないのである。

人と仲良くする、譲り合う、というのは、契約やルールではなく、人間に生まれながらに備わった本性である。こう書くと、「ははーん、これは『性善説』だな」と考える人がいると思うが、ことはそれほど単純ではない。本当はきわめて重要な問題なので、いろいろと考えを深めていきたいのだが、いちおうここでは止めておく。それこそ、この問題をテーマにして別の本にしなければならないくらいの内容だからである。いつの日かその機

会が与えられることを願っている。

仲良くしたい、譲ってあげたい、というのは、そうしなさい、としつけられたり、教育されたりしてできるようになることではない。人間は、誰からも教えられなくても、勝手にそういうふうにこころが動く。言葉の十分通じない、一～二歳の子どもの目の前で、ギャンギャン夫婦ゲンカをしてごらんなさい。とたんに子どものこころは巻き込まれて、オロオロ、ハラハラし始める。「パパ、オコラナイデ」「ママ、ナカナイデ」（いまは逆か）「フタリトモ、ナカヨクシテ、ネッ？　ネッ？」と、一生懸命に仲を取りもってくれる。これは、親のしつけのたまものだろうか。そんなはずはない。子どもは、誰に教わらなくても勝手にそうする。それが人間の本性だということである。おそらく家裁の調停員よりもずっと有能である。

これが十数年後はガラリと変わってしまう。ドアの外から「こォの、甲斐性なし亭主！」「何だとォ、てめえのような女房、もらってやっただけでもありがたく思え！」等の叫びや、食器の割れる音が響いてきても「あーあ、またかよ、マ、俺には関係ないけどね」「ワタシもう家出しようかしら」、子どものこころは冷め切っている。約束やルールを理解し、記憶する能力は、こちらの方が数百倍も上回っているにもかかわらず、である。ことば、理屈、理性、そういったもので「仲良くしましょう」「譲り合いましょう」「人には親切にしましょう」等々、何千回、何万回教え込んでも、人間は絶対に変わらない。変われない。そこに「こころ」が伴っていなければ、いっさいのことばは虚しいのである。

民主主義社会では、できる限りこころは排除される。代わって大切にされるのは、文部省が言ったように「高い教養」である。こころの働きなどなくても、教養さえに身に付けば、人間は正しく行動できると信じられてきた。義理や人情は教養の邪魔になるとも考えられてきた。いまでもそれは変わっていない。

ところがどっこい、それが大間違いであった。人間は、教養を高めれば高めるほど、ますます「物事の正しい筋道」がわからなくなってくるらしい。それは、幼児と青年を比べてみれば一目瞭然だし、人間の歴史そのものが、まさしくそのことを証明している。

傲慢でなければ生き残れない

教養の高い人間が、一人ひとりおのれの主張と信念をもって議論し合う。偉い人間同士が集まれば、必ず素晴らしい結論が導き出される。これが民主主義の信ずるところである。しかし、一例を挙げれば、地球温暖化を防止する国際会議でも、議論はまともに進まなか

った。それぞれの国は、最高のエリートを送り込んだはずである。いわば、それぞれの国でもっとも教養の高い人たちの寄り合いである。それでも、決着がつかないどころか、話はますます危ない方へ転んでいってしまう。いつケンカになるか（国同士がケンカすると言えば戦争しかあるまい）、怖くてとても見ていられない。

聖徳太子は、教養の高い者同士なら大丈夫とは考えなかった。もう一度十七条の憲法に戻ってみると、こう書いてある。

「人みな党（たむら）あり。また達（さと）れる者少なし」

自分に得になる相手とは、すぐに結託する。逆にたてついてきそうな人間は仲間はずれにする。何が正しくて何が間違っているかは二の次である。基準は常に自分、しかも自分の損得にある。そして、目の前の利益につられて将来への見通しがもてない。教養を身につけるほどかえってずるがしこくなり、欲望達成のためにあれこれ画策するようになる。しょせん人間はそんなものだと、聖徳太子は考えた。残念ながら、歴史を振り返ってみると、そしていまの日本を見ると、この指摘は 99.999%当たっている。

だから、話し合いでは譲り合いを第一にせよ、和をもって貴しとせよ、と言ったのである。相手も間違う。自分も間違う。欠点のない意見など誰にも出せない。それならば、相手のいいところと、自分のいいところを出し合い、食い違う点は譲り合って、うまくまとめていくしかないではないか。威張るな、怒るな、仲良くせよということである。

民主主義はこれと正反対である。自分の意見は、基本的に正しい。なぜなら、ちゃんと勉強してきたからである。同じように相手も正しい。では、多数決で決着をつけよう、こういうことになる。譲り合いではなくて勝ち負けである。今回負けてしまったら、次は勝たなければならない。もっともっと勉強して、強く、かしこく（ずるがしこく、わるがしこく）ならなければ。かたや勝った方も、油断大敵である。うっかりスキを見せたら寝首をかかれる。次なる勝負に向けて、爪を研いでおかなければならない。傲慢にならなければ生き残っていけないのが、民主主義社会の掟である。

そういう掟が存在するのなら、それを認め、従い、徹して生きればよいと考える人が増える。国と国とが争い、人と人とが反目し合い、裏切り、出し抜き、密約、密告、冷血、非情、こうしたことが世の常になる。いくら社会契約でそれを防ごうとしても、欲望の前には、そんなもの簡単に吹き飛んでしまう。

こうなると、とばっちりとしわ寄せは、たいてい弱い立場の人々にやってくる。この結果、一部の強者がますます強く、大多数の弱者がますます弱い立場に追いやられることになる。これは、自由と平等を旗印にする民主主義の目ざすところとはまるっきり逆の方向なのだから、ものすごい皮肉である。

同類合い食む弱肉強食の世の中が出現すると、バスに乗り遅れまいと必死になる人もいるが、一方にはその状況に心を痛め、何とかならないかと願う人も出てくる。生まれながらに、人とは仲良くしたい、譲り合い、分け合って行きたいと願うのが人間の本性だから、その本性が完全に枯れてしまわずに残っている人は案外いるものだ。

そういう悩める人々は、この現状をどう見るか。いま、多数派を占めているのは、日本に民主主義が不徹底だから、このような混乱が生じるのだという考えである。人の自由と権利を侵害してはならないという、しつけと教育が不足している。だから、親はしつけの大切さを自覚しなければいけないし、学校では道徳教育をビシビシやらなくてはならない。授業だけでは生ぬるいので、奉仕活動を義務づける。

しかし、幼い子どもは誰でも、「ミンナ、ナカヨクシヨウネ」という人間の本性を生まれながらに持っている。そこに配慮しないまましつけや道徳を押しつけて、どうして効果が上がるのか。そういうやり方をことわざで「木に竹を接ぐ」と言うのである。

和と仏教

人間は本来、互いに相手を求める存在である。しかも、いつでも間違わず、必ず正しい行動をとれる人はいない。相当な人格者であっても、千回のうち一回でも過ちを犯したら、やはりその人は不完全な人間である。だからこそ、和を第一にして、仲良く譲り合い、許し合って生きていこうという考え方が、日本には伝統的だった。

しかし、みんながお互いにただ譲り合うだけで、「どうぞどうぞ」「いやいやあなたこそどうぞどうぞ」「いやそんなことおっしゃらずにさあどうぞ」「またそんなことを・・・」とやっていたら、いつまでたっても埒が明かないことがある。温泉旅館でエレベーターに乗り合わせた、浴衣姿の見知らぬおばさん同士が、降りる順番をめぐって譲り合う（争う？）ようなものである。モタモタしているとドアが閉まる。

和を大切にするにしても、どこかで一線を引いてくれる基準が必要である。そうでなければ社会秩序を作れないし、保ってもいけない。秩序が、その時々の話し合いでコロコロ変わるのも困ったことである。

聖徳太子はその点を心得ていた。お互い気の向くままにダラダラ譲り合っているだけでは社会は成り立つまい。はるか古代の飛鳥時代にも、そのことは正確に見抜かれていたのである。

第一条に続いて第二条もわりあい有名である。ここに引用してみる。

「二に曰く、篤（あつ）く三宝（さんぼう）を敬え。三宝とは、仏と法と僧なり。すなわち四生（ししょう）の終帰（よりどころ）、万国の極宗（おおむね）なり。いずれの世、いずれの人か、この法を貴ばざらん。人、はなはだ悪しきもの少なし。よく教うるをもて従う。それ三宝に帰（よ）りまつらずば、何をもってか枉（まが）れるを直（ただ）さん」

（現代語訳）

「まごころをこめて三宝をうやまえ。三宝とはさとれる仏と、理法と、人びとのつどいとのことである。それは生きとし生けるものの最後のよりどころであり、あらゆる国ぐにが仰ぎ尊ぶ究極の規範である。いずれの時代でも、いかなる人でも、この理法を尊重しないということがあろうか。人間には極悪のものはまれである。教えられたらば、道理に従うものである。それゆえに、三宝にたよるのでなければ、よこしまな心や行ないを何によって正しくすることができようか」

和は、仏教という「究極の規範」に基づくことで、初めて正しく働くことができる。烏合の衆が勝手になれ合うのは「和」の社会ではない。仏教によってピシッとケジメがつけられる必要があった。欧米のキリスト教社会と比較すると、きわめて興味深い。

権威

仲良くするにはケジメが必要である。ケジメをつけるのは誰か。聖徳太子は、仏教、お釈迦様と考えた。社会構造は違うが、欧米社会でケジメをつけるのはキリストと、天なる神であった。いずれにしても、人間を超えた、絶対的な存在として考えられている。

こうした絶対者を、より一般的な言葉で言い換えると「権威」となるだろう。

権威。英語で言えばオーソリティ。この言葉が日本人は苦手である。嫌いな人が多い。試しに広辞苑を引くと、次のように書いてある。

「①　他人を強制し服従させる威力。人に承認と服従の義務を要求する精神的・道徳的・社会的または法的威力。

②　その道で第一人者と認められている人。大家」

意味を読んだだけでムッと来た人がいるかも知れない。冗談じゃねえよ、誰が服従なんてするか、というヤジがどこからかとんできそうである。戦後民主主義、それがもっと進んだエゴロジー思想では、権威はみんなの敵である。引きずり降ろし、踏みつけ、こっぱみじんにフンサイしなければならない。

日本人が抱く、権威に対する嫌悪感は、たいていの場合やはり戦争にまつわる忌まわしい思い出に根付いているであろう。最高の権力者であった天皇は神様であり、「神聖ニシテ侵スベカラズ」とされた。これ以上の権威ある存在はあり得ない。天皇が白いと言ったらカラスも白くなる。そして、戦前・戦中の世の中では、本当にそういうことがまかり通っていた。もっとも、いろいろな回顧録や証言からすると、昭和天皇はずいぶんと穏やかな人柄であったようだから、自らが恐怖政治を行ったわけではない。天皇を祭り上げた軍部独裁政治が、世界の常識から外れて暴走したのである。したがって、日本人には、権威をカサに着た人間は何をするかわからないという恐怖心が根付いていると思われる。

大日本帝國の軍事大国化は、明治時代から始まった。しかし、明治維新・文明開化によって、突然日本人の国民性が好戦的になったわけでもないだろう。やはり、それ以前の何百年にもわたる歴史が、その下地を作ってきたのだと思われる。

縄文時代に、狭い土地での稲作を始めて以来、日本人は家族的な地域社会を作って、「和」の精神で平和な営みを続けてきた。支配者層が高圧的に民衆を抑えつけなくても、人々は自然とまとまりを保つことができたようである。

そうした社会風土が、おそらくは平安時代の後期に、武士が登場して実権を握るようになった頃から変質してきた。民衆は強大な武力を持った支配者のもとで、あるときは恐怖におびえ、あるときはうまく取り入って、またあるときは反発して押しつぶされたりしながら生きながらえてきた。こうして見ると、現代につながる日本的な権威の構造は、だいたい千年くらいの歴史があると言える。

最後に咲いたあだ花が、大日本帝國の天皇制である。そして、それは昭和二十年八月十五日に崩壊し、それ以降日本は歴史上かつてない権威喪失の時代に入った。現在、あらゆる権威が否定されている国は、世界の中でも日本だけである。したがって、世界史のレベ

ルで見ても、いまの日本は後にも先にも例がない、きわめて異質な国である。

権威と自由

日本人以外の地球人は、誰でも何らかの権威のもとに生きている。人によって程度の差はある。イスラム教やユダヤ教の人々が、ものすごく厳格な戒律を守っていることは、よく知られている。一方、キリスト教徒でも教会の日曜学校には行かず、一年に一度「アーメン」と唱えるかどうか、という人もいよう。しかしそういう人でも、自分が神によって創られ、この世に存在を許されているのだと、心のどこかで思っている。

また、外国人の中にだって、もちろん無宗教・無神論の人はいる。しかし、個人としていかに無宗教であっても、国家や社会が宗教を重んじていれば、それを無視して行動することは許されない。

たとえば、これは無宗教ではなく、宗派が違ったときの例なのだが、あるイスラム教信者が、家族でドイツに移住した。そこの子どもが学校に行くと、授業の中でキリスト教のお祈りがある。イスラム教徒であるその子の親は、学校、つまり州か国かを相手取って訴訟を起こした。宗派の違うお祈りを子どもに強制するのは、信仰の自由を保障した憲法に反しているという主張である。これは、日本であればいかにも原告が勝利しそうな裁判である。しかし、ドイツでは違った。ドイツに住み、ドイツの公教育を受けている以上、そこでの教育方針に従うのは当然であり、学校は何ら憲法違反を犯していないという判決が下ったのである。宗教の権威、そしてそれを背景にした国家の権威に対しては、信仰の自由という、言うなれば個人の都合は優先しない。これがドイツの、そして全世界の常識である。

世界の中で日本だけが、これとまったく正反対である。個人の自由の前には、あらゆる権威は無力である。「公共の福祉に反する」ときにだけ、個人の自由は制限される。平たく言えば、人に迷惑をかけない限り、何をしても自由、勝手気ままということである。「人の迷惑」というのも、これまた実にいい加減な基準である。

コンビニの駐車場に円陣を組んで座り、お菓子を食べてジュースを飲む若者とか、喫茶店の静かな BGM の中、突然携帯で商談を始めるビジネスマン、こうした人々は迷惑といえば迷惑だが、我慢しようと思えば我慢できる範囲でもある。お巡りさんに訴えても、注意してもらうことすら難しいことが多い。その人々にも自由と権利があるからだ。善いか悪いか、正しいか間違っているかは、日本人の場合、すべて自分が決める。外国人の場合

は神とか国家とか、何らかの外部的な権威がそれを決める。この断絶は、果てしなく深い。

日本人といえども、「権威」というものが存在することは知っている。たとえば裁判所とか、警察とかは、誰にもなじみの深い権威である。子どもにとっては、いちおう学校や親は権威的な存在である。しかし、その権威に従うかどうかは個人の自由であると考えるところが、日本人の特徴である。その権威のことが好きだったり、従った方が得になると判断したりしたら、そのときは進んで従う。反対に嫌いだったり、損になることが明らかだったりすると、絶対に従わない。無理に従わそうとすると、ありとあらゆる手段で抵抗する。もっとも極端になると、従わそうとした相手を殺すことがある。

日本人は、権威に従わなくていい自由を、最高のものだと考えている。そして、権威に従うかどうかを自分で選択でき、判断でき、決定できるようになることが、自由の完成、すなわち民主主義の完成であるとも、考えている。

なだいなだ氏の考え

たとえば、精神科医なだいなだ氏の『権威と権力　ーいうことをきかせる原理・きく原理ー』という本がある。これは、まさにタイトルそのもの、権威について論じた本である。「A 君」という高校生と、「私」という精神科医のやりとりで、話が進んでいく。その中には、次のようなところがある。

「たとえば、権威には従ってもいいし、従わなくてもいいところがあるような気がするのです。・・・

なるほど、君のいうとおりだ。・・・たしかに権威に対しては自発的に従うというニュアンスが強いようだね・・・」

「そして、昔は、どうも権威だけでいうことをきく人が多かったらしい」

「とすると、同じものに一人つまり君は権威を感じ、他の一人は感じないということになる。権威は比較の問題だということだね」

「ここでわかって来たことは、権威を持っていたものが、それを失ったのではなく、権威を感じていたものの成長が、それを感じさせなくなったということだね。今の社会の権威もそれを持っていたものが失ったのではなく、人民が支配者と本質的に変わらないという自覚を持つようになった必然的な結果なのさ」

「自分たちが判断することをあきらめて、誰かに判断をゆだねる。そこに権威のは

いりこむすきができるのさ。・・・つまり、そういう時こそ、自分が権威に弱くなるのを警戒しなければならないね。・・・どんな判断も絶対的ではないという条件で、判断すればいいのだよ。・・・単なる目安と考えておけばいいのさ」

「権威というものは、自発的に、ある人間の心に生まれるものなのに、それを強制的に生まれさせようとする姿勢が、そこに見られる」

「やれとか、やるな、ということでなく、それは相手の判断にまかせる。ただ、こちらは、理があるかないか、くわしく説明すればいい」

「できないことは、やらなけりゃいいのさ。たがいの好みを認めればね。自分の好みを、他人にお前も好めと、押しつけなければいいのさ」

たくさんの引用になったが、いままで権威について述べてきたことを、なだ氏が違う語り口で説明してくれていることがおわかりいただけるだろう。そして、人民は「成長」すると権威を感じなくなる、とか、権威が入り込んでくる「すきができる」等の書き方から、なだ氏が権威に対しては相当批判的であることも伝わってくる。

権威なき調和

登場人物の一人 A 君は、学校でクラス委員をしており、そのクラスは「ぜんぜんまとまりがないのです。てんでんばらばらなのです。みんな自分勝手なことをしています」と訴える。そして「クラス委員として、みんなをひとつにまとめるには、どうしたらいいでしょう」と、「私」に相談しにくるというのが、物語の設定である。現代日本の状況が、てんでんばらばらな高校のクラスにたとえられている。

二人とも「権威」に盲従するのはイヤなので、前にあげたようなやりとりをしながら、いろいろと考えてくるわけである。結局どうすればいいのか。「私」は、次のように A 君に提案する。

「人間は、はたして、ばらばらのまま、生きられないものなんだろうか。・・・

なんだか、むずかしそうですね。

しかし、ばらばらのままでは生きられないからこそ、ある程度しか、ばらばらになれない。生きられる程度で、かならず調和を見つけなければならなくなる。・・・

まとまりではなく、調和が必要だというんですね」

「そこでは、いやだったらやめればいいのだし、強制はないわけだ。一人一人の意志だけが問題なんだ。

そこでは、まとめる必要はないでしょうね。

しかし、まとまりがなくなって、くずれ去ってしまうかね。存在しなくなってしまうかね。

そんなことはありません。

じゃ、そこにあるのは、なになんだ。ぼくが、ある種の調和といったものの一つではないのかね。

そうだろうと思います」

「少なくとも、権威の問題も、権威をうちたおすことよりも、権威を感じなくなることに、大きな意味がでて来る。もともと権威は、ぼくたちの内面の問題なのだからね」

「人間が自由にふるまいながら、自然に秩序がたもたれる世界なんて、ユートピアです・・・

そうだね。ユートピアだな。

すると、ぼくたちは、まとまりもなくなった、調和も得られないという、宙ぶらりんなところで、生きていなくてはならない、ということなんですね。

そうさ。・・・ユートピアは、ばらばらな人間であるぼくたちには、みちびきの星であるわけだよ。はじめから、現実のものではないのさ。・・・いいかえれば、見つめるべきものであって、たどりつくべきものではないのさ」

この本は最後、次のように結ばれている。

「A 君は、私がいうと、ちょっぴり微笑した。その微笑の中に、皮肉なかげが全くないとはいえなかったが」

この本が、はっきり言えば権威の否定を目指すものである以上、この本そのものが権威になってしまっては、とんでもない矛盾に陥る。権威がいいか悪いかについては、「私」は嫌いだが、それをどう思うかは読者それぞれ自由でよろしいということにしなければならない。結局何を言いたいのかは、読者にはもちろん、書いている本人にもわからないようにしなければならないし、そうならざるを得ない。権威について、何かわかるようであ

りながら、肝心のところは何もわからないというのが、この本のミソである。

なだ氏も、この世に権威はあるし、それをなくすことはできないと考えている。しかし、それは同時に、現実の存在物として「ある」のではなく、一人ひとりの人間が「ある」と「思い込んでいる」、幽霊にようなものに過ぎない、とも言える。だから、みんなが「権威なんてないんだ」と考え直すだけで、この世のあらゆる権威は消えてしまう。コロンブスの卵的発想である。

権威なんてない、と思うことは、自分を束縛するものは何一つない、と思うことでもある。自分はあらゆることから自由だ、と思えることである。何を思っても、何を言っても、何をしても自由である。何の遠慮もいらないし、恥じる必要もない。

しかし、そんなことを言ってはみても、現実はそういうわけにいかない。みんなが自由になったら、この世はどうなってしまうのだろうという恐れが、A 君にも「私」にもある。

しかし、「私」は、そこに必ず「調和」が見いだされるはずだ、と言って A 君を励ます。決して実現されることのないユートピアではあるが、人間はそれを見つめ続けなければならない、とも言う。

コギト　エルゴ　スム

権威がなくても人間は調和して生きていける、と、なだ氏は言う。いや、「できる」とは言っていない。「できないけれどできる」と言っているのだ。ふつうに読めば「何それ？」となる。どっちなのかはっきりしようと思ったら、やっぱり「できない」とするしかないだろう。結局、権威がなければ、人間はばらばらになって、社会は崩壊する。調和も実現されない。でも、「これでいいのだ」と言う。失礼なたとえだが、バカボンのパパのようである。権威に従って生きるくらいなら、進んでばらばらになろうという考え方である。

つまり、この世であてになるものは何もないし、あてにしようとしてはいけない、と言っているのである。もちろんそう言うなだ氏のことだって、あてにしてはいけない。しかし、たった一つあてになるものがある。それは「あてにならない」という自分の考えだ。あらゆるものがあてにならなくても、「あてにならない」と考えている自分の存在だけは確か、ということになる。

哲学が好きな人はご存じと思うが、これはかの有名なデカルトの言葉、「コギト　エルゴ　スム」、「我思う　故に我あり」である。この世で絶対なのは、自分だけと言うのである。

戦争中は、天皇が絶対で、そのお言葉に従っていれば間違いないと、大多数の日本人が思っていた。良心的な人ほどそうであったろう。しかし、その絶対的な信頼が、終戦日のたった一日だけで、根底からひっくり返った。廃墟の中で、多くの人は途方に暮れた。そして、とにかく生きていくために、食べ物を得て、家を建て、お金を稼ぐ必要があった。より豊かになるためには、いい学校を出て、いい会社に就職することが大切になった。いい子どもに恵まれることも大切で、そのためにはいい相手と結婚しなければならない。戦後しばらくは、物質的な豊かさが、絶対的に信頼された。そこにいちおうの権威、というか共通認識があったのである。社会の根底には、「人はあてにならない。頼りは自分だけだ。そしてお金は裏切らない」という思いが、脈々と流れていた。

しかし、高度経済成長が終わると、物質的な豊かさを信用していいのか、疑問に思う人が増えてきた。豊かさを生み出す高学歴や大企業をあてにしていいのかどうか、迷う人も多くなった。そういう中で、なだ氏らのように「あてになるものは何にもありません」と言う人々が登場し、その考え方はじわじわと広まっていった。

世紀末、とうとうバブルが崩壊した。人もお金もモノも、あてになるものは本当に何もないんだ、ということを、ほとんどの人が痛感した。政治家や裁判官や警察官は、悪いことばかりして私腹を肥やしている。大学の教授や学校の先生も同じことだ。親は子どもをペットにし、子どもは親を利用する。やっぱりあてになるのは自分だけ、という考えは、ついに決定的になった。あの世でデカルトはどう思っているであろうか。

人間が人間として育つとは

それでは、いまの日本人がみんな「これでいいのだ」と言うバカボンのパパになり切れているだろうか。なだ氏は「それしかない」と言うのだが、実際はどうだろう。

これが、なかなかそうはいかない。いや、もっとはっきり言えば、そんなことは絶対に無理である。人間は、何かを、とくに他の人をあてにし、他人に依存しなければ、まともに生きていくことができない。これは性格が強いとか弱いとか、知能が高いとか低いとかとは関係ない、人間の生まれもった習性であるし、人間の人間たるゆえんである。

だいたい、この世に生まれてくる、ということからしてそうだ。そう、と言うのはつまり、両親がいなければ生まれてくることができない。自分だけで勝手にわいて出てくることは不可能である。ボウフラやウジ虫だって、親がタマゴを産まなければわくことはできない。いわんや人間をや。つい余計なことを言ってしまうが、その両親だって、それぞれ

二組の両親のもとに生まれている。こうやってさかのぼっていくと、あいだみつを氏も詩に書いているが、ほんの数代前までたどっただけで、何千人、何万人という先祖がいたことがわかる。

他人に依存している、というのは、誕生に限ったことではない。生まれてからも、大人の世話なしに赤ちゃんは成長できない。しかもこれが、人間の場合は、他の動物と違って特別な意味を持っている。

「オオカミに育てられた子」とか「野生児」などという話がある。世界各地でいくつかの例が知られているが、有名なのはインドで見つかったアマラとカマラの姉妹である。この二人が示したのは、人間は、動物が育てれば動物として育つ、ということであった。

このことは、人間以外の動物では考えられない。生まれたばかりの子犬をつれてきて、家の中で人間の子と同じように世話をし、話しかけ、遊んであげても、イヌはいつまでたってもイヌのままだ。言葉を話したり、靴をはこうとしたり、自分から歯を磨いたりはしない。これはイヌがサルになっても同じことである。人間だけが、動物の親のもとでは動物に育つ。反対に言えば、人間が人間として育つためには、人間が人間らしく育てることが絶対の条件である。

人間らしく育てるとはどうすることか、端的に言えば、人間としての愛情をかけることである。子どもをかわいいと思い、かけがえのない大切な存在であると感じて、一心に愛情を注ぐことである。子どもを愛するとは、「まともに育ってほしい」と願うことでもある。どう育つことを「まとも」と言うのかは、さまざまに議論が分かれるだろう。大事なことだが、これも簡単に言ってしまえば、他者を愛せる人間になる、ということになろうか。その子が親になったとき、またまたその子どもに愛情を注げるようになることが大切だからである。

愛情と信頼

人は、自分を愛してくれる相手を信頼する。特に子どもの場合、この信頼は無条件である。子どもにとって、自分を一番愛してくれるのは親である。だから、子どもは親を無条件に信頼する。すると、親の行動を何でもまねる。命令しなくても、勝手にまねをし、身につける。だからオオカミ少女は四つんばいで歩き回り、生肉を食べ、遠吠えをしたのだ。母狼が強制しなくても、勝手に覚えたのである。

親のしていることがいいか悪いか、幼い子どもは判断しない。したいかしたくないかも、

選ばない。いちいち考えなくても、勝手に体が動き、その記憶が脳に残っていく。

親に愛情がなく、子どもには命令と強制しかしない場合でも、子どもはそれをそのまま受け取っていくだろう。しかし、子どもは親からの愛情が感じられないと、だんだん親を信じなくなってくる。子どもには反抗期というものがある。子どもによって遅かったり早かったり、激しかったり穏やかだったりするだろうが、たいてい二，三歳から五，六歳のころに訪れる。いままで何でも親のまねをし、言いつけを聞いていたのが、反対に自分の思い通りにしたがり、自己主張をするようになる。

そのころまでに、親に愛情がないと、子どもは何でもかんでも親に逆らい、反抗することが多くなる。自己主張ばかりが激しくなり、親だろうと幼稚園の先生だろうと、人の言うことには聞く耳を持たない。親の愛で守られてこなかったので、自分で自分を守るしかないのである。他者からの注意やアドバイスも、自分への攻撃としか感じられず、自分を守るため過敏に反応する。親の愛を信じられず、信ずるに足るのは自分だけだと、別に理屈で考えなくても、思い込みがこり固まっていく。

親の愛情が信じられていれば、そんなふうに意地を張ってガンバらなくてもいい。やたら肩に力を入れることもなく、自然体でおだやかなものだ。自分の思うようにしたいことがあっても、わりあい柔軟である。「こうしたら？」とか「やめておきなさい」と言われると、素直に従う余地がある。また、言われなくても、大人や友だちが期待したり、喜んだりする行動がとれるようになる。

放っておかれたら、つまり、人間らしい愛情がかけられなかったら、子どもは決してこうならない。そして、親が子どもにかける限りない愛情とは、実は子どもにとって、絶対的な親の権威でもある。すなわち、権威なくして、調和のとれた人間に成長できることはない。当然社会の調和も崩れていく。

なだ氏も、権威なき調和は実現不可能と言っているのだが。

五分五分の関係

「愛情は権威だ」などというと、多くの人に「は!?」と言われそうな気がする。それだけならまだしも、金輪際相手にされなくなる恐れがある。しかし、辛抱してつきあっていただきたい。

相手の好きなようにさせてあげるのが、愛情というものではないか、という人がいるだろう。束縛せず、制限を加えず、最大限に相手に自由を保障してあげる、こういう姿勢こ

そ、愛と呼ぶのにふさわしい、こんな考え方である。

しかしこの裏には、「あなたに好きなようにさせてあげるのだから、当然私にも好きなようにさせろ」という魂胆がある。相手を束縛しない代わりに、自分も束縛されない。自由と権利はお互い対等であって、かかわりっこなし、ということだ。

「すべてあなたの好きなようにしてください。私は何もできなくて結構です。一切、したいことはありませんし、欲しいものもありません」と言える人がいたら、それはすごいことである。いや、言うだけなら誰でもできる。言ったことを、そのまま100%実行できたら、これはもう本当にすごい。究極的には「命を取られても、まったく文句はありません。いつ死んでも本望です」ということである。

「あなたも自由、私も自由でおあいこだ」と言うのと、「あなたは自由、私は不自由でも結構」と言うのと、いま、どちらが世の中の常識になっているだろうか。これはもう絶対にと言っていいと思うが、前者の方だ。これが民主主義の原理だからである。

これは、他者への愛情ではなくて、取り引き行為である。難しく言えば、理性に基づいた社会契約だ。しかし、この取り引きは、決してフィフティ・フィフティにならない。なぜかと言うと、前にも書いたように、人は例外なく誰かの「お世話」にならなければ、この世で生きていけないからである。この世に生み出されたのは、完全に両親のおかげである。この借りを、生きていく上で返せるだろうか。少なくとも子どものうちは、借りは増える一方である。では大きくなって親孝行すれば、全額返済できるか。親が死ぬときに「お前のような子どもに恵まれて満足だったよ」と言ってくれれば、多少は返せたことになるのかも知れないが、領収書が残るわけではない。

親の立場になってみれば、子どもは財産という場合もある。これは貸し主のわからない、無償の貸与である。返そうったって、どこに何を返したらいいのかわからない。せめてもと思って、子どもを一生懸命育てるのはいいことだと思うが、残高が増えたのか減ったのか、ちっともわかりはしない。

夫婦関係でもそうである。五分五分かどうかは、当人同士にすらわからない。配偶者を生んで育ててくれたのはその親であり、そこまで考えると、とても借りは返せない。

こう考えてくると、人間は誰一人として、他者に何かを与えてあげられる人はいない。一生、あらゆるものを、タダでもらいっぱなしのまま死んでいくだけである。仕事や収支決算の上では差し引きゼロが成り立つこともあるが、それだって付加価値を考えてみれば本当にトントンかどうか怪しいものだ。

ずいぶんいろいろなことを書いてしまったが、結局「私もあなたも自由で平等」などという関係は、この世に実現していない。あるのは「私は自由、あなたは不自由」なのである。民主主義で言われる「自由と平等」は、残念ながら口先だけに終わっている。そしてさらに、口先だけでいいのだと請け負い、開き直っているのが民主主義でもある。

何がそれを許しているのか

よく考えてみると、人間一人ひとりの自由は、すべて他者の不自由の上に成り立っている。足し算引き算で単純に考えれば、そこには必ず破綻が生じる。誰もが「冗談じゃねえぞ、なんで俺ばっかりソンしなくっちゃならねえんだ！」とキレても、特に不思議ではない。現に、いまの日本ではそのあたりが原因と思われる犯罪が連発している。ひきこもりにも、やはり共通の根がありそうだ。外に出たら「ソンする」「ソンさせられる」と思っている人は多いだろう。

しかしそれでも、社会はどうにかこうにか持ちこたえている。もっとも、坂道を転げ落ち始めてはいる。日本はその先頭である。しかし、いまのところ最終地点まで行っておらず、いちおう坂の途中にいる。

あらゆる人間は、他者に不自由を強制しなければ生きられない存在である。そんな人ばかりが集まって、どうして世の中が持ちこたえられるのだろうか。何がそれを許しているのだろうか。

宗教を信じる人は、それを神と言い、仏と言うだろう。日本では宗教を信じない人が圧倒的である。しかし、そうした人でも、「何かによって許されている」ということは、認めざるを得ないはずだ（よほど傲慢な人は別として）。宗教は嫌いでも、先祖供養は好きな人が多い。お彼岸には、有名な墓地へ続く道路が渋滞する。だから、「ご先祖様のおかげ」と言う人は多いと思う。それは結構な考えである。しかし、ご先祖様もかつては人間だったのだから、十分な答えとは言えまい。

やはり、人間の心の奥底に、他者を求め、許し、愛そうとする働きというか、傾向のようなものがあるのだろう。意識しなくても、知らず知らずのうちにそうなってしまうのである。自分の自由にしたい、という思いと一緒に、人の自由も許してあげたいという衝動に近いものがある。頭で、理性のレベルで考える前に、勝手にそうなっていってしまう。

こう考えてくると、本能、ということばが思い浮かぶ。が、こういう他者に向いた思いは、動物と同じ本能とは思われない。たとえば、サルの社会にもルールがある。ボスは群

れのトップに君臨するが、その代わり敵が来たら身をもって手下を守らなければならない。そのとき、同じグループのサルに思いやりをもっているわけではない。自分たちの種を保存するために、本能に基づいて敵と戦うだけである。手下の方にしても、強いボスには従うが、ちょっとでも弱くなったらサッサと首をすげ替える。「もうトシだし、任期満了まで見守ってやるか」などという温情ザルはいない。別にボスを人間的に、じゃないサル的に尊敬しているわけではないのだ。

他者への愛情を本能と呼ぶのはかまわないかも知れないが、それはあくまでも人間だけに特殊な心の働きである。

人間の社会は、他者への愛によって成り立っている。この愛の働きには、人間は無意識のうちに、無条件に従う。「そんなことあるか」と思う人でも、おそらく自分で気がついていないだけである。

とすると、人間を無条件に従わせ、無意識のうちに愛他的な行動へと駆り立てる、この心の働きこそ、権威の根源である。なだ氏は、権威は人間の内面の問題であると言った。それは言い方としては間違いではない。が、人間は無意識の中に、自らが権威を宿している存在であると考えないと、不十分なことになる。「心の持ちようの問題だから、従おうが逆らおうが、個人の勝手だ」と考えるのでは、実のところ本末転倒である。

権威は無意識に宿る

人間にとってやっかいなことは、この権威の根源が、無意識のレベルにあるということである。無意識とは、つまり、自分ではどうにもできないということである。人間の無意識にはいろいろな働きがあって、たとえば、片思いの相手にバッタリ出くわすと、顔が火照り、鼓動は速くなり、のどが渇き、しゃべろうと思っても舌がもつれてうまくことばが出てこない。こういう純情な人はいまや貴重だと思うが、いることはいるだろう。

そういうさまざまな反応は、自分で抑えようと思っても無理である。それが無意識の働きだからである。反対に、腹に据えかねる奴が自分の上司だったりしたときには、どうしても笑顔が引きつってしまう。指示も素直に聞けない。本心を見抜かれて左遷させられる場合がある。これもまた無意識のなせるわざだ。

人間は、意識が発達して、いろいろなことができるようになったり、わかるようになったりすると、次第にこのやっかいな無意識の存在が疎ましくなる。日常生活で、ちょいちょい無意識が顔を出してきては困る。「嫌いな奴は無視していいんだ」と開き直っても、

仕事に差し支えるのでは困る。そのため、なるべく意識を発達させて、すべて、とは言わないまでも可能な限り意識のレベルで物事を処理できるように努力することになる。その努力が実れば実るほど、人間は「自由」になれると考える。

無意識の権威はもともと自分でもわかっているわけではない。無意識なのだから当然だが、知らず知らずのうちに従ってしまうだけである。しかし、その、知らず知らずにとった行動は、自分で意識することができる。そうすると、そんな行動をとらないように、自分の行動を調整することが起きる。なるべく自分が得をするようにはからうようになる。外部の権威は否定されるし、内部の権威（＝愛他心）も次第に影響力が小さくなっていく。

権威の否定と不安

しかし人間は、権威から逃れ、自由になれたと思えば思うほど、実は「こんなんで本当にいいんだろうか」という不安が膨らんできてきてしまう。人間にはいろいろと難儀なことが多いが、この不安はそのうちでも難儀の代表選手のようなものである。自由になれたと思えば思うほど、不安の束縛という不自由に悩まされるのだから、これはきわめて困る大矛盾である。

どうしてそんな不安が襲ってくるのだろうか。人間は根本的に、他者に依存することで生きていられる存在だからである。何にも頼らず、束縛もされず、自由に勝手きままに生きたい、というのは多くの人の願いだが、実はそれを実現しようとするほど、根本的な人間のあり方に反することになり、不安と孤独がやってくる。

人間は、なかなか不安を抱えたままでは生きていけないものである。何とかしてその不安をうち消そうと躍起になる。しかも、この不安は無意識から立ち上ってくる。言うなれば正体不明である。人間にとって、正体がわからないものほど、不気味で恐ろしい相手はない。

そういうとき、「怖くないんだ」と、いくら自分に言い聞かせても無駄である。そんなことくらいで怖さが消えるのであれば、ホラー映画なんぞバカバカしくて、誰も見に行かないだろう。「怖い」「怖くない」というのは理屈ではない。

ではどうするか。多くの場合、人は、欲望を満足させることで、その恐怖から逃れようとする。欲望に浸っているときだけ、その怖さを忘れられるのだ。わかりやすいのはやけ食い、やけ酒である。交際相手をとっかえひっかえし、性欲の満足に逃避する場合もある。いい車に乗り、高い服を着、豪華な家に住んで、心を落ち着かせようとする人もいる。

他人に優越感を持つことで、不安から逃れようとする場合もある。いい学校、いい成績、いい会社、高い地位、こうしたことで他人に勝とうとするのである。

このような欲望を満足させようと思ったら、それなりのエネルギーと努力が必要である。棚からぼた餅がボタボタ降ってくるようなことは、現実社会ではまず起こらない。しかし、多くの現代日本人は、そのエネルギーがだんだんヘタってきて、努力する気も失せてきた。何しろ、小学生が「ボク将来は公務員になりたいな。リストラされないから」と言う時代である。いや誤解しないでもらいたいが、公務員になりたいという願いがどうこうなのではない。将来に対する夢や希望、気概や覇気ということを言いたいのだ。

ひきこもりの不安

欲望を満足させるだけのエネルギーがなくなってきても、不安は減らない。むしろ発散できない分、ますますつのってくるだろう。それが高じてしまったのが、おそらくひきこもりである。

ひきこもり者は、いっさいの頼れる対象を失い、ついに自分すらも頼ることができなくなってしまった。誰からも守られないし、自分で自分を守ることもできない。もはや、建物や部屋によって外界から自らを隔離する以外に、生きていけるすべを失ったのである。

ではひきこもることで不安は解消できるだろうか。ひきこもりだけが安心をもたらしてくれるのだろうか。それは残念ながら正反対である。ひきこもればひきこもるほど、不安は増大し、恐怖は容赦なく襲ってくる。ひきこもり生活が楽しくて仕方がない、呼ばれたって外へなんか出ていくもんか、いまの生活で十分満足してますというひきこもり者は、おそらく一人もいないだろう。ひきこもりがもっと増えて、二百万になっても、三百万になっても、きっとそういう人は出てこない。

「ひきこもりが楽しい」と言う勝山実氏にしても、ややこしい表現をすれば、「ひきこもりが楽しい」のではなく、「『ひきこもりが楽しい』と言えることが楽しい」のであろう。ひきこもりそのものではなく、ひきこもったままインターネットが使えたり、本が出せたり、ひきこもり者のイベントに呼ばれたりすることが楽しいのだ。

ひきこもっていても他者と交流ができるから楽しいと言える。結局、人間の生きる楽しさ、喜び、幸せというのは、他者との関わりの中にしかないのである。

権威にアンビヴァレントな日本人

さて、しばらくの間「権威」ということばそのものから離れてしまった。結局、権威に従うことの本質は、他者に心を開き、他者を信じて愛情をかけることに他ならない。それは、すべての動物の中で人間だけが持っている心の働きである。したがって、権威は、人間の本質、人間の人間たるゆえんから切り離すことはできない。権威の否定は、人間性の否定でもあるのだ。

しかし、こんなふうに書いても、やっぱりほとんどの人には納得してもらえないだろう。「権威　＝軍隊、警官、お上、ご無理ごもっとも、滅私奉公、長いものには巻かれろ、郷に入れば郷に従え」、こういう固定イメージが強すぎる。そこから、「いやです。従いません」という判で押したような拒絶反応が返ってくる。しかし、多くの人が、権威を否定しつつも、その舌の根が乾かないうちに権威を求めるようなことを言うものだから、始末が悪い。話がますますこんがらがってくる。日本人は、おそらく世界一、権威に対してアンビヴァレントな国民である。

たとえばアメリカ人など、ものすごくわかりやすい。神の権威と教会の権威は絶対なのが常識である。したがって、神の意志を受けた大統領、議会、裁判所の権威も絶対である。学校の先生、そして親の権威も、当然絶対である。それに服従することは当たり前で、服従することによって幸せが得られると、誰もが（少なくとも大半の人が）信じている。

権威によるコントロール

作家・村上龍氏が『「教育の崩壊」という嘘』という本を出している。教育をめぐる対談集である。その冒頭でのエッセイで、村上氏は次のように書いている。

「教育の崩壊という言い方は、過去には存在しなかった問題が噴出していて、システムが機能しなくなったというニュアンスがある。教育の現場で何が起こったのか。簡単に言えば、教師の『権威によるコントロール』が揺らぎ、児童生徒が従順ではなくなったということだと思う」

他にも「権威」や「権威によるコントロール」について説明し、考えを述べている箇所は多い。村上氏の賛成が得られるかどうかわからないが、ここで言われる「権威」は、言い換えると、「問答無用でこちらに従わせる圧力」ということになろうか。

しかし、いままでさんざん考えてきたように、権威の本質はそういうものではない。圧力は、権威のように見えて、別に権威でも何でもない。一つの「社会コントロールプログラムを備えたパワー」である。

村上氏の意見を見ていくと、とにかく現代では、権威によるコントロールは崩壊したのだと言う。現代人が権威を失ったのは事実である。そして、それは民主主義社会が招いた当然の帰結でもあった。そして村上氏は、これからは、「コミュニケーションによる」コントロールに切り替えていくしかない、と述べる。この、「コミュニケーション」については、次章で考えていくことにして、村上氏の権威に対する本音を、対談の中から探し出してみたい。

問答無用

対談の最後は、ジャーナリストの江川紹子氏・保護観察官の小宮由美氏との鼎談になっている。次のような部分がある。

「村上　江川さんはオウムの現場にいらっしゃるときなどに、理念というか規範が、何かないのかな、あれば楽なのにな、と思うことはありませんか。

江川　カルトの問題にしても、絶対になくならないと思うんです。なくならないんだけれど、不幸の数は少ないほどいいわけです。だから、それを減らすためにはどうすればいいか。あんなカルトもある、こんなのもあると暴いていくのも、ひとつのやり方かもしれません。暴くことで警鐘を鳴らすということですね。でも私はそれだけでは十分ではないと思います。

村上　理想的には、昔ふうのものではない、本当にフェアな問答無用の何かがあるといいですね」　　（傍点筆者、以下も同）

昔ふうであろうと現代ふうであろうと、村上氏の言う「問答無用の何か」とは、まさに絶対的な権威に他ならない。村上氏がそういう表現をしなかっただけである。村上氏自身、そのことには気づいていないようである。江川氏はもっとわかっていないらしく、次のように話が進んでいる。

「江川　ええ。ただ、ひとつの絶対的な価値観があるわけではないので、例えば今の若者が抱えているのと似たようなもやもやを抱えてきた人が、その後どういうふうに生

きてきたのかなど、いろいろな生き方を知って考える材料にすればいいな、と思っています。実際、私が話をするときも、そういう実例については、熱心に聞いてくれる。

村上　何かそういうものが徹底的に欲しいということは、よくわかります」

「問答無用」とは、絶対的ということである。「考える材料」をあれこれ並べて選ぶと、その中から「問答無用」なものが見つかるわけではない。そのあたりのことが、ここのやりとりでまったく見過ごされているのは、どうしたことだろう。

しかしともかく、村上氏はそういうものが「徹底的に欲しい」と言うのである。村上氏はそれが、「昔ふうでなく」「フェア」であることが条件だと言っている。しかし、しつこいようだが、問答無用なものにそんな条件を付けるのが、そもそも無理な話である。

民主的な手続きによって、みんなで勉強し、かしこくなって、知恵を出し合い、議論や多数決で選び、絞っていけば、そこから問答無用な何かが生み出される、という思いや期待があるかもしれない。しかし、ちょっと考えてみれば、それが無理なことはすぐわかる。自分たちの提案が少数意見として消された側にしてみれば、多数決で残った意見は、別に問答無用でも何でもない。ルールに沿って仕方なく多数派に従うだけであり、無理矢理押しつけられるようなことになれば、反発は必至である。

いずれにせよ、権威によるコントロールを否定する村上氏ですら、本音では権威を求めざるを得ないという事実は重要である。

信じ合うことで得られる安心

結局、どんな人でも、何かを信じ、何かに頼らなければ生きていけない。「自分は何も信じていない」と言う人でも、「信じていない」という考え方だけは「信じている」。つまりデカルトと一緒である。信じるものが一つもない、ということはあり得ない。

しかし、信じるものが自分しかないと、人は存在そのものを脅かす不安に襲われてしまうのは、すでに何回か述べたとおりである。ひきこもっている人は、他者と交流しないので、信じられるのは自分だけなのだが、その唯一信じるしかない自分ですら、徐々に信じられなくなっていく。あらゆることに対する不安が、ほぼ破綻寸前にまで高まっていると想像される。

その不安を解消する、たった一つで、しかも最大の効果があるのは、他者を信じることである。しかし、これはひきこもっている人にとっては何よりも難しいことだろう。人を信じられれば最初からひきこもりなど起きないはずである。

信じることが難しいのは、ひきこもり者にとってだけではない。ほとんどの現代日本人は、何も信じることができない。人前でうっかり「〇〇を信じてます」などと言おうものなら、さーっと人がよけていって、その人の周りに半径二十メートルほどの円ができる。

よけていった人も、本当は何かを信じたいのだ。しかし、信じることで損をするか得をするかがわからないので、何も信じられない。何ものかを信じたためにどん底に突き落とされる人々の姿が連日ニュースで報道され、多くの人はますます猜疑心をつのらせていく。オウム真理教しかり、法の華三法行しかりである。オウムなど、信じてもいない人まで巻き添えにした。さらに例を挙げれば、極悪人のケアマネージャーが、おそらく自分のことを信じていたであろうおばあさんを殺し、貯金を巻き上げようとした事件があった。

人を信じるとは、人とコミュニケーションがとれることでもある。村上氏は「コミュニケーションによるコントロール」を勧めるが、そこにお互いの信頼がなければ、そもそもコミュニケーションが成立しない。そして、信頼とは、人が生まれながらに持っている愛他心を豊かに発揮して行動することであり、それは根源的な権威に従うことでもある。だから、実はコミュニケーションがとれるというのは、権威に従うことと同じなのだ。

ほとんどの外国人は、ものごころついたころから、両親や先生にこのことを叩き込まれて育つ。ことばや教育方法は異なっても、根はだいたい同じである。世界の中で日本だけが、このことを一切子どもに教えていない。その結果がどうなったかは、いままで考えてきたとおりである。

IX　ニッポンのコミュニケーション

コミュニケーション花盛り

コミュニケーションは、現代社会のキーワードである。どうしたら、コミュニケーションがスムーズに、豊かに、楽しいものになるか。誰もが毎日、このことを考えて暮らしている。特に企業は必死である。コミュニケーションはいまや金のなる木、黄金のタマゴを産むニワトリだからである。

すでに述べたように、日本はもうかなり以前、第一次（農林水）産業が事実上崩壊した。食糧自給率は先進国中最低で、海外から食べ物を輸入しなければ、日本はあっという間に飢餓状態に陥る。また、家を建てる際、国産のスギやヒノキだけを使おうとしたら、お金がいくらあっても足りない。東南アジアや中南米の熱帯雨林が、日本の家に変身している。第二次の製造業も、国内だけでどうにかしようとしたら大変である。ラジカセ一台二十万円、ジーンズ一本三万円くらいで引き合うかどうか。安い労働力を求め、生産拠点はほぼ例外なく海外に移っている。

日本の生き残る道は、もはや第三次、サービス業しかない。しかし、しんどい接客業や、汚い、きつい、危険の３K 職種は、誰もやりたがらない。近い将来ここは、完全に海外の労働力で占められる可能性がある。極端に言えば、いまや官と民の眼中には、情報産業しかない。

革新的な情報技術は、産業のあらゆる場面に応用可能だし、やりとりされる情報そのものが莫大な利益を生み出す。何しろ、情報は元手がかからない。利益率を限りなく高めることができる。宇多田ヒカルや小柳ゆきの歌声は、本来タダである。イチローや新庄のバッティングも、もともとはタダである。しかしそれらは、サラリーマンの生涯賃金からすれば天文学的な金額を、たった一年でやすやすと生み出す。

わずか百年ほど前まで、歌手の歌声や野球選手のプレーには、コンサート会場や野球場まで出かけなければ触れられなかった。ラジオ、テレビ、ステレオなどの発明は、その距離を物理的にも心理的にも、グッと縮めた。しかしそれは、インターネットの便利さ、速さ、快適さの足元にも及ばない。経営者側にしても、コストの低さは比較にならない。情報通信技術の発展は、効率とコストの面から見ると、非の打ち所がない。

このような一連の流れの中核にあるのが、コミュニケーションである。

コミュニケーションに求められるもの

コミュニケーション能力が高いこと、これが現代の社会人に求められる必須条件である。単に頭がいいだけで、人とのコミュニケーションが下手な会社員は、出世の可能性がかなり低い。

では、コミュニケーション能力が高いとは、実際にはどんなことなのか。いまは、どんな能力が求められているのか。

ひとつには、コミュニケーションツールをたくみに、自由自在に操れることがある。先日、ある有名な心理学者がテレビに出て、六歳になる孫の話をし、マウス操作の上手なこと、とてもかなうものではないと話していた。似たような話はいくらでもある。たしかに子どもはスポンジが水を吸うように、パソコンに関する知識や技能を吸収する。小中学校はもちろんのこと、幼稚園でもパソコンを導入するところが増えてきた。

ただ、よけいなことだが、日本は教育にお金を使いたがらない国である。とりあえずは何千万円もかけて教室を改造し、パソコンを入れるが、そうなったら最後、ハードやソフトが日進月歩で進化するのに、まったく更新しない。二年、いや一年もたてば、教師や子どもが自前で持っているパソコンの方が、性能がずっと上になる。自然、誰も教室へ足を運ばなくなり、パソコンはホコリをかぶって死蔵品になる。だいたい、学校のパソコンは、インターネットにつながっていないことが多いのである。年々教育予算が削られて、接続料、通話料どころではない。

さて、ふたつめは、英語がしゃべれることである。以前から、英語は国際公用語として通用していたが、近年はグローバリゼーションが進んで、その傾向に拍車がかかった。しかし、日本人は、一生懸命に英語を勉強するのに、ちっとも身に付かない。英会話学校のNOVAが「ミニヨクツク」とコマーシャルで言いたいのもよくわかる。TOEIC、TOEFLといった国際的な英語技能試験では、日本の受験生の得点は惨憺たる有様で、アジアの中で最低レベルである。産業界も、文部科学省も危機感を強め、小学校から英語が導入されるようになった。「総合的な学習の時間」の内容は、パソコンもそうだが、「国際理解」が目玉である。これは実質、ネィティブの英語講師を招いて、英会話能力を習得させることにかなり近い。「読める」「書ける」はさておき、「話せる」ことが第一の目標になっている。大人にも英語の勉強熱は相変わらず根強く、最近は以前より切実感を増しているように見える。昔のような趣味や教養の範囲を超えて、収入に直接響くようになった。海外転勤や転職の道も開ける。さらに、海外資本が流入して、上司が外国人になるケースがあ

り、歌謡曲にも歌われている。

みっつめは、人前で堂々としゃべれるようになることである。これこそ、勉強ができるだけではどうにもならない。従来、日本人はしゃべることがとても苦手であった。昔のテレビニュースなどを思い出すと、自信満々の外国人政治家に対して、わが日本代表の方はなんとなくニコニコしているだけのように見え、どうにも頼りなかった。「沈黙は金、雄弁は銀」「男は黙ってサッポロビール」等々、古来から「しゃべらない」ことが美徳だったのだから当然と言えば当然である。

しかし、いつまでもそんなことを言っていては、世界の中で経済大国はつとまらない。論理で対等に渡り合える国際人になる必要がある。そこで、学校の授業でも討論、ディベート、発表活動がさかんになってきた。良いアイデアを持っていたり、正解がわかっていても、それを人に言えなければ評価は低い。反対に、少しくらいチャランポランでも、「ハイハイ」と元気に手を挙げて、滔々と意見を述べられる子どもは高い評価を受ける。かどうかは定かではないが、そういう傾向はあるだろう。大人になって政治家にでもなれば、話は中味より押しの強さで勝負が決まる。もっと上を行くのは弁護士であり、どれほど極悪非道な被告人でも、ありとあらゆる弁舌を尽くして、少しでも量刑を軽くするのがその仕事である。そのとき、善悪の判断は二の次になっている。海外との取引が多いビジネスマンには、同様の能力が要求される。

いまやコミュニケーションは、国家と個人がより豊かになるための最大の戦略として位置づけられている。この時流に乗れない人々は負け組として取り残される可能性が高い。

進化するコミュニケーション形態

インターネットの普及は、コミュニケーションの形を劇的に変えた。電話や無線通信も革命的な発明だったが、インターネットはその影響力の大きさにおいて、従来の通信技術を圧倒的に凌駕している。

何よりも大きいのは、個人が、誰とも顔を合わせることなく、声も交わさずに、一度に、しかも瞬時のうちに、不特定多数の相手と情報をやりとりできるようになったことである。テレビもいちおう不特定多数の視聴者を相手にして生放送ができるが、情報の流れは一方通行である。見ている人はせいぜい電話やファックスで参加するくらいしかない。それも、番組で取り上げられなければ、反応がなかったのと同じである。

インターネットがテレビと決定的に違うのは、情報の流れが双方向であるという点であ

る。送り手と受け手がまったく対等な関係にある。この点では電話と共通しているが、電話が基本的には一対一、「思いッきりテレビ」の「思いッきり生電話」を見ても、せいぜい一対数人が限度である。しかしインターネットでは、E メールやチャットで、体力の続く限り何人でも同時に相手ができる。さらに、しゃべらなくていいのでノドが枯れる心配がない。目は疲れると思うが、それは相手に伝わらないので、我慢すればやりとりに支障はない。ついでに言えば、だいたい偉い人とか忙しい人に電話をすると、取り次ぎの人が出てしまい、うっかり怪しまれたらそこでガチャンである。ところが相手のメールアドレスを知っていれば、本人に直接アクセスできる。返事が来なければやりとりは成り立たないが、こちらのメッセージをダイレクトに伝えるという目的は達成できる。ここに中傷メールの意味がある。相手のふところにいきなりナイフを突きつけることができるのだ。

このようにコミュニケーションの形が「進化」することで、ひきこもり者もひきこもったまま、社会とつながることができるようになった。

コミュニケーションとは何か

さて、話がここに進むまで、一体何回「コミュニケーション」ということばが登場したのか、いまさら数える気も起こらないが、「コミュニケーション」は他のことばで言い換えられないのだろうか。カタカナで書くことから明らかなように、これは外来語、英語である。綴りは communication である。baseball は「野球」となり、telephone は「電話」、movie は「映画」となった。しかし communication は「コミュニケーション」のままである。企業名としては「NTT コミュニケーションズ」としか言いようがない。「トヨタ自動車」「三菱電機」とはずいぶん違う。

あえて日本語に訳そうとすると、「情報伝達」とか「意志疎通」、「通信」等になるようだが、どれもコミュニケーションの一部にとどまっているように聞こえ、全体の意味は伝わってこない感じがする。これは、「甘え」を表すぴったりした英語が存在しないのと、ちょうど逆の形になっているようである。そもそも、コミュニケーションに該当することばを、日本の文化が必要としてこなかった、ということになるのではないだろうか。

こんなふうに詰めて考えてくると、当たり前のように使ってきた「コミュニケーション」ということばが、本来は何を意味しているのか、だんだんわからなくなる。地下鉄がどうやって入ったのか、考え出すと眠れなくなるようなもので、気になってくる。

お世話になるのはもうこれで最後だと思うが、『広辞苑』でコミュニケーションを引く

と、次のように書いてある。

「①　社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする。

②　（イ）動物個体間での、身振りや音声・匂いなどによる情報の伝達。

（ロ）細胞間の物質の伝達または移動。細胞間コミュニケーション」

ピッタリとした日本語訳がないことは、とにかくわかった。

コミュニケーションを求める人々

どうして現代社会で、これほどコミュニケーションがもてはやされるのか。一つに、産業界の要求が考えられることはすでに見てきた。しかし、儲けや金勘定ですべての説明がつくとも思えない。インターネットの普及率は 40%に迫る勢い（ただし世界順位は 14 位と低迷、2001 年のデータ）で、そろそろ二人に一人はインターネットを利用する状況になった。が、そういう人々がみんな、ネットやメールで商売をしているわけではない。大半の人は、儲かるわけでもないのに、料金を払ってディスプレイの前に座り、マウスを転がしている。娯楽は他にもいろいろとあるのに、だ。

もちろん、コミュニケーションの手段はインターネットだけではない。携帯電話の普及を見よ。マナーがどうとか子どもには不要とか言われながらも、いまでは持っていない方が珍しがられる。車同士の交通事故現場を通ると、ドライバーのどちらかはほぼ間違いなく携帯を持っているので、たいていへこんだ車の横で電話をかけている。人里離れた山奥でぶつかった時など、さぞ便利だろうと思う。もっとも、事故に備えて携帯を持っているわけではあるまい。いや、ひょっとしたら運転中の通話が原因で事故になったのか。

それから、みんなが仕事で必要なわけでもない。やはり、非常に多くの人が、コミュニケーションを求めているのである。

教育という、子どもの将来に関わる現場に対しても、村上龍氏が「コミュニケーションによるコントロール」の採用（村上氏は「切り替え」と言っている）を提唱している。以下、村上氏の言うコミュニケーションが何を指しているのか、引用によって考えてみたい。

コミュニケーションによるコントロール

村上氏は、『「教育の崩壊」という嘘』で、次のように言う。

「教育を考えることは、コミュニケーションの問題を考えることだ」

なぜそう断言できるのかについての説明はない。しばらく「権威によるコントロール」の話が続いたあと、次のように述べられている。

「親や教師の、『権威による』コントロールという方法が崩壊した今、これからは『コミュニケーションによる』コントロールに切り替えていくしかないが、それは簡単ではない。現在、家庭や学校の現場に噴出しているさまざまな問題、いじめや不登校、校内・家庭内暴力、ひきこもり、援助交際、未成年者の犯罪などは、子どもとのコミュニケーションの前提が整備されていない事実を示していると言える。つまり、親や教師の言うことに耳を貸そうとしない子どもが大量にいるということだ。

コミュニケーションの前提を整備するためには、権威によるコントロールに頼ってはいけない。さらに、権威によるコントロールが機能していたころには不要だったことが必要になる」　（傍点筆者）

こう読んでくると、村上氏の考える「権威」は、コミュニケーションとはまったく相容れないもの、コミュニケーションの成立を阻むものとして考えられていることがわかる。権威があるところにはコミュニケーションはないし、逆にコミュニケーションがあれば権威はなくなる（か、必要ではなくなる）ということだろう。

さて、コミュニケーションの前提のために必要になってくることは何か。

「まず子どもへの対処の基本となる親や教師用のマニュアルが必要ではないかと思う。・・・わたしが知る限りそういったマニュアルはない。必要だという声もあまり聞かない。それは権威によるコントロールで問題を解決してきた名残だ」

多くの日本人は権威に対してアンビヴァレントだが、マニュアルに対しても同じである。「マニュアル」と聞くと、即座にマクドナルドやデニーズでの接客態度を思い出して、「へっ、あんなもん」となる。しかし一方で、原子力発電所の事故や、学校での事件が起きる

と、「危機管理のマニュアルはどうなっていたのか」と、大騒ぎになる。それらはともかくとしても、村上氏は子どもに対応するマニュアルが、コミュニケーションのためには必要と言う。

マニュアルの他にも、必要なものがある。

「社会インフラとしては、権威によるコントロールには不要だったものが必要になる。家庭や学校へのカウンセラーの導入、警察や地域社会や民間組織との協力、スポーツや文化施設の充実などだ・・・。」

「社会インフラの他に『戦略』が必要だ。わたしたちは子どもに生き方を示さなければならない。・・・今、教育において問われているのは、わたしたち大人が子どもにどういう人生を望むのかということで、すなわちそれはわたしたち大人がどういう人生を望んで生きてきたかということでもある。わたしたち大人は、どう生きればいいのかを、職業・仕事の多様な選択肢と、充実感を得る方法を含めて、つまり個別の希望を子どもに示さなければならないのだ」

マニュアル･インフラ･戦略

村上氏の考えをごく簡単にまとめると、コミュニケーションの成立には「マニュアル」「インフラ」「戦略」の三つが必要ということになる。

これらは、考えようによってはどれもそのまま「権威」として通用するものばかりである。「マニュアル」は、従っていれば間違わず、勝手に無視すると失敗する、という説明書である。「インフラ」は、人的なものも含めて社会的な器であるから、個人の思いでどうこうできるものではなく、ある程度の共通理解にもとづいて存在するものである。権威とは言えない場合でも、ルールや束縛が必要なことは間違いない。「戦略」はマニュアルに近いが、より長期的な展望を指すことばであろう。これも、一度定めたら、そうちょいちょい変更されるようでは困る。ある期間、多くの人がそれに従って行動することを強制するものである。

太平洋戦争中を考えてみたらどうなるか。まず「大日本帝國憲法」という絶対的なマニュアルがあり、それに基づいてより日常的な「戦陣訓」「教育勅語」「戦時標語」等のサブマニュアルが作られた。インフラとしては各種兵器、飛行場、軍港、軍需工場、防空壕などがあった。さらに戦略としては、大東亜共栄圏や八紘一宇などの長期的・世界的なも

のが構築されていた。

村上氏の考えは、権威によるコントロールが最高度に機能していた世の中にも共通する面がある。

自由選択という前提

しかし、村上氏の考え方がそのまま戦時体制に通用するとは、いくら何でも考えにくい。ここから後のことは本に書かれていないので想像である。したがって、村上氏本人の意見とは食い違っているかも知れない。その点を含んで読んでいただければ幸いである。

コントロールが権威からコミュニケーションにシフトした際、「マニュアル」「インフラ」「戦略」はどうあるべきか。おそらく、社会のみんなが、つまりは大人も子どももそれらを自由に選べることが大切にされるのではないだろうか。

コミュニケーションが機能するために用意される三つの要素ではあるが、まず、それらに従うかどうかは個々人の自由であることが、いまの社会では前提となる。好きなら従えばいいし、いやなら無視してもよろしい。得になると思えば従えばいいし、損が見込まれれば無視してよろしい。もっとも、なるべく多くの人が従った方が世の中はまとまり、落ち着くだろうから、おおぜいの好みと利益に合うように整備される。その整備は、多くの人の民主的な話し合い、民主的な手続きをへてなされる。そこに参加できるためには、知識を身につけ、発言力を持つことが必要である。なるべく多くの要求を出して、自分の願いがかなえられるように努力する。その過程で活発にコミュニケーションがなされ、さらにできあがった整備によってコミュニケーションが促進されるという好循環が期待される。

つまり自由な選択という前提に立った上での「マニュアル」「インフラ」「戦略」である。このように考えてみたが、どこまで村上氏の真意に迫り得ているだろうか。もっとも、村上氏の考えを批判検討することがここでの主目的ではないので、あまり細部にこだわる必要はない。今まで考えてきたことに基づくと、ここで述べたことが現代社会に当てはまる余地は大きいと思う。

自由な対話

このように考えてみると、いまの世の中で期待されているコミュニケーションとは、「自由な対話」だと言えるのではないだろうか。

この「自由」には、いろいろな意味があり得る。まず、言いたいことが制限されない、いわゆる「言論・表現の自由」がある。これは、「誰に何を言ってもかまわない」という自由にもつながる。およそ人間同士は、お互いが完全に対等であることが求めらている。すると、対話の後、双方が合意する可能性と決裂する可能性とは、まったく五分五分である。どちらに転ぶことの自由も保障されている。いちおうは合意が目ざされるかも知れないが、そこに対話の筋道を規定し、束縛する力はない。気に入らなければいつでも椅子を蹴って立ち上がる自由が、誰にも与えられている。これが大規模になると、WTO（世界貿易機関）総会、地球温暖化防止会議等、世界規模での対話が難航し、決裂することが起きる。

さらに、発言・対話方法の自由も拡大した。小学生でも、総理大臣とＥメールを使って直接対話できる。この場合アポイントの必要はない。そのかわり、直接顔を見たり、言葉を交わしたりしなくても簡単にコミュニケーションがとれるようになったため、その結果として、逆にコミュニケーションが不成立に終わる可能性も大きくなった。E メールについては先ほども書いたように、受け取ったメッセージに対して返信を出さなければ対話は成り立たない。パソコンを通してではなく、面と向かったときに相手を無視することは、人間そうそうできることではない。たとえ電話であっても、相手が一方的にしゃべるのに任せておいて、こちらはだんまりを決め込むというのは、かなり難しいことである。

しかし、対話方法の種類が増えて、選択の余地が広がるほど、対話を打ち切る機会も同様に増えてきた。そうなると、昔と違って、面と向かっている相手を平然と無視できる人間も出現してくる。

たとえば、いつか読んだのだが、ある高校で全校集会があったときの話がある。会が終わり、みんながぞろぞろと教室に戻りかけたとき、一人の先生が、ある男子生徒が土足のまま体育館に入ってきていたのに気がついた。先生は生徒のそばに行き、ごくおだやかに「おいキミ、土足のまま入って来ちゃいかんだろう」と声をかけた。しかし、生徒はまったく聞こえていないかのようにこちらを向かず、表情も変えず、視線も動かさない。そのままに黙って歩き続ける。「キミ、土足はイカンのだよ」、先生はもう一度言った。生徒は相変わらず無言、無表情である。「キミ、聞こえているのかい？」先生は生徒の肩をポンと叩いた。すごいのはここからである。突然生徒は先生の方に振り向き、ものすごい形相で怒鳴り散らした。

「痛えじゃねえかナニしやがんだよこの暴力教師！　肩のホネが折れたらどうすんだ、

責任とれんのかよ！　教育委員会に訴えて、てめえのことクビにしてやってもいいんだぞコノ馬鹿野郎」

先生はこの豹変に唖然呆然、とっさには二の句が継げない。生徒は言うだけ言うとそのままサッサと歩いて行ってしまった。

自由なコミュニケーション（？）の究極の一形態としては、こんなものもあり得ることになってしまう。

これは、この生徒にコミュニケーション能力がないために起こった出来事なのだろうか？　それはそうかも知れない。しかし、考えようによっては、現代的なコミュニケーションがほぼ完璧に身についたからこそ、こんなことになったのではないだろうか、とも思うのだ。

コミュニケーションの進化と貧困

コミュニケーションの方法が進化すればするほど、逆にコミュニケーションの中味が貧しくなってしまうことが、いま現実に起きている。そうなると、時がたつにつれて、「コミュニケーションとは、しょせんそんなもの」と考える人が世の中にどんどん増えていくから、コミュニケーションの貧困化はさらに進む。

その一方で、コミュニケーションの貧しさにストレスをためる人もいる。先ほど紹介した高校の先生など、ひょっとしたら「こんな仕事もう辞めてやる！」と考えたかも知れない。話しかけても反応がなく、返ってくるのは罵声だけ、という状況になったら、平静を保っていられる人はまず皆無だろう。ひきこもり者の家族は、その多くが日常的にこの状況を抱えていると考えられる。

コミュニケーションを失うことでストレスがたまる。そのストレス解消にはいろいろな方法があるだろうが、最終的には失われたコミュニケーションを取り戻すしかないだろう。かくて、新たなコミュニケーションの手段が次々に発明され、生産されることになる。しかし、その多くは「対面しなくてもコミュニケーションを可能にする機械や方法」である。これでは結局もとの黙阿弥だ。

現代人の多くは、まるで麻薬中毒のように「コミュニケーション中毒」になってしまったのではないか。一時的なコミュニケーションの快楽を求めて、さまざまなものに手を出すが、すぐに以前より倍増した寂しさや不安、焦り、倦怠、絶望などに襲われてしまう。新たに取り入れるものが増えるほど、かえって禁断症状は重くなっていく。

人間にとってのコミュニケーション

いったい、人間に心からの安心と幸せをもたらすようなコミュニケーションはあるのだろうか。あるとすれば、それはどのようなものなのだろうか。

いま、コミュニケーションと言えば、それはほとんどの場合「話す」ことである。E メールが普及して、書き言葉や画像でのコミュニケーションがとても便利になった。しかし、それは話し言葉が目に見える形に変えられたのだから、あくまでも「話す」ことのバリエーションである。つまり、言語コミュニケーション、すべて英語にすればバーバル（verbal）・コミュニケーションである。聞こえや話すことに不自由がある人は手話を使うが、これも言語コミュニケーションの一つである。

一方、コミュニケーションには言語を介さないもの、いわゆる非言語、ノンバーバル（nonverbal）・コミュニケーションもある。「目は口ほどにものを言い」ということわざがあるし、「背中が泣いている」とか「頭から湯気が立つ」などという表現がある。いずれも、ことばにしなくても気持ちが表れたり伝わったりすることを言う。

こういう非言語コミュニケーションが大切だと考える人は多い。特に子どもが小さいうちはことばが十分発達していないが、何も思っていないわけではないのだから、表情や身振りに表れたものを十分に汲み取ってあげなくてはいけないと、よく言われる。しかし、いつまでたっても非言語コミュニケーションでよしとされるわけではない。子どももそのうちに「ちゃんと」「ことばで」言うように求められる。それができないと「お兄（姉）ちゃんでしょう、しっかりしなさい」「あらら、赤ちゃんになっちゃったのねえ」と言われてしまう。非言語コミュニケーションは、言語コミュニケーションの前段階か、付録のように考えられることが多い。非言語コミュニケーションの方を重要視するのは、言語心理学者や発達心理学者など、一部の専門家に限られるのではないだろうか。特に、世のお父さん、お母さん方は大部分が「しゃべれなくちゃどうしようもない」と思っている。

しかし、コミュニケーションは、しゃべり合うことだけでは十分とされない。「口から先に生まれてきたような奴」という言い方があって、これは、「しゃべる」ことが案外信用されていない証拠の一つである。

やはりそこに「こころがこもっている」ことが何より大事だと、多くの人が考えるだろう。では、この「こころがこもっている」とはいったい何なのか。どういうコミュニケーションが「こころのこもったコミュニケーション」で、どういう人が「こころのこもった人」なのか。

人間だけが持つこころ

動物にはなくて、人間だけが持っている「こころ」は、他者へのやさしさや思いやりである。チンパンジーやイルカやイヌの方が、人間よりずっとやさしいと思う人がいるだろう。そう考えるのは自由だが、動物が示す親愛の情は、人間のものとはまったく異質である。

人間はサルから進化した。いつまでがサルで、いつからが人間（の直接の祖先）なのかは、完全にはわかっていない。そこには有名な「ミッシング・リンク（失われた鎖の輪）」がある。近ごろも新しい化石の発見が相次いでいるので、人類の歴史は少しずつ年代をさかのぼっているようだ。その中でも、完全にはっきりしている最初期の人類は猿人と呼ばれており、だいたい五百万年前にアフリカに出現したアウストラロピテクスがこれにあたる。

チンパンジーが石を使って木の実を割ったり、草を釣り竿にしてシロアリを釣るなど、けっこう上手に道具を用いることはよく知られている。しかし、この行動は群れによって差があるらしい。その点、アウストラロピテクスは石器を作って使用していたが、その行動はすべての成員に広まっていた。このことから、アウストラロピテクスには言語コミュニケーションと知覚の能力がきわめてよく発達していたと考えられている。

猿人の次に現れるのは五十万年ほど前の原人で、シナントロプス（北京原人）、ピテカントロプス（ジャワ原人）などが知られている。原人はさらに進化し、十数万年前には旧人が出現する。代表はネアンデルタール人である。ネアンデルタール人は、グループ内に死者が出ると、その遺体を埋葬し、周囲を花で飾っていた。遺骨と一緒に、花粉の化石が大量に出土している。

人類は二本足で歩き、言語をあやつり、道具を作成し、火を用いて、動物にはない「人間らしさ」を徐々に獲得してきた。そしてその決定的な転機が、仲間との別れに涙を流し、長老や勇者を敬い、善を愛して悪を憎み、大いなる大自然の力を畏敬する「精神」を宿したことである。その精神の根底をなすのが「こころ」であり、哲学的な言い方をすれば「他者性」である。こころの有無が、人間と動物を決定的に分けている。

人類はその後、新人（代表はクロマニョン人、五万年ほど前に登場）に進化し、さらに氷河期が終わった一万年ほど前からは現生人類が活動するようになった。

人間の人間たるゆえん

ネアンデルタール人は、お墓に花を飾ることを多数決で決めたわけではない。どこに埋葬するかとか、どんな花にしようとかは相談したかも知れないが、風習そのものはいつの間にやら、当人たちにもわからないうちにできあがったものである。

これを本能と呼ぶには、少々苦しいところがある。遺体を埋めようがどうしようが、生きている者の生活には、何らプラスにならない。そんなことをするヒマがあったら、マンモスを追っかけている方がずっと合理的である。しかし、ネアンデルタール人たちは、何やら正体不明の気持ちに突き動かされて、どうしてもお墓を作らずにはいられなかった。誰からも強制されていないし、得になることは一つもないのに、なぜかそうしてしまう。そしてそれは物好きな連中の道楽ではなく、あらゆる人々の間にくまなく行き渡って、大切な儀式となった。考えてみれば不思議なことである。

生まれつき人に心を向け、損得抜きで他者に尽くそうとする、これこそ人間だけがもつこころである。人間の人間たるゆえんはここにある。

しかし一方で人間は、いつも他人のことばかり考えて、他人のためにだけ生きているわけではない。自分だっておなかいっぱい食べたい、ぐっすり眠りたい、もっと快適な暮らしがしたい、自分の思い通りにことを運びたい、という願いも、当たり前のようにもっている。

人間は、心の中の「他者」と「自分」との間を揺れ動きながら生きている存在である。どちらに傾きすぎても、こころのバランスが崩れてしまう。うまくつりあいをとって、ちょうど真ん中を生きて行ければ望ましい。

「真ん中」を生きていられると、自分のためにしていることが、実はそのまま他者のためにしていることに等しくなる。勉強や、仕事や、家事や、育児などを、一生懸命にひたすらがんばる、そのことが自分のためでもあり、そしてまったく同じように相手のためでもある。目の前に見えている人でなくても、世の中に生きている人々の幸せや喜びを願って、ひたすらに努める。さらに進んで、自分のためにしているのか、人のためにしているのかなど、いちいち意識しないで仕事に打ち込む。このように、みごとにこころのバランスがとれれば、それこそまさに「こころがこもっている」と言うにふさわしい生き方になろう。

そのとき、その人にとっては、他人の喜びがそのまま自分の喜びであり、他人の悲しみがそのまま自分の悲しみとなっている。どんな人とでも、自然とこころが通じ合っていく。

そこにことばが語られるときがあるだろうし、無言のまま、しみるようにこころが通い合うときもあるだろう。これこそがコミュニケーションの極致ではないだろうか。

人間のコミュニケーションは、単なる情報のやりとりではない。それならば動物にも、植物にすら可能なことである。ケムシやイモムシに葉っぱを食い荒らされる植物は、特殊な化学物質を空気中に放出して、仲間に身の危険を知らせる。それを受け取った他の植物は、これまた何やらの防除物質を出して、ムシを追い払う。これは一種のコミュニケーションである。肉食動物に襲われそうになった草食動物の群れは、鋭く鳴き交わして危険を知らせ合う。ハンターである肉食動物の方にも、お互いに連絡を取り合い、チームプレーで獲物を追いつめる者がいる。これらはどれも、立派な情報交換である。しかし、単なる情報の交換でしかない、という言い方もできる。

人間にしかできないコミュニケーションは、人間しか持っていないこころを伝え合うことである。

民主主義とコミュニケーション

民主主義が「こころ」を基本にしない社会制度であることは、すでに考えてきたとおりである。少しだけまとめて振り返っておくと、次のようになっていた。

人間は自然状態で放っておかれると、お互いが相手に対してオオカミになり、悲惨な修羅場が出現する、と考えられた。ここですでに、他者への配慮や思いやりという本来の人間らしさが顧みられていない。ネアンデルタール人と近代～現代人とを比べたとき、人柄のいいのはどちらか、怪しいものである。

とにかく、万人の万人に対する闘いが人間の本性であるとされた。だからそこに、理性による社会契約を結び合う必要が生じる。「私は自由を侵されたくないし、殺されたくもない。私がそう思うように、あなたもそう思うはずだ。だからお互いに悪いことはやめましょう」という約束である。約束が守れるようになるためには、それを勉強し、覚えなければいけない。特に子どもは無知な状態で生まれてくるのだから、教育やしつけで世の中のルールを学ばせる必要がある。こうして、誰もが自分の自由と権利、そして他人の自由と権利を尊重できるようになれば、世界に平和が実現するというのが、民主主義の基本的な考え方である。

民主主義社会においては、この約束の守り合いと確認作業が必要で、それがコミュニケーションとして意味づけられる。それはどうしても、自分の利益を守るための手段に傾い

ていかざるを得ない。自分の利益と同じように他者の利益も尊重する、という考え方では、どうしても「人様」のことは二の次になるからである。

現代的なコミュニケーションが発達すればするほど、人は自分のことしか考えなくなって、他者性を失ってしまう。つまり、人間の人間たるゆえんが薄れていくわけで、実に皮肉な現象である。

宗教がある海外では、神が人間の理性に働きかけて、利己主義に傾こうとする民主主義社会に、強力なブレーキをかけてきた。日本の場合は半世紀以上前にそのブレーキがとれてしまったので、暴走は止めようがない。

その暴走の中で、多くの日本人がストレス、恐怖、不安を増大させた。コミュニケーションにその救いを求めるが、「こころ」のないコミュニケーションの発達が、逆にそのストレスを高める方向に作用してしまうのだから困ったことである。ブレーキとアクセルの踏み間違えに近い。

ひきこもりとコミュニケーション

ひきこもる人は、切実にコミュニケーションを求めている。その飢餓感や焦燥感は、おそらく当人にしかわからないものだと思う。

ひきこもりは言うなれば、本人が「好き」でやっていることなので、表面的にはコミュニケーション嫌いに見える。中にはコミュニケーション嫌いを自認しているひきこもりの人もいよう。しかし、たとえそういう人でも「これでいいのだ」とは言えない。親はさじを投げ、友だちとは音信不通になり、精神科医は首をひねり、カウンセラーは「じっくりひきこもってみたら？」と言う。これは、ひきこもるのには理想的な環境である。断っておくが、決していやみで言っているのではない。

しかし、そういう中で、ひきこもる人は一人静かに、こころ穏やかに過ごすわけにはいかない。耐え難い飢え、渇き、焦りにさいなまれ、親を恨み、世間を憎み、学校を呪い、友だちをうらやむ。程度の差はあっても、たいていのひきこもり者はどれかに当てはまるだろう。

そして、いくらパソコンや携帯電話が普及して、ひきこもったままのコミュニケーションが可能になっても、それは解決にならない。いままで本、雑誌、文献、ホームページなどを見た限りでは、インターネットやＥメールによって、ひきこもりが根本的に解決したという例には出会わなかった。せいぜい、多少のガス抜き程度の効果にとどまっているよ

うである。

人間は、誰かとこころが通じ合うという、本当のコミュニケーションができない限り、生きていけない存在である。表面上のおしゃべりがいくらにぎやかになっても、そんなものは屁にもならない。そして、コミュニケーションするというのは、他者を受け入れることである。ということは、根本的に自分の都合より他者の都合を優先しなければ、本当のコミュニケーションは成り立たない。自分が利益を得るためにコミュニケーションをするのでは、最初から本末転倒なので、うまくいかなくて当然である。

ひきこもっている人にきびしいことを言ったら気の毒だが、「助けてもらおう」「慰めてもらおう」「何とかしてもらおう」と思ってコミュニケーションを求めても、それは無理というものだ。コミュニケーションはその正反対で、「助けてあげよう」「慰めてあげよう」「何とかしてあげよう」と思って、相手に積極的に関わっていくところにしか生まれないものだからである。

これをひきこもっている人にいくら言っても無理なことは重々承知している。それができるくらいなら、最初からひきこもりなど起きない。ひきこもる人は、親が悪かった、学校が悪かった、先輩や友だちが悪かった、世間が悪かった、こんなふうに考えていることが多い。どれか一つくらいは当たっているだろう。望んでひきこもっているわけではないのだから、確かに本人のせいではない。しかし他の人や社会の側にしても、その人をひきこもらせようと画策したわけではないのだから、「こちらのせいにされても困る」と言うはずである。これでは責任のなすり合いで、埒が明かない。

結局、あらゆる人が、どこかで、何らかのレベルで「生きている」ことの意味と責任を感じ、あるべき生き方を考え直す以外にはない。さて、しかし、それがこれからの日本に、どのくらい期待できるのだろうか。

Ｘ　どうなるひきこもり

ひきこもりが増える要素

ひきこもりの人数は、おそらく今後も増え続けるだろう。増加の上昇率とか、下降に転じる可能性とか、最高何百万人までは増えるだろうとか、そういった細かい予測はできない。しかし、現時点では、ひきこもりが減る要素が、どこをさがしても見当たらない。反対に、増えそうだという予想の根拠は、あげだしたらきりがないほど見つかる。

ひきこもりの原因の一つが親子関係、家族関係にあることは、まず間違いがない。親を非難するとかしないとかには関係なく、その事実は動かせないであろう。

現代の親子関係を象徴するものの一つが子どもへの虐待である。厚生労働省は 1990 年から児童虐待の統計を取り始めたが、児童相談所が受け付けた虐待に関する相談は、2000 年までの十年間で約十七倍に増えたという（2001.6.22.　読売新聞）。尋常ではない急増ぶりである。しかも、社会的に明らかになった件数に限られているわけなので、「バレていない」潜在的な虐待を含めたら、一体どれほどになるのか。

統計上、虐待は「身体的（殴る蹴るなど）」「ネグレクト（ほったらかし）」「心理的（ことばで追いつめるなど）」「性的」の四つに分類されている。また、虐待する人間は約六割が母親、二割強が父親である。

虐待のニュースに接した母親の多くが、「虐待する気持ちがよくわかる」「私もいつするかわからない」という感想を持つ。正直と言えば正直だが、「あんなひどいことをするなんて気が知れない」と思う人ばかりではないというのは、果たして正常なのか異常なのか。虐待の心理に共感できるというのは、はっきり言ってかなり危険である。「虐待は、あって当たり前」という風潮になったら、子どもはたまらないだろう。

しかしながら、その風潮はいまや常識になりつつある。虐待があることを前提として認めた上で、なるべく減らすか、軽いものにしていこうとするのが共通認識のようだ。確かに、家庭から暴力を完璧になくすことは難しい。しかし、「難しい」ことと「実現しなくていい」こととは違う。「虐待は誰でも起こし得る」という言い方が、いまは免罪符になっているふしがある。「誰でもするんだから、ワタシがするのだって当たり前なんだ。虐待するのが普通なのよ」という発想が芽生える。

虐待が増え続けているのに、それと同じくらいに深刻な家族の問題であるひきこもりだけが減ることは、まずあり得ないだろう。

不登校

虐待よりも以前から問題になっているのが、不登校である。現在は、だいたい十三万人くらいの小中学生が不登校状態にあると言われている。そしてこれもまた虐待と同じく増加の一途をたどっており、減少のきざしはまったく見られない。毎年統計が新しくなるたびに、一万人、もしくはそれ以上の「新規不登校児童・生徒」が積み重なっていくようである。

ひきこもり者の九割は不登校の経験者と言われるから、単純に考えたら、ひきこもり者は一番少なく見積もっても一万人程度は毎年確実に増えていく。さらに、ひきこもりは回復がものすごく難しい。本人や周囲は何とかしたいと必死なのだが、何しろ部屋や家から出られないので、前向きな対策が立てられないケースが大多数である。幸い抜け出すことができても、そのときには数年が経過している。このような状態の中、ひきこもり者はどんどん「蓄積」していく。

蓄積適応社会

不登校は、次第に「なって当然」と考えられるようになってきた。「当然」が言い過ぎならば「ある程度当然」と修飾語をつけた方がいいだろうか。

いまのように高度なストレス社会、管理社会、不自由社会の中では、子どもたちが「ヘン」になって当たり前だ。いや、そもそもヘンなのは子どもたちではなく社会の方である。子どもたちに合わせて、社会が、学校が、大人が変わらなければならない。こう考えられ始めて久しい。

こういう見方になると、不登校の子どもやひきこもりの人が蓄積してきたのは、かえって世の中がマトモになってきた証拠だということになる。いままでおかしかった世の中がマトモなものに生まれ変わろうとしており、それには産みの苦しみが伴う。いま、多くの人が頭を抱えて悩んでいるのは、産みの苦しみゆえである。不登校やひきこもりが当たり前になってこそ、多くの人が自由に、のびのびと生きられる社会が実現できたことになる。彼らを変えるのではなく、周囲が変わろうという考え方だ。蓄積適応社会が志向されている。

不登校児に対しては、フリースクールやホームスクール等の、新しい学校形態が次々と生まれている。もっとも、これは日本の専売特許ではなく、おもにアメリカを中心とした諸外国で急速に広まっているものを日本でも取り入れているものである。不登校は、たい

ていの先進国が抱える深刻な問題である。

一方、ひきこもりは日本だけに特異な現象だ。海外の先進的な対応策など、さがそうにも存在していない。歴史の上で、初めて日本が独自に、先頭に立って世界に示した文化でもある。世界はみな、あっけにとられてこの状況を見つめている。まことに皮肉だが事実である。

日本社会は独力で、そして手探りで、この未知の状況に対応しなければならない。基本的な方針は、ひきこもりを認め、受け入れることで固まりつつある。直したりなくしたりするような考え方は、時代に逆行していると考える人が多い。

ひきこもった状態を許容したまま、生産的な活動をする（させる）ことが必要になってくる。となると、いまのところ最大の可能性が考えられるのは、インターネットの活用である。しかも、日本の産業構造は大変化している最中で、情報を商品にする以外に生き残りの道はないと考えられている。これならばひきこもったままでも働ける。社会とひきこもり者、双方に利がある。

さらに、いま以上インターネットが普及・定着すれば、コミュニケーションはそれで十分にとれると考えられている（ただし、今まで考えてきたとおり、本当はそれが大間違いである）。

権威などない、という権威

以上のような考え方に異論を唱える人もいるが、そういう場合はたいてい「権威主義者」というレッテルを貼られてしまう。目下の情勢では、相当に旗色が悪い。実はレッテルを貼る方も、「『権威などない』という権威」をカサに着ている。しかし、不思議なことにそれを言う人は一人もいない。

権威ということばを、もっと軟らかくとらえて、共通した意味をもつことばをさがそうとすると、たとえば伝統、規範、常識、習慣などが思い浮かぶ。いずれも、多くの人をその下に従わせるものである。

これらは、時間の流れで考えると、どれもみな過去に属するものである。いま現在より以前に、多くの人がなしてきたおこない、そしてその中でも人々にとって意味のあったものが伝統などとして受け継がれてきた。もちろん、自分自身の行為も、過ぎてしまえば巨大な過去の中に一部として位置づけられる。

過去は、自分自身の思いではどうにもならない。動かせないし、変えられない。そして、

「過去に縛られる」と言うように、時としてそれは人を束縛し、重くのしかかってくる。

しかしその反面、人は過去があるから、安心していられる。記憶喪失症がどれほどの不安や恐怖をもたらすものか、たいていの人には実体験がないので想像するしかないが、テレビドラマや小説、マンガの主題としてはしょっちゅう取り上げられる。過去を失ってしまった人は、よるべなき根無し草になってしまう。

人間は、過去という足場に立った上で、未来へ向かい人生を歩んでいく。記憶を失った人は、行動するそばからそれらが消え去ってしまうので、一貫した時間の流れを見通すことができない。「いま」という一瞬しか、その人の意識にはのぼらない。つまり、過去を失った人には、同時に未来もないことになる。

時間というものから逃れられないのは、すべての人間の宿命である。どんな人であっても、その人自身の過去という足場に立っている。そしてまた、その足場があるからこそ、いまという時が充実したものとして実感でき、未来に向かって歩みを進めることができる。

権威の否定に躍起になる人は、実は自分で自分の足元を掘り崩している。何にも頼らず、支えも求めず、いま現在、自分だけの足で立っていようとするのであるが、実はそんなことできるものではない。できないことを一生懸命にやろうとするものだから、そのことに意味があるのかどうかわからなくなってくる。

それは結局、何のために生きているのかがわからなくなることだ。2001 年 5 月 15 日、福岡の女子高生二人が東京で飛び降り自殺をしたが、遺書めいたメモには「理由はない。強いて言えば疲れたから」「死ぬ理由はないけど、生きる理由もない」と書かれていた。まさに彼女らには、過去も未来もなかった。その結果、充実した時間としての現在も失われてしまう。

時代の変化に対応する

「時代の変化に対応する」とは、いましょっちゅう聞かれることばである。政治も経済も、教育も子育ても、とにかく社会のあらゆるものは、時代の変化に対応することが求められる。

これは、別のはっきりした言い方に変えれば、「過去を切り捨てる」ことである。いつまでも過去に縛られていては、未来に向かって進んでいけないと考えられている。ところがどっこい、ここで考えてきたように、人間は過去を切り離してしまったら、未来に向かうどころか、一歩も動けなくなって立ちすくんでしまう。

身近な例で考えてみる。サラリーマンや OL が昼食をとる時には、連れ立って出かけることが多い。昨日まで仲良く食事をしていれば、誰だって明日も、明後日も同じ、と考えるのが普通である。だから、用事があって一緒に行けない時には「ゴメン、今日はこれこれこういうわけで、ダメなんだ」と、理由を言って断る。言われた方も「そう、じゃまた今度」と答えて、丸く収まる。

これが、昨日までのいきさつや成り行きを一切無視して、「え？　メシ？　お前と俺が？何でそうなるの？　行きたきゃ勝手に行けばいいだろ」、いきなりこうなったらどうなるか。言われた方はびっくり仰天、目を白黒させて返事もできない。「何があったんだろう。怒らせるようなことを言ったかな・・・」と気になって、ゴハンはのどを通らない。そして次の日、前日つっけんどんに断った人が今度はニコニコしながら寄ってきて「やあ、お腹空いたねえ、お昼一緒にどう？　どこ行こうか」などと言おうものなら、またまた椅子から転げ落ちそうなほど驚くことになる。前日とはまた違った意味で、気持ち悪くて食事どころではない。そのまた翌日には、もう朝から昼食のことが心配で仕事が手につかないだろう。

実際、若い会社員の間には「ランチメイト症候群」というのが広まっているのだから、これは笑い話ですまなくなっている。つまり人間は、過去から未来に至る一貫した時間の流れを承知していないと、生きていることすらが危うくなってしまう。

変化への即応を至上とする社会の中で、平静を保って生きていこうとしたら、できるだけ人と関わらず、人を信用せずにいるしかない。もちろん、少しばかり極端なことを言っているのだが、まったく荒唐無稽な話でもない。この兆候はいろいろと現れ始めていて、そのもっとも象徴的な一つがひきこもりだと考えられる。しかし、いままで何度も繰り返してきたように、他者との関わりを絶って、自分一人で平静に過ごそうとしてみても、かえって不安は増大する。人間はそういうふうに生まれついているのである。そこが動物と違うところだ。

もちろん、変化せずに停滞していればよいというわけではない。変化を恐れない勇気が求められる時もある。反対に、やすやすと変化はしない安定感が必要なときもあろう。要はバランスが肝心である。そして、そのバランスをもたらしてくれるのは、他者との確かなつながりである。意識が自分に集中してしまい、いつでも何でも自分最優先なのでは、逆に周囲に振り回されて、あっちにフラフラ、こっちにヨロヨロということになってしまう。

このつながりが、日本では「甘え」であり「和」であった。甘えや和には弊害もあった。それは仕方のないことである。この世のあらゆるものは裏表があり、光があれば影もある。表や光の部分だけを利用しようとしても、なかなかそう都合よくは行かない。しかし、その都合よさが通用すると勘違いしてきたところに、いまの問題が噴出している。

どうやって生きていくのか

ひきこもりに対して、あまり前向きな見通しは立てられない。それならいっそのことひきこもりの増加を逆手にとって、それこそが日本の、人類のあるべき姿なのだとポジティブにとらえようとする人々が出てくる。実際そういう考え方は広がりつつある。人間の本来的なあり方を基本にして考えれば、ひきこもりこそがマトモなのだという社会になったら耐えられないという人がほとんどだろう。いまの社会は、ひきこもりをマトモと見るのか困った事態と見るのかの、ボーダーラインに位置しているように思える。

民主主義の原理をここに持ち込めば、みんながマトモと言えばマトモになるし、みんながダメと言えばダメなことになる。そんなんじゃ困ると言う人は多いだろうが、現実はそうなっているのだ。

結局ひきこもりの問題は、多くの人の生き方の問題である。それが変わるというのは、並大抵のことではない。それこそ、天地がひっくり返り、それまでの常識が非常識になるような、たとえば太平洋戦争の終戦のようなことが起きない限り、いまの状態は続くであろう。そうであれば、ひきこもりはどんどん蓄積して、定着していく。

このあたりのことを言ったり書いたりするのが行き過ぎると、危険思想と思われるであろう。むろんのこと、わたしたちは、危険ではなく、平和を望んでいる。だからこそ、悩みは尽きない。

終わりに

ひきこもりは、生ける日本人論であると言われる。ひきこもりは日本にしか見られない現象なのだから、確かにそれはその通りであろう。では、現代日本人について考えるためには、何を題材にしたらいいのか。本書ではそれを民主主義に求めた。

民主主義についての本や意見は多い。その問題点や危険性を指摘する声も高い。しかし、おそらくはその大部分が、問題を、民主主義がいまだ未完成である故に見出そうとしている。本当の民主主義が完成すれば、もろもろの困難が一挙に解決されるはずだというのが、おおかたの結論と言えるだろう。

われわれにはどうもそのように思われないのだ。どの時点を民主主義の完成と呼ぶのかという問題はあるが、とにかく民主主義が限りなく絞り込まれたその焦点に、ひきこもりが生じたように考えられる。

ひきこもっている本人やその家族の中で「こんなふうになってしまったのは世の中のせいだ。世間がもう少しマトモだったらこんなことにはならなかった」と考えている人は多いように思われる。それは確かに一部当たっていよう。しかし、そう言って嘆いている人々もまた、世間の一員なのである。

およそ生きている限り、完璧に社会から隔絶されて生活することはできない。山の中に隠遁しようと、絶海の孤島に逃れようと、部屋の中に閉じこもろうと、無駄な努力である。みんなが吸っている空気を、自分も同じように吸わなければ、十分ほどで死ぬ。呼吸するだけで、人間はもうあらゆる他者とつながっているのだ。

この事実は人間を心理的に束縛する。そして、その束縛を最大限解き放とうとするのが民主主義制度である。

この本で述べてきたことが、読者の頭の片隅にでも引っかかってくれれば幸いである。

参考･引用図書および文献

土居健郎（1971）　甘えの構造.　　弘文堂

福島章編（2000）　こころの科学 93　人格障害.　日本評論社

フランク・A・ジョンソン，江口重幸・五木田紳共訳（1997）　　甘えと依存　ー精神分析学的・人類学的研究ー.　　弘文堂

樺山紘一・木村靖二・窪添慶文・湯川武編（1994）　クロニック　世界全史.　　講談社

狩野力八郎・近藤直司編著（2000）　青年のひきこもり　心理社会的背景・病理・治療援助.　　岩崎学術出版社

加藤正明・保崎秀夫他編（1993）　新版精神医学事典.　　弘文堂

勝山実（2001）　ひきこもりカレンダー.　　文春ネスコ

川谷大治（2000）　境界性人格障害とひきこもり.　精神療法 26(6)，pp564-572

衣笠隆幸（1998）　ヤングアダルトのひきこもり.　　臨床精神医学増刊号，pp147-152.

南博（1953）　　日本人の心理.　　岩波新書

文部省（1948）　民主主義（上・下）.　　教育図書

村上龍（2001）　　「教育の崩壊」という嘘.　　NHK 出版

武藤清栄・渡部健編（2001）　ひきこもり（現代のエスプリ No.403）.　至文堂

なだいなだ（1974）　　権威と権力　ーいうことをきかせる原理・きく原理ー.　岩波新書

中村元（1948）　東洋人の思惟方法　　第二部　日本人・チベット人の思惟方法.　みすず書房

中村元編（1983）　中公バックス　日本の名著２　聖徳太子.　　中央公論社

中塚善次郎（1994）　人間精神学序説　ー自他統合の哲学的心理学の構築とその応用ー.　風間書房

斎藤環（1998）　社会的ひきこもり　ー終わらない思春期.　　PHP 新書

塩路理恵子，久保田幹子，中谷敬（2000）　　神経質とひきこもり.　精神療法 26(6)，pp549-556

高橋三郎･大野裕･染矢俊幸訳（1995）　DSM-Ⅳ 精神疾患の分類と診断の手引き.　　医学書院

タマキ・R，山岡洋一訳（1995）　アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか.　　草思社

田辺裕他（2000）　　私がひきこもった理由.　　ブックマン社

田中千穂子（1996）　ひきこもり　－「対話する関係」をとり戻すために－.　　ライブラリ　思春期の“こころのSOS”＝７　　サイエンス社

田中千穂子（2001）　ひきこもりの家族関係.　　講談社＋α新書

融道男・中根允文・小見山実（1993）　ICD-10　精神および行動の障害　臨床記述とガイドライン.　　医学書院

氏原寛・小川捷之・東山紘久他編（1992）　心理臨床大辞典.　　培風館

不許転載